

## 第3章 集落の特徴

### 第1節 集落の構成

菅並集落の集落景観がどのような種別の建造物で構成されているかを把握するために、令和2年(2020)8月に行った菅並集落の現地調査から、各種建造物の分布状況を取りまとめた(図3-1-1)。

菅並集落における屋敷構えは、主屋(写真3-1-1)・土蔵(写真3-1-2)・隠居屋(写真3-1-3)・付属屋(写真3-1-4)などから構成されており、菅並集落には、主屋47棟、土蔵21棟、隠居屋31棟、付属屋29棟、外便所8棟、その他(車庫など)17棟が存在している(令和2年8月現在、表3-1-1)。目視による判断であるが、そのうち伝統的建造物は、主屋40棟、土蔵20棟、隠居屋17棟、付属屋5棟、外便所3棟である。建造物の種別ごとに、その建築的特徴をみていくこととする。

種別	棟数	
	全体	伝統的建造物
主屋	47	40
土蔵	21	20
隠居屋	31	17
付属屋	29	5
外便所	8	3
その他	17	0

表3-1-1 菅並集落の建物種別表



写真3-1-1 主屋 (047-1)



写真3-1-2 土蔵 (047-2)



写真3-1-3 隠居屋 (027-2)



写真3-1-4 付属屋 (021-2)

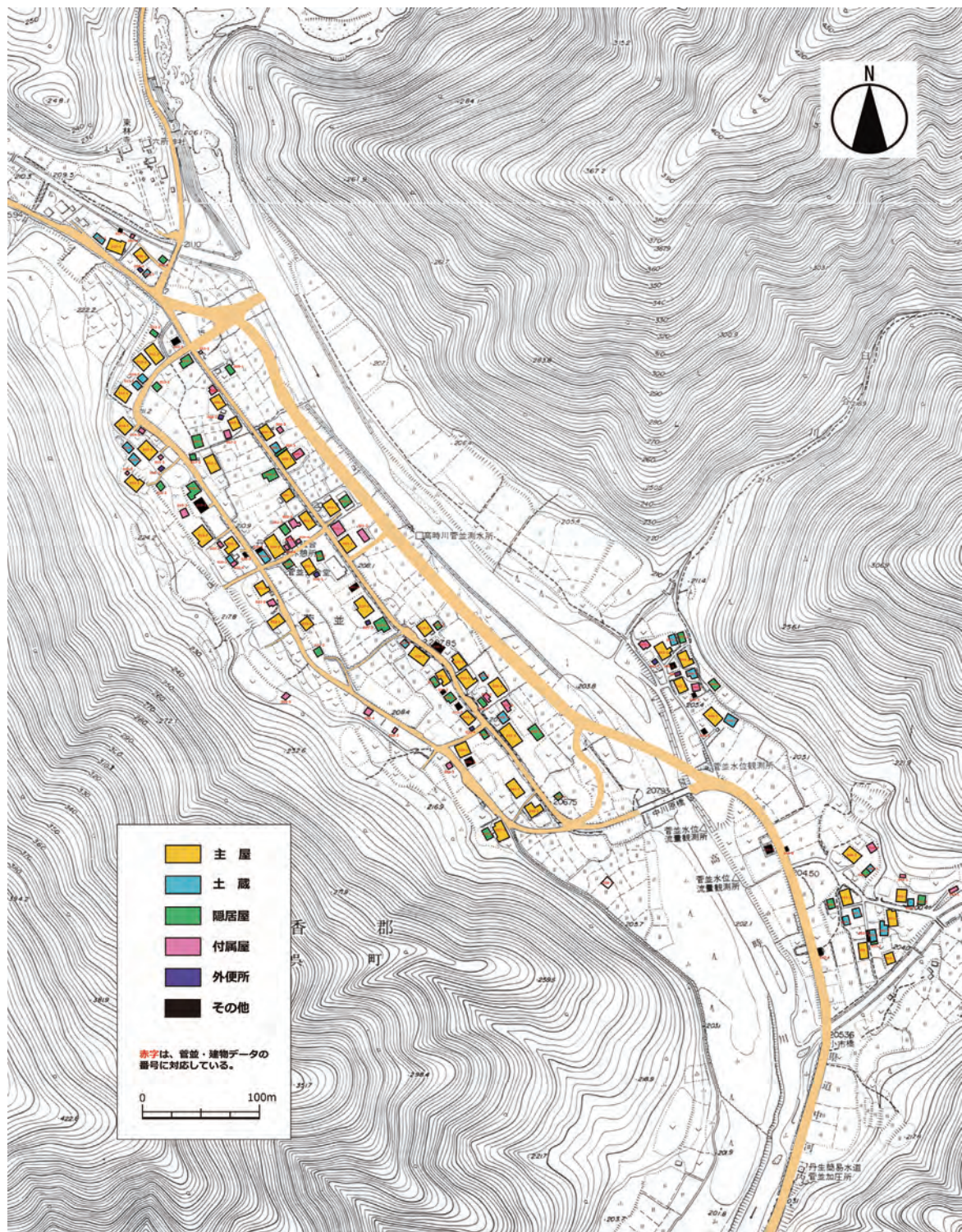


図 3-1-1 菅並集落の建物分布図

＜主屋＞

主屋の屋根形状をみると、入母屋造が最も多く、切妻造がそれに続いている（表3-1-2）。屋根素材別にみると、金属板被せの茅葺が最も多く、その次に瓦葺である（表3-1-3）。

また、屋根形状と屋根素材の組み合わせによる分類を行えば、4通りに分類することができる。最も棟数が多いのは、入母屋造・金属板被せの茅葺（写真3-1-5）で34棟、次いで切妻造・瓦葺（写真3-1-6）で11棟であった（図3-1-2）。その他は、切妻造・金属板葺、片流れ造・金属板葺が各1棟である（図3-1-2、表3-1-4）。元々、集落内のすべての主屋は茅葺屋根であったが、補修に多額の費用がかかることや維持・管理が困難であることなどの理由から、昭和40年代から50年代にかけて茅葺屋根に金属板を被せる屋根形式に変化していったようである。また、瓦葺屋根主屋11棟のうち3棟は当初の茅葺を後年瓦葺屋根に替えたものであり、主屋にはあまり瓦葺が普及していない。

入口の向きについては、妻入り37棟、平入り10棟（図3-1-3）であり、約8割を妻入りが占めている（表3-1-5）。また、出入口の向きは、南側に設けるものが38棟あり、妻入り

屋根形状	種別	棟数	合計
切妻	主屋	12	95
	土蔵	21	
	隠居屋	27	
	付属屋	24	
	外便所	8	
	その他	3	
入母屋	主屋	34	35
	土蔵	0	
	隠居屋	1	
	付属屋	0	
	外便所	0	
	その他	0	
片流れ	主屋	1	20
	土蔵	0	
	隠居屋	2	
	付属屋	4	
	外便所	0	
	その他	13	
陸屋根	主屋	0	3
	土蔵	0	
	隠居屋	1	
	付属屋	1	
	外便所	0	
	その他	1	

表3-1-2 菅並集落の屋根形状別表

屋根素材	種別	棟数	合計
瓦	主屋	11	44
	土蔵	14	
	隠居屋	15	
	付属屋	1	
	外便所	3	
	その他	0	
金属板	主屋	2	72
	土蔵	5	
	隠居屋	15	
	付属屋	28	
	外便所	5	
	その他	17	
金属板(もと茅)	主屋	34	36
	土蔵	1	
	隠居屋	1	
	付属屋	0	
	外便所	0	
	その他	0	
金属板(もと板)	主屋	0	1
	土蔵	1	
	隠居屋	0	
	付属屋	0	
	外便所	0	
	その他	0	

表3-1-3 菅並集落の屋根素材別表

屋根素材	種別	屋根形状				合計
		切妻	入母屋	片流れ	陸屋根	
		瓦	11	0	0	
金属板	金属板	1	0	1	0	2
	金属板(もと茅)	0	34	0	0	34
	金属板(もと板)	0	0	0	0	0
	合計	12	34	1	0	47

表3-1-4 菅並集落の屋根形状と素材の関係（主屋）

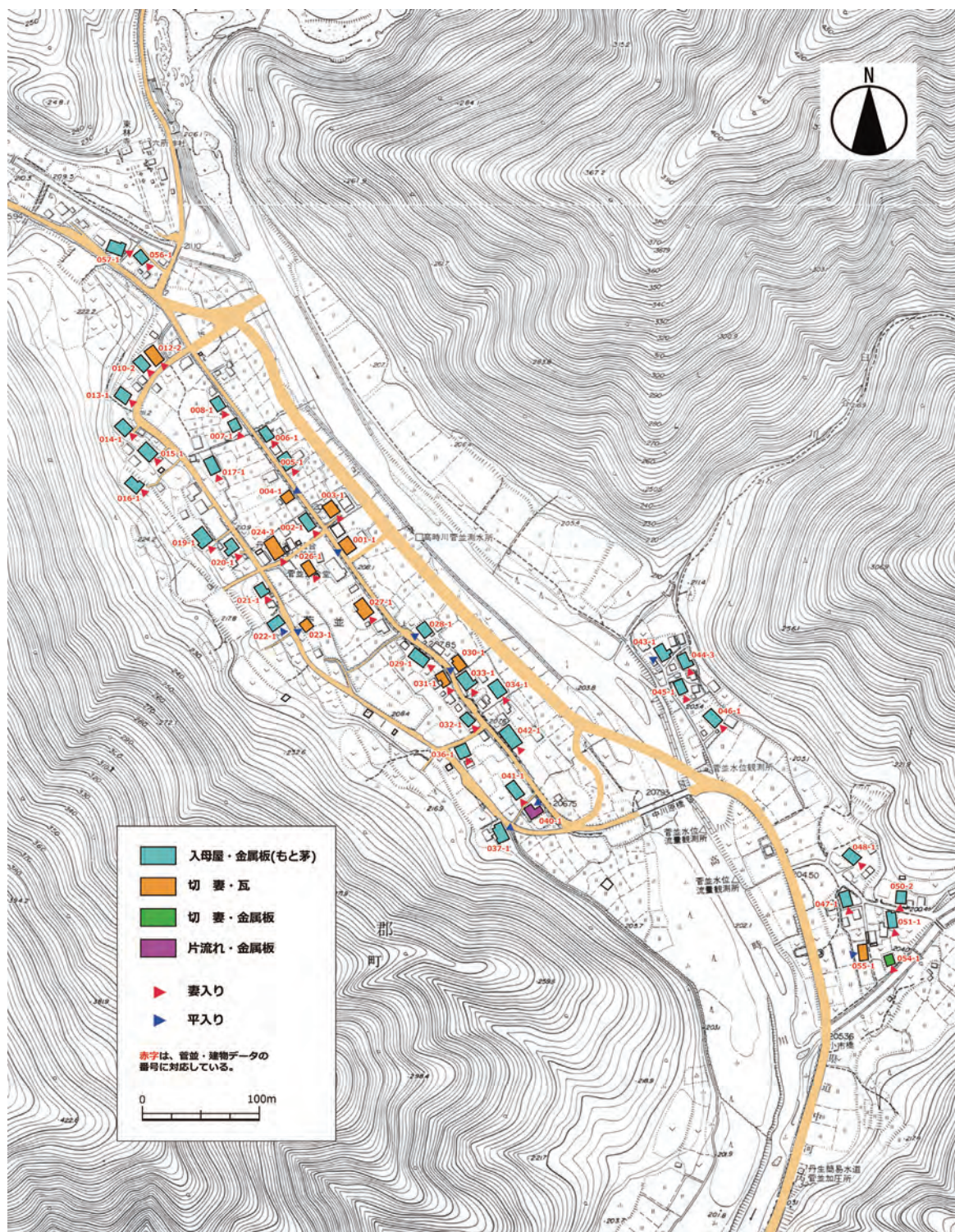


図 3-1-2 主屋の屋根形状・屋根素材・入口の向き

入口	種別	棟数	合計
妻入り	主屋	37	76
	土蔵	8	
	隠居屋	11	
	付属屋	15	
	外便所	0	
	その他	5	
平入り	主屋	10	77
	土蔵	13	
	隠居屋	20	
	付属屋	14	
	外便所	8	
	その他	12	

表 3-1-5 菅並集落の入口別表

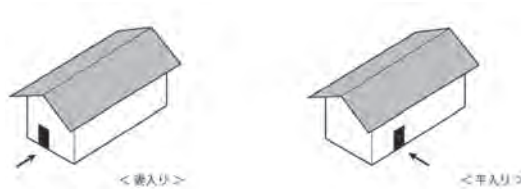


図 3-1-3 妻入り・平入り

37 棟はすべて南側入口である（図 3-1-2）。これは積雪量が多い菅並集落の気候に対応した配置、つまり、南側に設けることで出入口周辺に積もる雪を早く溶かすことができると考えられる。



写真 3-1-5 入母屋造・金属板葺（元茅葺）



写真 3-1-6 切妻造・瓦葺

#### <土蔵>

土蔵の屋根形状をみると、21 棟すべてが切妻造である（表 3-1-2）。屋根素材別にみると、瓦葺が大半を占めている状態であるが、金属板被せの茅葺土蔵（015-4）と金属板被せの板葺土蔵が 1 棟、それぞれ現存している（表 3-1-3）。入口の向きについては、妻入り 8 棟に対し、平入り 13 棟である（表 3-1-5）。なお、すべてではないが、切妻屋根の片側の妻面において、外壁の半間外側に板張りの壁を建て、ケラバの下を内部化し、物置として利用している土蔵が数棟みられる（写真 3-1-7）。

#### <隠居屋>

隠居屋の屋根形状をみると、ほとんどが切妻造である（表 3-1-2）。屋根素材別にみると、瓦葺と金属板葺ではほぼ 2 分する状態である（表 3-1-3）。金属板被せの茅葺隠居屋も 1 棟あったが、今回の調査中に取り壊されたのは残念である（写真 3-1-8）。



写真 3-1-7 ケラバ下を内部化した土蔵 (056-3)

入口の向きについては、妻入り 11 棟に対し、平入り 20 棟となり、平入りが多い（表 3-1-5）。隠居屋は、主屋と同じく、もとは茅葺であったが、主屋に比べて全体的に建築年代が新しいものが多いために、主屋とは異なる結果になったと思われる。

#### <付属屋>

付属屋は主に、納屋などの建物である。付属屋の屋根形状をみると、ほとんどが切妻造である（表 3-1-2）。屋根素材も、金属板葺がほとんどである（表 3-1-3）。入口の向きについては、妻入り 15 棟に対し、平入り 14 棟とほぼ同数である（表 3-1-5）。

#### <外便所>

外便所の屋根形状をみると、すべて切妻造である（表 3-1-2）。屋根素材別にみると、瓦葺と金属板葺である（表 3-1-3）。入口の向きについては、すべて平入りである（表 3-1-5）。

なお、平成 22 年（2010）の調査によれば、集落内の主屋は 58 棟が確認されており、直近 10 年で 11 棟の主屋が解体されていることがわかる〔古田修一郎 2010〕。屋敷として主となるのは主屋であり、土蔵・隠居屋・付属屋については主屋に付属する建物であることから、主屋の解体によって屋敷地としての機能は失われ、これらの建物についても減少している。このような主屋を主とした建物の急速な減少には、やはり高齢者世帯の増加や人口減少による住宅の維持が困難になっているのが影響していると考えられる。



写真 3-1-8 金属板被せ茅葺の隠居屋（現存せず）

## 第2節 集落景観

菅並集落は、東西を山に囲まれ、南北方向に集落が広がっている。その中央を高時川が流れ、左岸と右岸に屋敷地がある。この地に建つ主屋は南北方向に長い平面であるが、平面内部を梁間方向で「座敷側」と「寝間側」に分けた場合、図3-2-1のような状況となる。これを見ると、左岸側と右岸側どちらも、基本的には主屋の座敷は高時川に向けて配置されているものが多い。つまり、高時川を対象軸として、主屋の間取りが線対称な関係にあるといえる。菅並集落の場合、主屋を建てる際、高時川を意識していたと推測される。この原則に従わない主屋も数棟見受けられるが、そのうちの2棟は、実測調査時の聞き取りなどにより、移築されていることが分かっている。なお、菅並集落のように、高時川に座敷を向けて建てる建て方に規則性があるのは、丹生谷でも谷底が広い上丹生集落や下丹生集落などにも同じ規則性がある可能性が高い。以前の調査成果を見る限り、菅並集落より北に位置する鷲見・田戸・小原の集落では、谷底が狭い、あるいは、高時川が湾曲して流れている地形の制約があったため、菅並集落のような規則性は見られない〔余呉町教育委員会1991〕。そのため、高時川に座敷を向ける建て方は、丹生谷でも谷底が開けた集落の特徴といえよう。

また、第3章第1節でも触れたように、菅並集落にある余呉型民家の主屋は南側を妻入りとし、規則正しく並んでいる（写真3-2-1）。雪への備えでそのような家並みになったと伝わるが、右岸側の集落では、南から北に向かって歩くと、入母屋造の妻側が一斉に同じ方向を向いており、特徴的な景観を作り出している。また、主屋の南妻側屋根の一部を切り上げた明かり窓が、この景観にアクセントを加えているといえよう。その他に、雪の備えとして、菅並集落周辺では、茅葺（茅を編んだもの）を建物の周囲に並べて竹で抑え、その上にさらに高さ2m程の茅を立てて縄で縛った雪囲いもしていた〔稲沢女子短期大学郷土研究クラブ1969〕が、近年は木板やポリカーボネート製波板を用いている。

このようなことを踏まえ、菅並集落の景観断面モデル図を作成すると、図3-2-2のようにあらわすことができる。

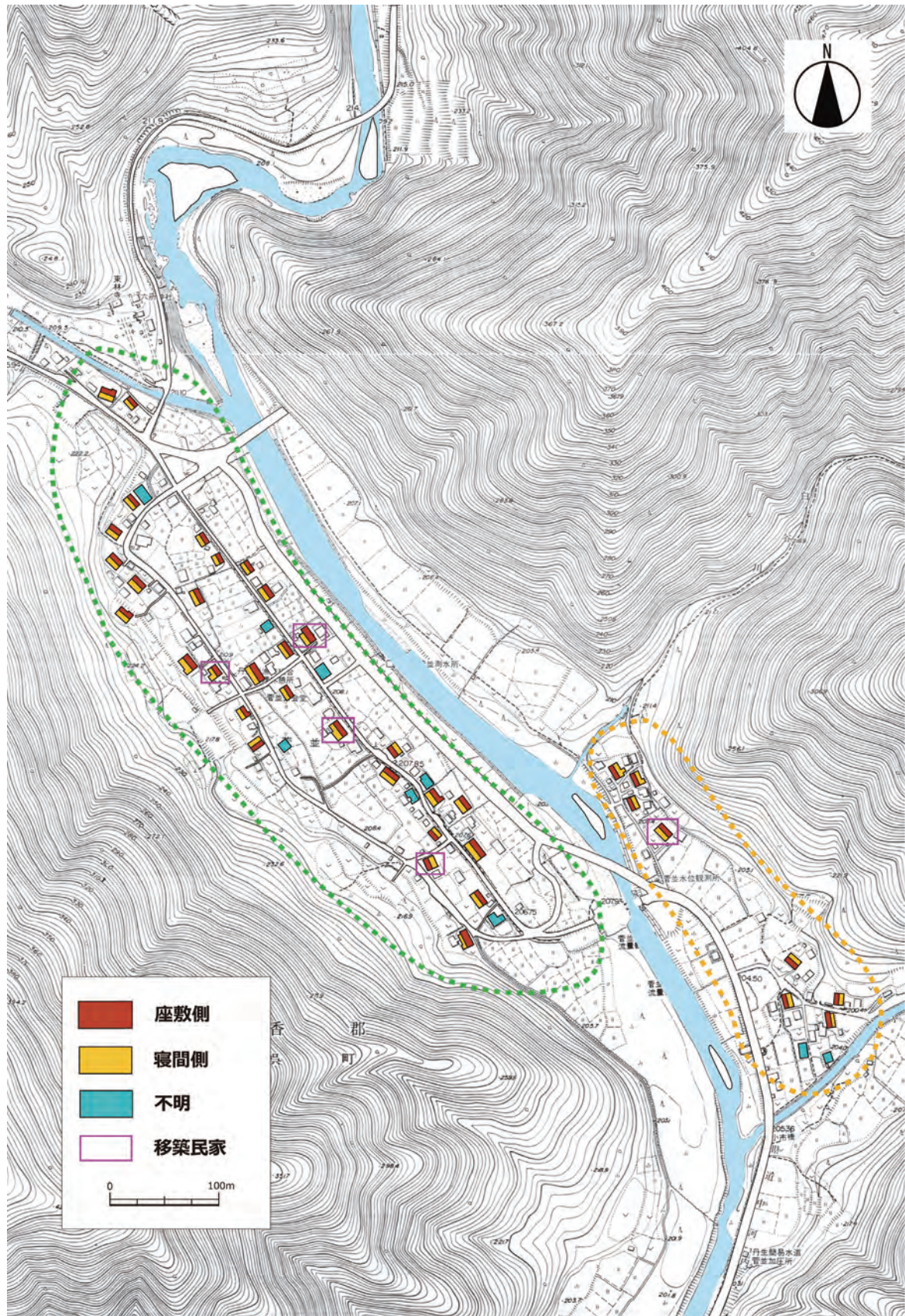


图 3-2-1 主屋：座敷・寝間方向分布图





写真 3-2-1 菅並集落の空中写真（北側上空から撮影）

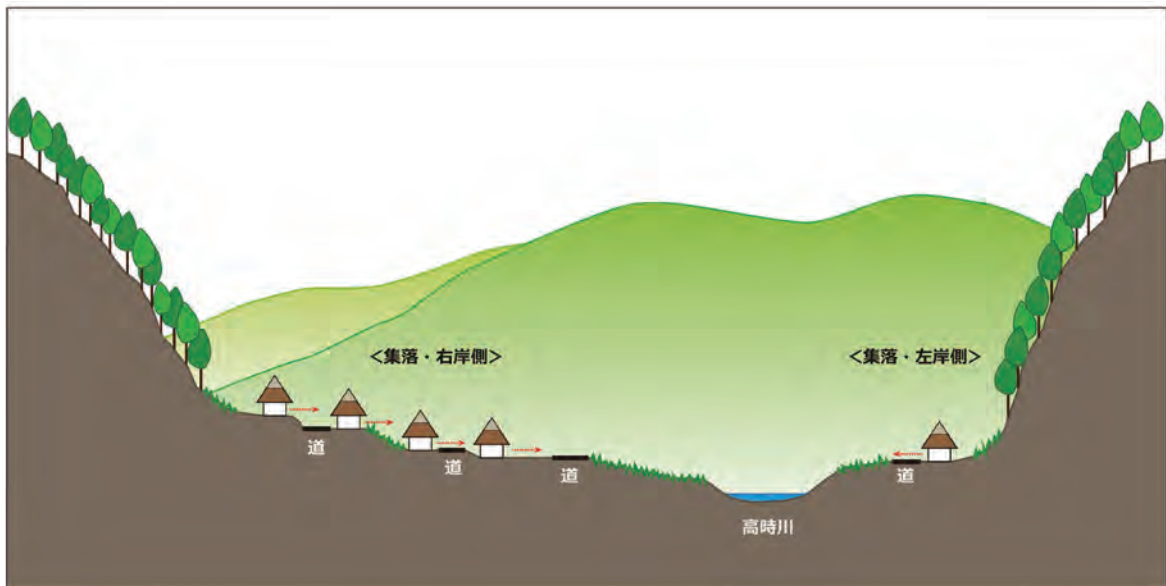


図 3-2-2 菅並集落景観の断面モデル図（南側）

## 第3節 民家の構造と地域特性

### 第1項 主屋の構造と地域特性

#### 1. 滋賀県の民家の地域性

滋賀県の民家を平面形式で大きく分類すると、整形四間取り型、二列六室型、広間型三間取り型の3つの形式が存在する〔奈良国立文化財研究所 1998, p. 17-20〕。

整形四間取り型は4室の居室と土間で構成される平面形式で、京都府南部、大阪府、奈良県と広い範囲に分布し、滋賀県内では湖西地方南部、湖南地方、湖東地方、湖北地方南部に分布する。

二列六室型は「大浦型」と呼ばれ、若狭地方東部（福井県）、湖西地方の北部、湖北地方の大浦川より西の地域に分布する。「大浦型」は二列六室の「六つ住まい」が一般的である。平入りで表側3室の中央間に入口が付く。

広間型三間取り型は土間、土座、2室の居室から構成される。土間、土座の上に十字梁を架け、中央に柱を立てない広間型三間取りⅠ型と、柱を立てる広間型三間取りⅡ型に分類される。広間型三間取りⅠ型は「余呉型」と称され、西浅井町を流れる大浦川を西限とし、米原市中多良を南限とする一帯に分布していた。広間型三間取りⅡ型は福井県の越前Ⅲ型と同形式で、岐阜県にも分布する。

本報告書が調査対象とする菅並集落は余呉型民家の分布域にあたり、各家の主屋は大正期に建てられた2棟を除けば、基本的には「余呉型」である。以下では余呉型民家の特徴について述べる。

#### 2. 余呉型民家の特徴

##### <広間型三間取りⅠ型>

余呉型民家とは土間、土座、2室の居室から構成される広間型三間取りⅠ型の民家として分類される。土間・土座の上に十字梁を架け渡すが、土間・土座の中央に柱を立てない形式を「余呉型」と言う。

余呉型民家の典型例としては国指定重要文化財旧宮地家住宅があげられる（図 3-3-1 ～ 3-3-3）〔滋賀県教育委員会 1969〕。旧宮地家住宅は、もとは長浜市国友町にあり、「近江風土記の丘」に、宝暦4年（1754）の建築当初の姿に復原、移築された。ニワと称される土間と、ニウジと称される土座、上げ間のネマ・ザシキで構成される。

余呉型民家は大浦型民家とともに湖北を代表する民家形式であり、その分布は大浦川を境に分かれている。

##### <土座>

土座（ニウジ）は地面を3寸程度掘り下げ、厚さ6寸程の初殻を入れ、その上に筵を敷いたもので、土間と土座の境にはブギ（分木、覆木）と呼ばれる高さ2寸内外の角木を仕切り



図3-3-1 余呉型民家 平面模式図  
(国指定重要文化財 旧宮地家住宅)

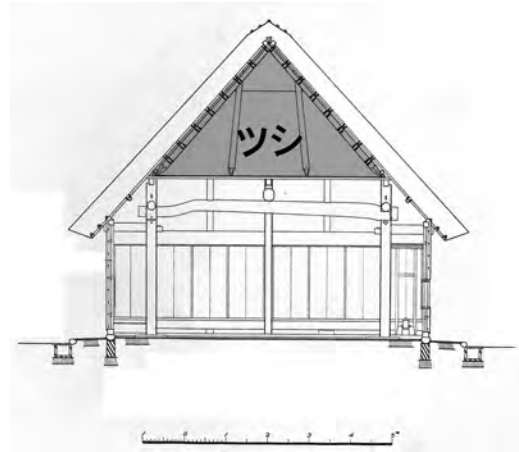


図3-3-2 余呉型民家 断面模式図  
(国指定重要文化財 旧宮地家住宅)

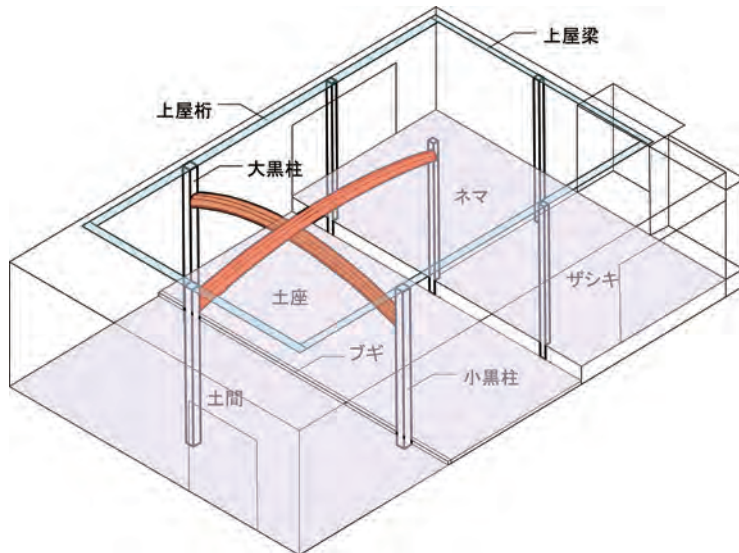


図3-3-3 余呉型民家 構造模式図 (国指定重要文化財 旧宮地家住宅)

として置く〔藤田元春 1967, p. 147〕。土座と上げ間の境にある上がり框の下端には溝が切られている。その溝に板を隙間無く嵌め込み、土座を取り囲む外壁の厚い土壁とともに隙間風を防いでいた。

土座の天井高は高く、土間と土座の空間には柱も仕切りも無く、一体となる大きな空間を呈していた (写真3-3-1)。



写真3-3-1 土座 (国指定重要文化財 旧宮地家住宅)

### <十字梁>

側柱から半間内側の土間・土座境に大黒柱と小黒柱を立て、梁を渡し、桁を架け、十字梁とし、土間・土座の空間を支える。十字梁は、簀子天井まで吹き抜ける土間・土座上部の空間に架かり、緩やかな曲線を描く太く長い野物で余呉型民家の最も大きな特徴である。

上屋桁や上屋梁は、大黒柱や小黒柱を含む7本の主要な柱で支えられている〔滋賀県教育委員会 1969, p. 29〕。梁を半間延長し、大黒柱もしくは小黒柱を半間外側に立てるのは発展形とされる〔奈良国立文化財研究所 1998, p. 24〕。

### <天井>

土間から見上げると茅葺屋根の屋根裏が見える。扱首にヤナカとタルキを縄で括り付け、茅を葺く。タルキの上に化粧として葎簀を敷くこともある。

土座では、上屋梁、上屋桁の上にツシの床として張られた簀子が天井となる。簀子天井は丸竹や平板を張り、その上に筵を敷く。

ネマの天井はササラ天井が多い。ササラは方言で、大引きより成<sup>せい</sup>のある断面長方形の角材を胴差しに架け、天井を支える。大引きは最下階の床を支える構造材の意味が強く、以下ではササラ天井と呼ぶ。ザシキの天井は竿縁天井である。

### <屋根>

屋根形式は扱首構造で、入母屋造茅葺である。先を削った扱首を上屋梁や上屋桁に差すか、上屋桁に渡したごひら（断面長方形の材）の扱首台に差す。扱首により構成される屋根裏空間は、この地域ではツシと呼ばれている。ツシの床は脆弱で、燃料としての柴や、屋根葺材としての茅など軽いものが収納される。

屋根材としての茅にはススキ、イネ、ヨシなどがある。基本的には山間部ではススキを、湖岸に近い地域ではヨシを使っていたが、交通の発達により、地域差は減少した。余呉型民家の屋根は入母屋造茅葺で、「前垂れ」と呼ばれる棟端飾りは特徴的であったが〔川島宙次 2011, p. 19-20〕、茅葺から金属板葺に変わったことにより、その特徴はほぼ失われた。

### <妻入りと平入り>

余呉型民家の入口は妻入りとするものと平入りとするものがあり、高時川上流やその近辺で妻入りが多いことや、旧木之本町より南の平野では平入りも見られるとしている〔藤田元春 1967〕。また、山間部・山麓の集落に余呉型民家の妻入りが多く、平野部に平入りが多いことが指摘されている〔山本裕之 2015, p. 25〕。

### <明かり窓>

余呉型民家の茅葺屋根の下端には、屋根を切り上げて開口部を確保した明かり窓が付く例がある（写真 3-3-2・写真 3-3-3）。余呉型民家の約半数に明かり窓が付くと言われている〔山

本裕之 2015, p. 28]。妻側に付けられる例が多いが、平側に付く例も少なくない。入母屋造の茅葺屋根は、破風口から排煙するため、煙出しのための開口部が屋根の下端に設けられることは無い。採光や、温湿度管理が求められる養蚕にともなう換気口とされている〔川島宙次 2011, p. 15〕。

余呉型民家は開口部が少なく、閉鎖的なことが特徴であった。復原された旧宮地家住宅も土間・土座部分は入口の大戸と半間四方の窓が2か所しか開口していない。藤田も「伊香郡の山の中では、大抵は土壁の厚い外郭を有し、小さいレンジ窓を持っているに過ぎない」と記している〔藤田元春 1967, p. 148〕。



写真 3-3-2 明かり窓（外側）



写真 3-3-3 明かり窓（内側）

#### <トバコ>

余呉型民家のニワの上部にはトバコと呼ばれる米の収納場所がある（写真 3-3-4）。十字梁の上に造り付けられたり、吊り下げられたりと設置方法は多様である。ネズミの侵入を防ぐため丁寧に板壁で囲い、引戸が付く。幅1間、奥行き半間～1間、高さ半間程度の収納であり、ネマ側に設けられることが多い。湖北地方から湖東地方にかけて民家の土間にネズミラもしくはネズミイラと称される米の



写真 3-3-4 トバコ

収納場所がある。幅1間、奥行き半間、高さ1間程度の戸棚で、隙間無く張られた板壁に囲まれ、引き違いの板戸が付く。ネズミラは入口の近くに設置されており、米の出し入れも容易である。ネズミイラは長浜市国友町にあった旧宮地家住宅〔滋賀県教育委員会 1969〕や、積雪量の多い地域で京都でも報告されており、その分布範囲は広い〔藤田元春 1967, p. 158〕。余呉型民家のトバコは積雪量の多い地域で、湿気や小動物による食害を避けるため、高い位置に設置されたと考えられる。

#### <カラウス>

余呉型民家の土間にはカラウスと呼ばれる足踏み式の臼が設置されていた。旧宮地家住宅も小黑柱と側柱の間に据え付けられていた。土間と土座を区切るブギに直交し、土座側に長く伸びた杵の柄を踏むところがあり、土間側に臼が埋め込まれている（図 3-3-1）。奥川並、鷺見では旧宮地家住宅とは逆向きにカラウスが設置され、臼は土座に埋め込まれていた。田戸、小原ではブギに並行して土間に設置されていた〔余呉町教育委員会 1991〕。カラウスはいずれもザシキ側の小黑柱の近くに据えられていた。

#### <ウマヤ>

余呉型民家の中には土間にウマヤを設ける例がある。名称はウマヤであるが、実際は牛を飼っていた。屋内で牛を飼っている家もあるが屋外に独立したウマヤを持つ家もあった。土間にウマヤを設ける場合には、ウマヤの上部にコズシと呼ばれる収納空間を設け、牛を飼っていた頃はコズシに餌を置き、後には炭を置いていた〔余呉町教育委員会 1991〕。

#### <ケヤキ>

湖北地方の民家は余呉型民家に限らず、柱にケヤキを多用する。差物にはマツも使われるが、ケヤキもよく使われている。旧余呉町の南方にある旧高月町の古い地名が、ケヤキを意味する「槻」からきていることや、湖北地方の巨木の大半をケヤキが占めることから、古くからケヤキの調達に不自由しない地域であったことがわかる。菅並集落にもケヤキの巨木があり、樹下に愛宕神社の札が祀られている。

### 3. 余呉型民家の変容

余呉型民家は、長い年月にわたって使用されてきた伝統的民家であり、生活様式の変化などにより、大きく変容が進んできた。

大きな変容としては、広間型三間取り型から整形四間取り型に類似した平面型に変化し、土座に天井や床が張られ、内部空間が細分化されたことである。この変化は高度経済成長期の昭和 30 年代前後に進んだ。余呉型民家の主構造に手を加えること無く、十字梁の交差部直下に柱を立て、土座を 2 分し、建具を入れ、整形四間取り型のような平面型に改装された。土間も 2 分し、床を張った家も多い。2 分した土座に竿縁天井を張ったため、天井高が下がり、余呉型民家の豪壮な空間を失った。また、緩やかな曲線を描いて架かっていた十字梁も見えなくなった。

入母屋造の茅葺屋根も昭和後期頃には、金属板を被せる家が増え、余呉型民家独特の棟端飾りも姿を消していった。

本報告書に記載する余呉型民家も土座を残したものは無く、土座の上に架かる十字梁を直接望めた主屋も無かった。茅葺屋根もすべて金属板で覆われていた。ただし、こうした変容は外形的なものであり、広間も十字梁も状況が許せばその復原や活用は十分可能である。

## 第2項 土蔵の構造と地域の特徴

### 1. 現存する土蔵と構法

近世までの土蔵造が、小屋組に用いられる「地棟」を重要な部材として意識してきたことは、近世の記録などからも広く知られている。地棟と登梁を用いる構法は近世土蔵造の特徴のひとつと考えられる。土蔵に関して登梁を「合掌」や「合掌梁」と記載する史料もみられ、本報告書内では「登梁」で統一している。土蔵の構法は大工雛形などに紹介される事例などから普遍的なものとして扱われ、部材名称にも一定の類似性が認められることが知られており、近年の文化財指定される土蔵の修理報告書などからは多様な屋根架構が報告されている。菅並集落の土蔵の特徴をまとめるにあたり、まずは地棟を支える部材との関係に着目しておく必要があるだろう。『日本建築辞彙』や、昭和初期の建築指南書にも地棟を受ける部材に「天秤梁」の名称がみられることから、以下は地棟を受ける部材を天秤梁とする。

近年土蔵の文化財指定が増えてきており、土蔵の構法の多様性が評価されているようである。各種文化財修理報告書から、地棟・登梁と天秤梁の有無により大別し、天秤梁の形態を2種類に分類することができる。まずは天秤梁を用いる形式の事例を挙げる。

はじめに、柱上の梁間方向中心に地棟を受ける部材として半間から1間程度の部材を用いるもので、『日本建築辞彙』の天秤梁の図に対応する形式である。西川家住宅3階蔵〔滋賀県教育委員会1988〕では「鳥斗受」の記載が報告書にみられる部材に対応する。草津宿本陣土蔵二棟〔草津市教育委員会2018〕、広島城内の土蔵を移築したとされる旧重谷家土蔵〔修道学園2019〕、旧笹波家土蔵〔上ノ国町教育委員会2003〕、中島家醤油蔵〔文化財建造物保存技術協会2022〕など類例は多い。小比賀家土蔵〔文化財建造物保存技術協会2016〕は報告書掲載の写真には曲材を用いた天秤梁が桁行両端と桁行中央に用いられているようである。

次に、天秤梁に相当する曲材を用いる梁が梁間を通して連続する形式である。辻家住宅南倉・前倉〔滋賀県教育委員会1984〕や、熊谷家住宅東道具蔵・米蔵・雑蔵・衣装蔵〔文化財建造物保存技術協会2005C・D〕、渡邊家土蔵（三階文庫）（静岡市指定文化財）〔久保奈緒子2019により確認〕、旧前島家土蔵〔長野市教育委員会2015〕、洞口家座敷蔵〔文化財建造物保存技術協会2015〕に類例がみられる。上芳我家土蔵〔文化財建造物保存技術協会2011〕は梁間方向中央に地棟を支える登梁状の部材を用いる形式で、類例に加えておく。本芳我家土蔵〔文化財建造物保存技術協会2006〕では、棟柱上に曲材を用いる梁が架かる上に天秤梁に相当する梁が2重に重ねられ、地棟を支える形式がみられるが、建築年代が明治33年（1900）と推定され比較的年代が新しく、梁間4間・桁行6間と、菅並集落の土蔵と比較して規模が大きい。

天秤梁を用いず、梁の上に地棟を架ける形式は、上芳我家物置に類例がみられる。角海家家財蔵・小豆蔵・米蔵は梁の上に天秤梁を重ねた上に地棟を架けており、明治初頭の火災を逃れたとされる。

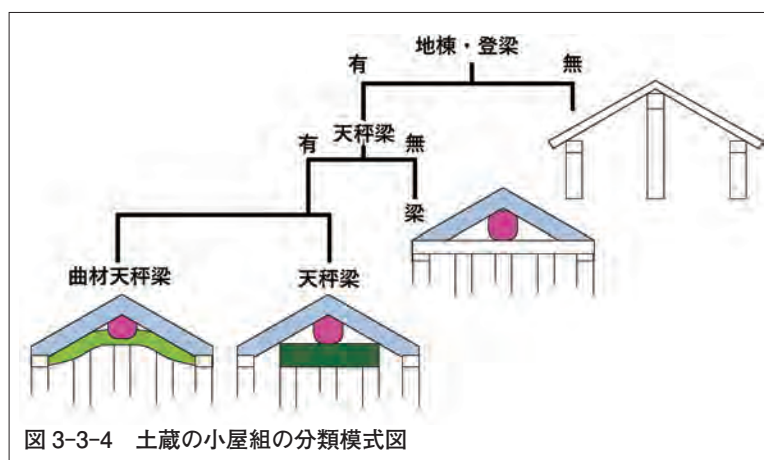
熊本城監物櫓〔太田博太郎1976〕は梁に牛梁を架けており、妻側に牛梁材端を象徴する

漆喰の飾りを伴うことから、土蔵の小屋組に類するだろう。牛梁を受ける曲材は、彦根城天守〔滋賀県教育委員会 1960〕にもみられる。土蔵の成立には近世城郭の櫓と強い影響関係が推定される点を踏まえておく必要があるだろう。なお、城郭内での中世末から戦国期に遡るとされる土蔵基礎は滋賀県内の関津城〔滋賀県教育委員会他 2016〕から報告されている。

また、近代初頭の建築とされる旧鍋島家土蔵〔文化財建造物保存技術協会 2014〕は梁の上の大梁に束を立てているが、近世末の建築とされる長屋門は天秤梁と地棟・登梁が用いられている。土蔵に特有とされてきた構造もあらためて検討する必要がある。

管見の限りではあるが、報告書にみられる土蔵の小屋組構造の構成の模式図を図 3-3-4 に示す。菅並集落の土蔵は、多様な構造形式が分布していたことを示す事例として位置付けることができそうである。

構法が土蔵の建築年代を推定する手がかりとなりうる事例も指摘されている〔久保奈緒子 2019〕とはいえ、天秤梁の有無が年代の手がかりとなるかは判断が難しい。年代を遡る事例として、延享4年(1747)の普請記録を伴う荒川家土蔵は、棟持柱に地棟に



相当する牛梁（報告書表記による）が用いられる形式で、天秤梁や梁が地棟の下に伴わない〔文化財建造物保存技術協会 1987〕。村井家内蔵も元禄年間の建築とされ、柱上に地棟を架ける形式と報告されている〔奈良県教育委員会 2018〕。天秤梁を用いない形式としては、佐久良東雄旧宅土蔵〔文化財建造物保護協会 2005A〕も棟持柱上に地棟を架け、登梁を用いる形式で、19世紀半ばの建築と推定されている。一方で17世紀に遡るとされる西川家土蔵が天秤梁を用いていることから、年代だけでなく地域による構法の多様性も想定しておくべきであろう。

「一般的」とされる土蔵の構法の知見には近代初頭から昭和にかけて大工雛形や指南書が普及した影響を想定する必要があると考えられる。例として、水平方向に木舞竹を固定する段を柱に設ける形式は近世の建築とされる下田家土蔵〔羽村市教育委員会 1996〕の壁面破損部の詳細としても報告されており、『家舶心得集 今西家舶繩墨私記・乾』〔生活史研究所編 1985〕にも同様の表現が見られるほか、大工雛形にもみられるなど普遍的な構法とされている。しかし、菅並集落の土蔵では該当するか不明である。報告書にも柱に段を設けない事例は報告されており、地域性を示す要素とも考えられる。

また、茅葺屋根の土蔵(015-4)は、集落内に他に類例が存在したことが知られ、現存する事例として全国的にも極めて貴重であるとされる。多様な屋根材が分布していたことを検討する観点からも、菅並集落の土蔵には大きな価値を認められるべきであろう。



## 2. 菅並集落の土蔵の特徴

菅並集落の土蔵に関して、調査を実施した範囲での特徴をまとめる。詳細は各調査事例の個別解説に示すため、ここでは屋根架構と土壁の構成に限ることとする。用途に関して、当初はおおむね1階に米や漬物などを、2階に道具類を収めていたと推測できるが、現状は様々である。今後の調査の課題としておきたい。

集落内の土蔵と洞壽院土蔵では、規模と平面構成に違いがみられ、洞壽院土蔵は柱配置などから集落内の土蔵を東西に2つ連続させた構成と推定できるため、特徴は共通していると考えてよいだろう。屋根は主に置屋根であり、構造は地棟と登梁を用いる。

地棟を支える梁として、天秤梁に相当する梁間方向の部材（曲材天秤梁）を用いている事例が複数みられる。集落内の土蔵の事例としては、土蔵（029-2）、土蔵（020-3）が該当する。

図3-3-5に土蔵（029-2）の構造模式図を示す。土蔵（046-3）など、天秤梁のみを用いる事例もみられる。

洞壽院土蔵は、妻側両端は天秤梁により地棟を架けるが、桁行中央部の柱上に曲材の天秤梁相当の梁を渡し、梁の上に地棟を置き、さらに登梁を設ける構造がみられる。同様の曲材による天秤梁相当の梁は桁行中央に1間おき、合わせて3本が用いられている。図3-3-6に構造模式図を示す。

類例を挙げるならば、熊谷家米蔵・雑蔵が同様に桁行中央部分で天秤梁に相当する曲材の梁を地棟の下に用いている。熊谷家米蔵・雑蔵では報告書の写真には、木舞の竹材に丸竹が用いられる様子や、内部に露出する貫に「下げ苧」相当の繊維状の部材が掛けられた様子など、洞壽院土蔵に類似する要素が認められる。

田尻歴史館（旧谷口家吉見別邸）土蔵B〔文化財保存技術協会 2005B〕も、梁の上に小屋

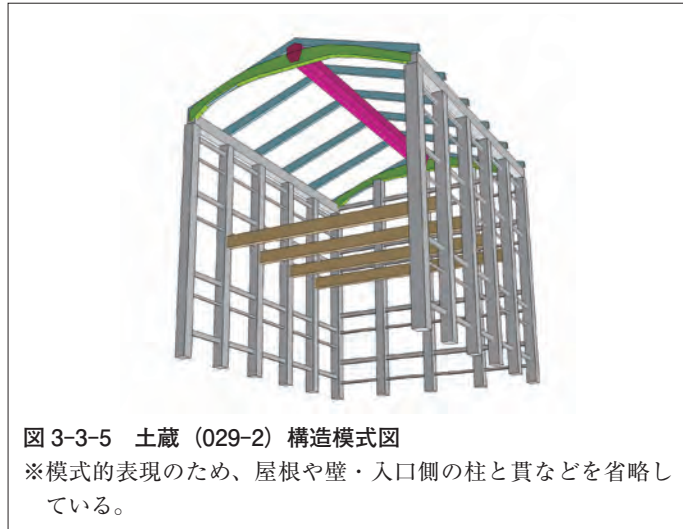


図3-3-5 土蔵（029-2）構造模式図

※模式的表現のため、屋根や壁・入口側の柱と貫などを省略している。

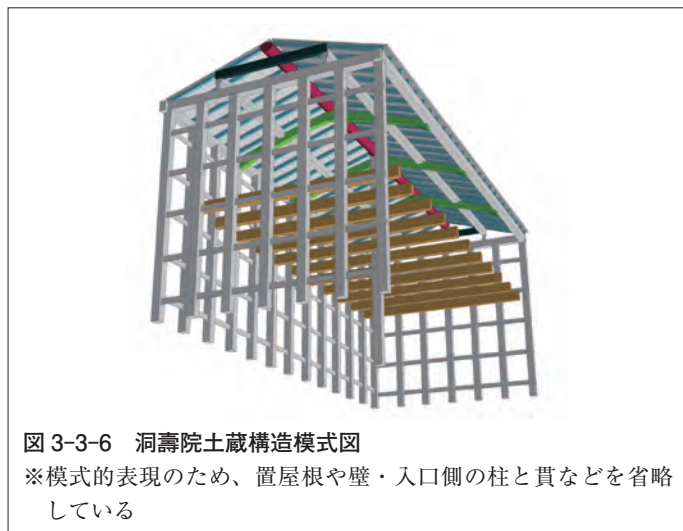


図3-3-6 洞壽院土蔵構造模式図

※模式的表現のため、置屋根や壁・入口側の柱と貫などを省略している

を架け、地棟を用いない形式で、建築年代は大正12年（1923）とされるが、梁間方向に1間おきに曲材を用いた太い梁を架ける点で類似している。複数の天秤梁を設ける例としては小比賀家土蔵も挙げることができる。鈴木家土蔵〔文化財建造物技術保存協会2008〕は天秤梁の下に高さのある梁を桁行方向の2か所に用いる形式である。

菅並集落の土蔵は、土壁の構法も特徴的であると考えられるが、内部は破損部分からの推測に限られており、解体修理報告書などから得られる情報との比較は難しい。土蔵の構法の体系化は試みられている〔吉川奎ほか2021〕。菅並集落の土蔵に関しては、現状推定できる範囲では類例も認められるが、地域性の高い構法とみるべきであろう。図3-3-7、図3-3-8に模式図を示す。

貫に用いられる下げ苧相当の繊維材は壁下地を内側に引きつけるように固定しているとの観察や、洞壽院土蔵と土蔵（020-3）では当該部材に集落周辺で採取可能なツタが用いられているとの聞き取りも指摘されている。土蔵（029-2）などで尺八竹と下げ苧を伴わない貫の併用もみられることから土壁の構法は精査が必要であろう。

屋根架構の一部と、土壁の構法の一部という非常に限られた範囲での報告に留まるが、菅並集落の土蔵は、土蔵に関して日本各地に地域性の高い構法が分布し、継続していたことを示す事例が残されていると高く評価するべきであろう。

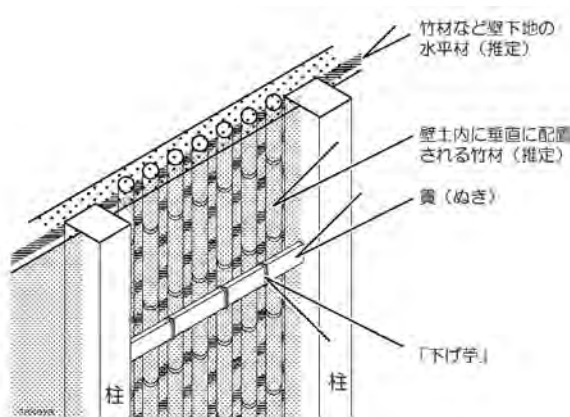


図3-3-7 菅並集落の土蔵壁の模式図①

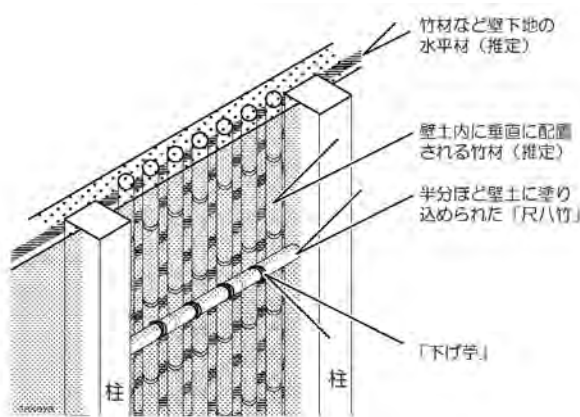


図3-3-8 菅並集落の土蔵壁の模式図②



写真3-3-5 貫にかかる下げ苧相当の繊維材（洞壽院土蔵）

## 第4節 菅並集落の建造物

### 第1項 菅並集落の民家と社寺

ここでは、菅並集落にある伝統的建造物の中で、調査を行うことができた民家と社寺について紹介していく（表3-4-1、図3-4-1）。

調査した建物については、主に江戸期・明治期のものが多い（図3-4-2）。

なお、建物の説明の中で部屋名がカタカナ表記のものがあるが、これは所有者が呼称している部屋名である。

主棟	建築年代	当初の階取り	上屋 間×桁行 (1室)	付随棟	土庫の次巻柱 の有無	ガシキ、キマ種の柱 の有無	屋根形式	屋根材	屋根材 (昭和26年)	移築	備考
002-1	江戸後期	広間型三間取	2間半×6間	×	○	×	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
003-1	江戸末期	広間型三間取	3間×5間	○	×	×	切妻造	瓦葺	茅葺	○	移築
004-1	大正5(1916)	その他	2間×3間半	×	-	-	切妻造	瓦葺	瓦葺		
010-2	明治前期	広間型三間取	2間半×5間	-	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
015-1	江戸末期	広間型三間取	2間半×5間	○	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
017-1	明治20(1887)	広間型三間取	2間半×5間	-	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
019-1	江戸後期	広間型三間取	3間×6間	○	×	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
020-1	明治22(1889)	広間型三間取	2間半×4間	○	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	○	移築
024-3	明治21(1888)	広間型三間取	3間×6間	×	×	○	切妻造	瓦葺	茅葺		屋根替え
026-1	大正2(1913)	広間型三間取	3間×5間	×	×	○	切妻造	瓦葺	瓦葺		
027-1	江戸末期	広間型三間取	3間×6間	○	×	○	切妻造	瓦葺	茅葺	○	移築、屋根替え
028-1	江戸末期	広間型三間取	2間半×4間半	×	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	△	移築小
029-1	江戸後期	広間型三間取	3間半×6間	○	×	×	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
032-1	江戸後期	広間型三間取	2間半×4間半	○	×	×	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	△	移築小
036-1	明治5(1892)	広間型三間取	2間半×4間半	×	×	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	○	移築
042-1	明治中期	広間型三間取+2室	3間×7間	-	×	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
044-3	江戸末期	広間型三間取	2間半×4間半	○	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
045-1	江戸後期	広間型三間取	2間半×4間半	○	×	×	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
046-1	昭和5(1930)	広間型三間取	2間半×4間半	×	×	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	○	移築
056-1	江戸後期	広間型三間取	2間半×4間半	○	×	×	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺		
消滅①	江戸後期	広間型三間取	2間半×4間半	-	○	○	入母屋造	金属板葺(茅葺)	茅葺	○	移築、1991年調査時
消滅②	江戸後期	広間型三間取	2間半×4間半	-	○	○	入母屋造	茅葺	茅葺		1991年調査時

部屋	建築年代	当初の階取り	上屋 間×桁行 (1室)	屋根形式	屋根材	屋根材 (昭和26年)	備考
003-2	昭和5(1930)	一間取(2階建)	2間×1間半	切妻造	瓦葺	板葺	後に土間に増築
004-2	大正前期	四間取	2間×3間半	切妻造	金属板葺	板葺	
020-4	-	一間取	2間×2間	切妻造	瓦葺	杉皮葺	土蔵が接続
025-1	大正10(1921)	その他	3間×3間半	切妻造	金属板葺	-	屋根替え
035-1	-	その他	2間×3間	切妻造	金属板葺	-	屋根替え
044-5	-	その他	2間半×4間	切妻造	瓦葺	茅葺	屋根替え、移築?

土蔵	建築年代	平造 (梁間×桁行)	平・妻	屋根形式	屋根材	屋根材 (昭和26年)	備考
003-2	江戸後期	2間×2間	妻入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	板葺	後に縁階層が増築
015-4	江戸後期	2間×3間	妻入り	切妻造(屋根根)	金属板葺(茅葺)	茅葺	
019-3	-	2間半×3間	平入り	切妻造	瓦葺	杉皮葺	
020-3	-	2間×2間半	平入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	茅葺	隠居屋が接続
029-2	-	2間余×2間半	妻入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	瓦葺	
042-3	-	2間×4間	平入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	瓦葺	移築の可能性
044-4	江戸末期	2間×3間	妻入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	瓦葺	
046-3	-	2間×2間半	平入り	切妻造(屋根根)	瓦葺	杉皮葺	

付随棟	建築年代	平造 (梁間×桁行)	平・妻	屋根形式	屋根材	屋根材 (昭和26年)	備考
029-2	-	1間半×2間	妻入り	切妻造	金属板葺	-	倉庫
044-2	-	半間×1間半	平入り	切妻造	瓦葺	瓦葺	便所
045-2	-	1間半×3間	妻入り	切妻造	金属板葺	-	倉庫、移築

社寺	建物	建築年代	屋根形式	屋根材	備考
六所神社	本殿	-	流造	板葺	一間社
六所神社	精舎	明治27(1894)	切妻造	金属板葺(茅葺)	
六所神社	中門	大正3(1914)	切妻造	金属板葺	重門
六所神社	拝殿	明治42(1909)	入母屋造	金属板葺(茅葺)	
六所神社	社務所	大正3(1914)	切妻造	金属板葺	
菅井寺	本堂	-	入母屋造	金属板葺(茅葺)	
洞壽院	本堂	大正後期	入母屋造	金属板葺	
洞壽院	土蔵	-	切妻造	瓦葺	数屋根
洞壽院	縁棟	大正後期	切妻造	瓦葺	
洞壽院	稲荷神社	大正後期	流造	金属板葺	拝札、拝札亭し
洞壽院	山門	大正後期	切妻造	金属板葺	四脚門

表3-4-1 調査建物一覧

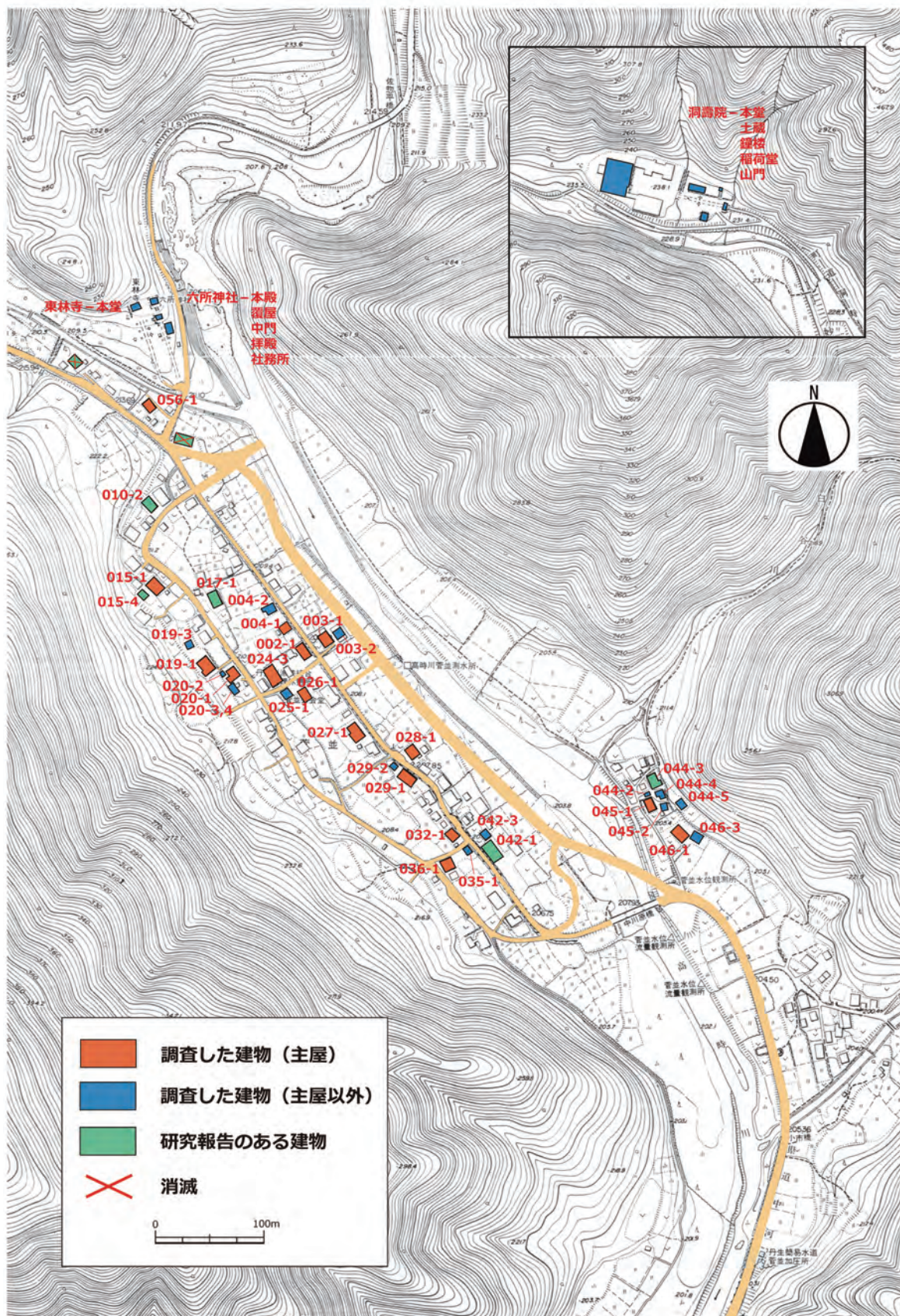


図 3-4-1 調査建物分布図

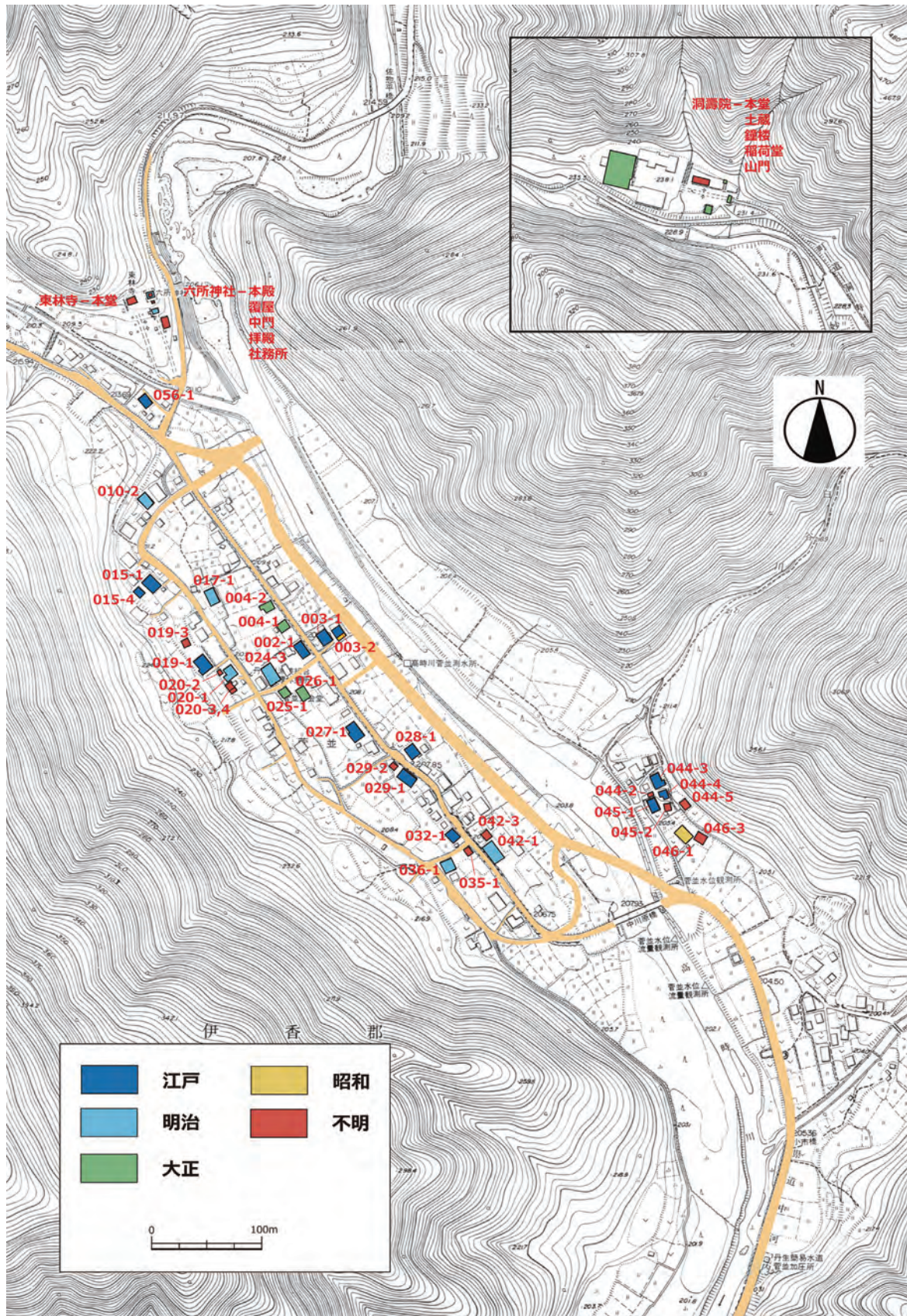


図 3-4-2 調査建物分布図（建築年代別）

## No.002

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落中央・川側に位置し、敷地東側と南側に通りがある角地で、東西に長い。敷地東側に主屋（002-1）、その西側に付属屋、隠居屋の順に配置している。

なお、屋号は「三左衛門（サンザ）」である。

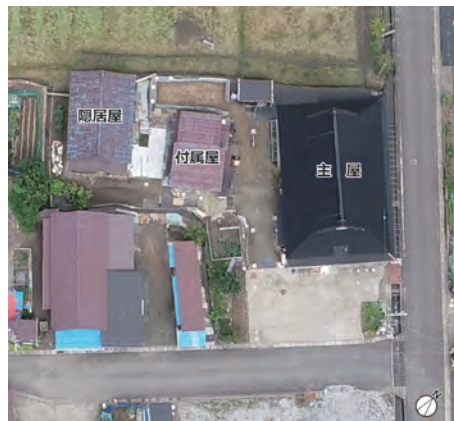


図3-4-3 No.002 配置図

### <主屋（002-1）>

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り（南入口）である。入口上部には、一部屋根を切り上げた明かり窓があり、主屋の4面ともに庇がつく。昭和26年（1951）時点の菅並集落にあった建物の記録である『家屋調査台帳』（菅並自治会蔵）によれば、昭和26年当時、庇は杉皮葺であった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。①ザシキ北西隅の柱に壁があったことを示す貫跡、②ザシキ・縁側境に雨戸溝、③ザシキ・ネマはダイドコロよりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間や東側の縁側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室（ダイドコロ、6畳間）に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年には、ザシキ北側の床の間や東側の縁側は増築されている。なお、聞き取りによれば、イロリは土座のネマ側、カマドは土間のネマ側にあった。また、土間のネマ側上部には、タバコが設置されていた。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行5間、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立っているが、ザシキ・ネマ境の上屋柱は省略されずに立っている。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約百八十年前」との記載がみられるが、構造形式や部材表面の風食の程度から、建築年代については、もう少し年代が下がり、江戸後期と思われる。



写真 3-4-1 主屋 (002-1) 外観 (南東側)



写真 3-4-2 主屋 (002-1) 明かり窓



図 3-4-4 主屋 (002-1) 平面図



図 3-4-5 主屋 (002-1) 断面図

## No.003

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落中央・川側に位置し、敷地西側に通りがある。敷地中央に主屋（003-1）、その東側に土蔵+隠居屋（003-2）、南側に付属屋を配置している。

なお、屋号は「三太夫」である。所有者によれば、天保年間あたりから彦根藩へ卸す炭を扱う御用問屋とその運送役を任せられ、また、ほぼ同時期に菅並村の庄屋も務めていたそうである。平成23年（2011）に、彦根藩へ送る炭を貯めていた土蔵（主屋西側）を取り壊している。



図 3-4-6 No.003 配置図

### <主屋 (003-1) >

主屋の外観は、切妻造・瓦葺・妻入り（南入口）であるが、平成11年（1999）までは入母屋造・茅葺を覆った金属板葺であった。その頃の写真をみると、入口のネマ側上部には、一部屋根を切り上げた明かり窓があった（写真3-4-4）。主屋の4面ともに庇がつき、主屋北側には瓦葺の落ち棟部分が突き出す。

主屋は平屋建てで、かつてはツシがあった。①ザシキ・ナカノマ境の西側の柱に框跡、②ナカノマ・ネマはダイドコよりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、ナカノマ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後年、ナカノマ北側にザシキ1室を増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室（ダイドコ、ダイドコ）に分割・土間に床を張るなどの改変が行われた。なお、聞き取りによれば、土間のネマ側上部にトバコが設置されていた。

主屋の構造は、上屋は梁間3間・桁行5間、現在、鉄骨による小屋組だが、平成11年以前の小屋組は扱首である。余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かるが、桁行梁に相当する梁が1本ではなく、2本を継いで、十字に組むという形式をとっている。土座・土間境にある大黒柱・小黒柱ともに上屋筋に立っており、ナカノマ・ネマ境の上屋柱も省略されずに立っている。また、ナカノマ・ダイドコ境、ネマ・ダイドコ境には付樋端がみられる。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約二百五十年前」との記載がみられるが、以前の調査によれば、幕末頃に高時川右岸側の集落の山手側から移築してきたと伝わっている〔余呉町教育委員会1991〕。そのため、建築年代（移築年代）は江戸末期と考えられる。





写真 3-4-3 主屋 (003-1) 外観 (南西側)



写真 3-4-4 主屋 (003-1) 外観 (南西側・昭和 40 年代)



写真 3-4-5 主屋 (003-1) 桁行梁

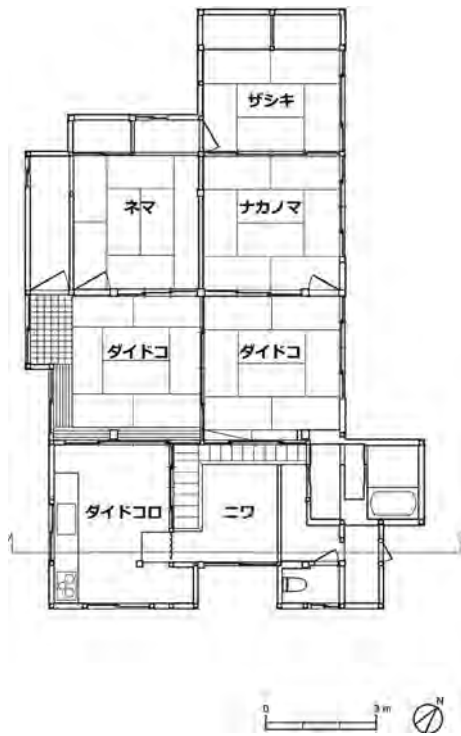


図 3-4-7 主屋 (003-1) 現状平面図

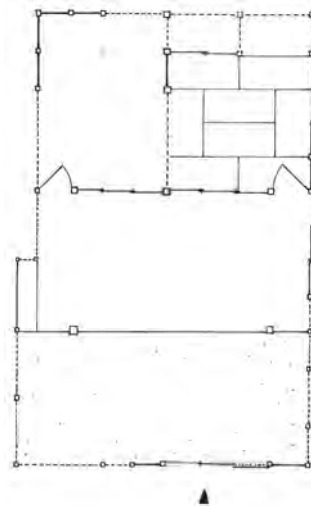


図 3-4-8 主屋 (003-1) 復原平面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕



図 3-4-9 主屋 (003-1) 現状断面図



図 3-4-10 主屋 (003-1) 復原断面図〔余呉町教育委員会 1991〕

### <土蔵+隠居屋 (003-2) >

土蔵+隠居屋の外観は、切妻造・瓦葺・平入り（西入口）の主要部分に対して、後年、北側と西側に増築した形をとっている。ここでは、伝統的な要素が残る主要部分のみを取り上げる。なお、『家屋調査台帳』によれば、昭和 26 年（1951）には板葺であったことがわかり、北側と西側の増築部分はまだ存在していない。

土蔵+隠居屋の主要部分は 2 間×4 間半の 2 階建である。①昭和 4 年（1929）10 月作成の『土蔵上屋新設工事木割帳』の記述、②建物南壁から北に 1 間半の部分で柱列が 2 重になっているといったことから、2 間×3 間・妻入り（南入口）の土蔵の南側に、2 間×1 間半の隠居屋を増築したことがわかる。現在、1・2 階ともに内部で土蔵部分と隠居屋部分を行き来でき、古写真より、隠居屋南側の外階段は後の改造であることが分かっている。また、隠居屋部分北側の床の間・脇床が土蔵に食い込む形で増築されている。

土蔵+隠居屋の構造であるが、土蔵部分は置屋根、隠居屋部分は和小屋という異なる形式の上に切妻造・瓦葺の屋根が架かる形をとっている。

『家屋調査台帳』には、土蔵+隠居屋のところに「約百二十年前」との記載がみられるが、先述の『土蔵上屋新設工事木割帳』の記載や部材表面の風食の程度から、建築年代については土蔵部分が江戸後期、隠居屋部分が昭和 5 年（1930）と考えられる。



写真 3-4-6 土蔵+隠居屋 (003-2) 外観 (西側)



写真 3-4-7 土蔵 (003-2) 小屋組

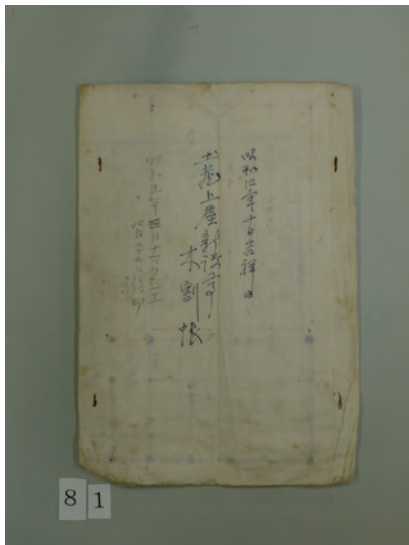


写真 3-4-8 『土蔵上屋新設工事木割帳』

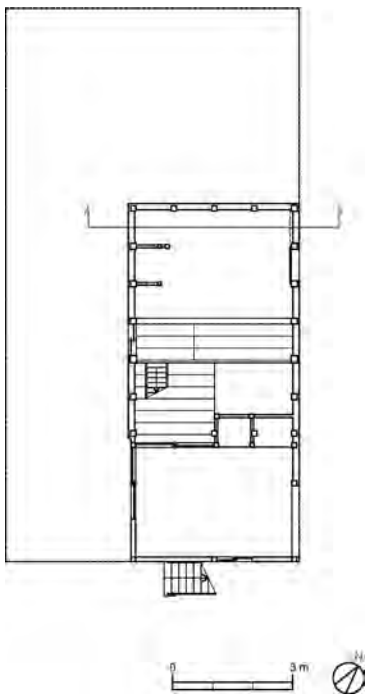


図 3-4-11 土蔵+隠居屋 (003-2)  
1階平面図

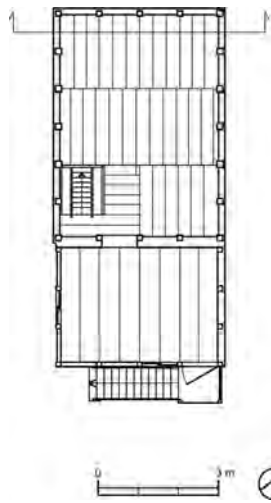


図 3-4-12 土蔵+隠居屋 (003-2)  
2階平面図



図 3-4-13 土蔵+隠居屋 (003-2)  
断面図

## No.004

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落中央・川側に位置し、敷地東側に通りがある。敷地東側に主屋（004-1）、その北側に隠居屋（004-2）を配置している。

なお、屋号は「お勘」である。隠居屋は「新六」という屋号の家の主屋であったものが、後年、当家の隠居屋になった。



### <主屋（004-1）>

主屋の外観は、切妻造・棧瓦葺・平入り（東入口）である。屋根西側を大きく葺き下ろしており、主屋の西側以外の3面に庇がつく。

主屋は2階建、1階平面は、座敷・居間・寝間・台所の4室構成である。2階平面は、2室が東半分に並び、西半分はツシのような空間になっているが、改変が大きいために元の姿を読み取るのが難しい状態である。規模や間取りの構成からみると、菅並集落の江戸期・明治期の隠居屋に類似性を感じる。なお、『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、座敷北側の床の間は、昭和26年（1951）以降の増築とわかる。

主屋の構造は、上屋は梁間2間・桁行3間半、その西側に2間の下屋がつく。余呉型民家に特徴的な十字梁はない。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約百五十年前」との記載がみられるが、現在の主屋に余呉型民家の特徴がないことや部材表面の風食の程度から、この記載は正確でないと考えられる。所有者の聞き取りでは、大正5年（1916）の建築と伝わり、部材表面の風食の程度などからも妥当と考えられる。よって、建築年代については、大正5年と推定される。



写真 3-4-9 主屋（004-1） 外観（南東側）



写真 3-4-10 主屋（004-1） 入口付近

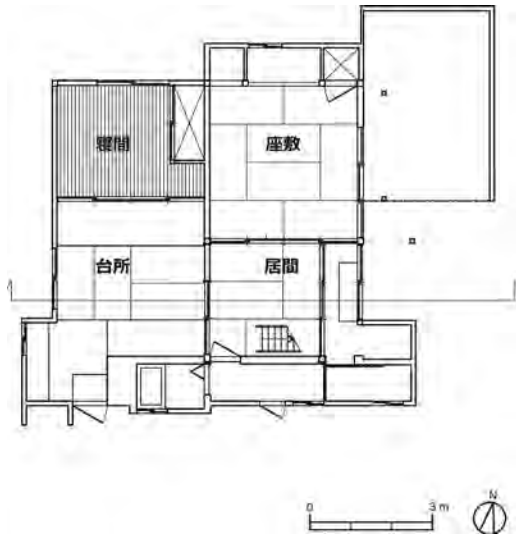


図3-4-15 主屋（004-1） 1階平面図

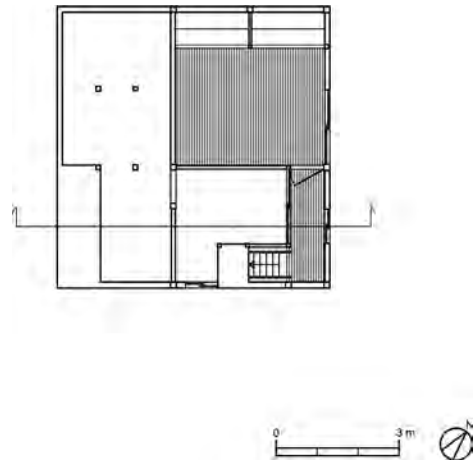


図3-4-16 主屋（004-1） 2階平面図



図3-4-17 主屋（004-1） 断面図

### < 隠居屋（004-2） >

隠居屋の外観は、切妻造・金属板葺・平入り（東入口）である。『家屋調査台帳』によれば、もとは板葺であったことがわかる。主屋（004-1）とよく似た外観であるが、西側は大きな葺き下ろしではなく、大きな庇状にして屋根を架けており、西側以外の3面にも庇がつく。所有者の聞き取りによれば、主屋（004-1）と同じ大工によって建てられたと伝わる。

隠居屋は2階建、1階平面は、座敷・居間・寝間・台所の4室構成であり、同じ敷地の主屋（004-1）に似ている。2階平面は、2室が東半分並び、西半分はツシや小屋裏空間になっている。なお、『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている隠居屋の規模から判断すると、昭和26年（1951）以降に、座敷北側の床の間・押入や東側の縁側などが増築されたことがわかる。

隠居屋の構造は、上屋は梁間2間・桁行3間半、小屋組は和小屋で、その西側に1間半の下屋がつく。余呉型民家に特徴的な十字梁はない。

『家屋調査台帳』には「大正元年建」との記載がみられるが、所有者の聞き取りでは、大正7年（1918）の建築と伝わっている。部材表面の風食の程度などでは判断が難しいため、建築年代については、大正前期とする。



写真 3-4-11 隠居屋 (004-2) 外観 (南東側)



写真 3-4-12 隠居屋 (004-2) 入口付近

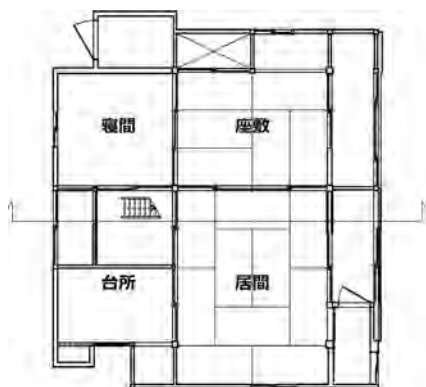


図 3-4-18 隠居屋 (004-2) 1階平面図

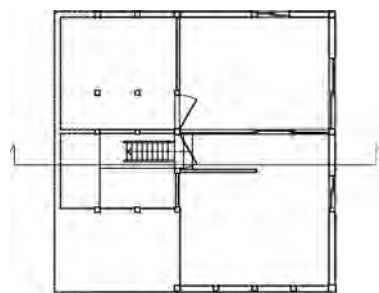


図 3-4-19 隠居屋 (004-2) 2階平面図



図 3-4-20 隠居屋 (004-2) 断面図

## No.010

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落北・山側に位置し、敷地南側に通りがある。敷地中央に主屋（010-2）、その南西側に土蔵を配置している。

なお、屋号は「治郎左（ジロサ）」である。



図3-4-21 No.010 配置図

### <主屋（010-2）>

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り（南入口）である。主屋の4面ともに庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年（1951）当時、庇は杉皮葺であった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。以前の調査によれば、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間やネマ北側の押入の増築・土座に床を張って、2室（ダイドコ、ダイドコ）に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年以降、ネマ北側の押入は増築された。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行5間、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立ち、ザシキ・ネマ境の上屋柱も省略されている。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「推定二百五十年 再建百年前」との記載を訂正し、「推定二百年」と書き換えている。以前の調査の聞き取りでは、明治22年（1889）か翌23年（1890）頃となっている〔余呉町教育委員会1991〕。上屋柱を省略する構造形式や部材表面の風食の程度を踏まえれば、建築年代は明治前期と考えられる。



写真3-4-13 主屋（010-2）外観（南東側）



図3-4-22 主屋（010-2）  
平面図〔余呉町教育委員会1991に加筆修正〕

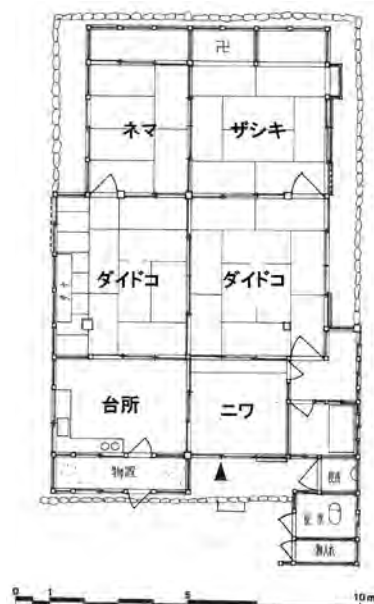




図 3-4-23 主屋 (010-2) 断面図 [余呉町教育委員会 1991]

## No.015

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落北・山側に位置し、敷地東側に通りがある。敷地中央に主屋(015-1)、その西側に土蔵(015-4)、南側に付属屋や外便所を配置する。

なお、屋号は「与茂太」である。

### <主屋 (015-1) >

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り(南入口)である。主屋の南側全面と東側・西側の一部に庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)には、南側の庇は瓦葺であった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。①主屋北側の柱が他の材に比べて新しい、②座敷・寝間は8畳間・板間よりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、座敷・寝間の上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、座敷北側の床の間や寝間北側の押入の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室(8畳間、板間)に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年時点では、座敷北側の床の間や寝間北側の押入は増築されている。また、土間の寝間側上部にタバコが設置されている。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行5間、小屋組は叔首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立っており、座敷・寝間境の上屋柱も省略されている。また、座敷・土座境、寝間・土座境、座敷・寝間境には付樋端がみられるが、座敷・寝間境の付樋端は材が新しい。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「本屋 約百年前」との記載がみられ、部材表面の



図 3-4-24 No.015 配置図



風食の程度も妥当と思われることから、建築年代については、江戸末期と推測される。



写真 3-4-14 主屋 (015-1) 外観 (東側)



写真 3-4-15 主屋 (015-1) 付樋端

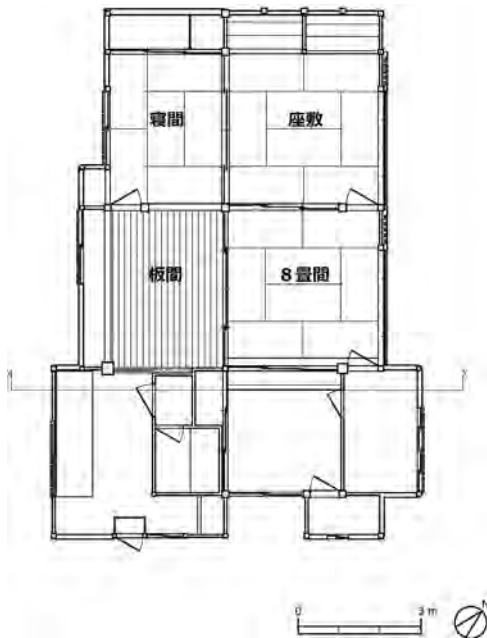


図 3-4-25 主屋 (015-1) 平面図



図 3-4-26 主屋 (015-1) 断面図

### <土蔵 (015-4) >

土蔵の外観は、切妻造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り（南入口）であり、入口は庇がつき、壁で囲う形をとっている。『家屋調査台帳』によれば、屋根は茅葺との記載があり、以前に行われた調査の聞き取りによれば、昭和 24 年（1949）に茅葺の屋根に金属板を被せ、平成 14 年（2002）に金属板を被せ直した〔大野沙織 2010〕。

土蔵の平面は梁間 2 間・桁行 3 間、2 階建の規模を持つ。1 階部分は土間部分と床上部分に分かれており、床上部分の奥側に造り付けの米入れがある。ただ、床組みの状況などから、当初は 2 間×2 間の土間の奥に、2 間×1 間の米入れがつく平面構成であったと推測された。米入れの内側に野物の柱のものが立っており、2 階の床を突き抜けて棟木を支えている。

土蔵の屋根構造は扱首組を用いた置屋根形式、勾配が約 50 度と茅葺の屋根としては少し急な角度である。4 本の扱首を斜材でつないで筋交いとし、屋根が倒れるのを防ぐ工夫を取っ

ている。

『家屋調査台帳』には、土蔵のところに「約百五十年前」との記載がみられ、部材表面の風食の程度もそのあたりの時代のものと考えられるため、建築年代については江戸後期と考えられる。当地で戦前まで一般的であった茅葺土蔵の遺構として貴重な建物である。



写真 3-4-16 土蔵 (015-4) 外観 (南東側)



写真 3-4-17 土蔵 (015-4) 小屋組

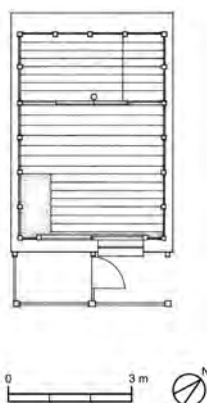


図 3-4-27 土蔵 (015-4) 1階平面図  
〔大野沙織 2010〕



図 3-4-28 土蔵 (015-4) 断面図  
〔大野沙織 2010〕

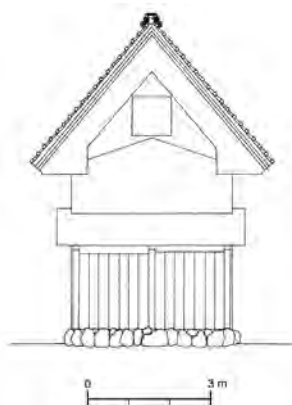


図 3-4-29 土蔵 (015-4) 立面図 (南側) 〔大野沙織 2010〕

## No.017

## ＜敷地＞

敷地は、高時川右岸側の集落北・山側に位置し、敷地西側に通りがある。敷地中央に主屋（017-1）、その北西側に隠居屋を配置する。

なお、屋号は「八右衛門」である。

## ＜主屋（017-1）＞

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り（南入口）である。入口よりネマ側上部に、一部屋根を切り上げた明かり窓があり、主屋の3面（東・南・西）に庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年（1951）頃には、庇は杉皮葺であった。



図 3-4-30 No.017 配置図

主屋は平屋建で、ツシをもつ。以前の調査によれば、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定されている〔余呉町教育委員会 1991〕。後に、ザシキ東側の縁側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室（ダイドコ、ダイドコ）に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年以降に、ザシキ東側の縁側は増築されている。なお、イロリは土座のネマ側に2つあったという。また、土間（ニワ）にはダイドコ境に唐臼が、右手には藁打石があり、農作業の場であった〔余呉町教育委員会 1991〕。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行5間、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立っており、ザシキ・ネマ境の上屋柱も省略されている。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「明治二十年建立」との記載がみられ、以前の調査でも、福井で大工修行を積んだ先祖が明治20年（1887）以前に建てたものであるとしている〔余呉町教育委員会 1991〕。よって、建築年代については、明治20年と考えられる。



写真 3-4-18 主屋（017-1）外観（南側）



写真 3-4-19 主屋（017-1）十字梁〔余呉町教育委員会 1991〕

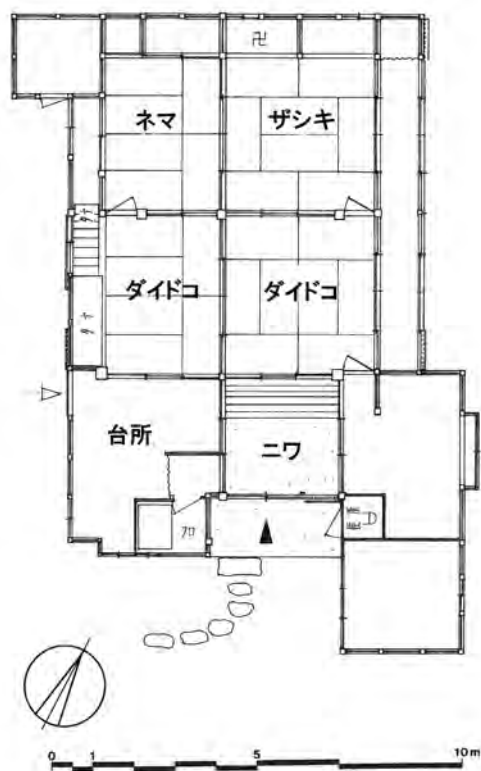


図 3-4-31 主屋 (017-1) 現状平面図  
〔余呉町教育委員会 1991 に加筆修正〕

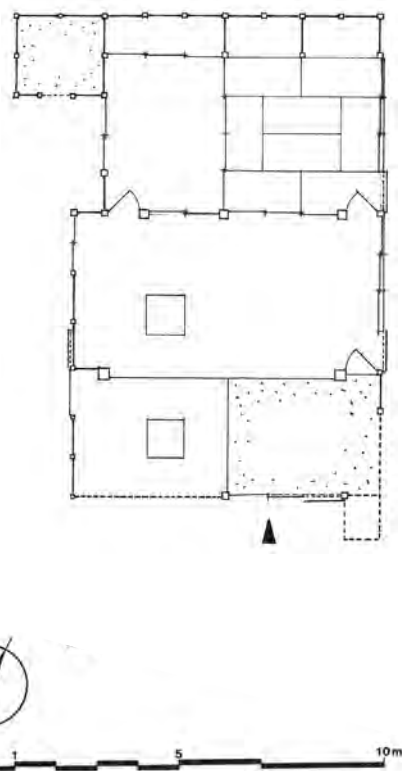


図 3-4-32 主屋 (017-1) 復原平面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕



図 3-4-33 主屋 (017-1) 断面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕

## No.019

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落の山際の南北路の西側に所在する。敷地南側に主屋（019-1）が建ち、北側には土蔵（019-3）が建つ。敷地東側、南北路寄りには2階建の農業用倉庫が建つ。屋号は「三郎太郎（サブ）」である。



図 3-4-34 No.019 配置図

## ＜主屋（019-1）＞

主屋の外観は、入母屋造の茅葺をトタンで覆った金属板葺屋根である。入口は妻入りで南面に設けられている。スイジバ上部には屋根の一部を切り上げた明かり窓がつく。

主屋は平屋建てで、ツシを持つ。トバコは土間上部のネマ側にあった。建築当初の平面はザシキ・ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りであったが、後にザシキ北側に床の間を増築し、床の間の奥壁には明かり窓がつく。土座に1段低く床を張り落ち間とし、ニシノダイドコロ、ヒガシノダイドコロに2分割し、土間には床を張ってスイジバとしたと考えられる。上げ間と落ち間の境には25cmの高低差がある。養蚕をおこなっており、囲炉裏がニシノダイドコロ、ヒガシノダイドコロ、スイジバの3か所にあった。主屋の東南角の外側にウマヤが突き出していた。

主屋の構造は、上屋は梁間3間・桁行5間、土座・土間上部に十字梁が架かる。大黒柱は280mm×280mm、小黒柱は230mm×240mmを測る。大黒柱、小黒柱、土座とザシキ・ネマの境柱などの柱の4隅には面取りが施されている。ザシキ・ネマ境の独立柱はない。小黒柱とその外側の側柱の間には唐臼が据えられていた。

昭和26年（1951）の『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約三百年前」との記載がみられる。構造形式や柱に広めの面取りが施されていることを勘案しても、建築年代は下がり、江戸後期と考えられる。



写真 3-4-20 主屋（019-1） 外観（東側）



写真 3-4-21 主屋（019-1） ニシノダイドコロ

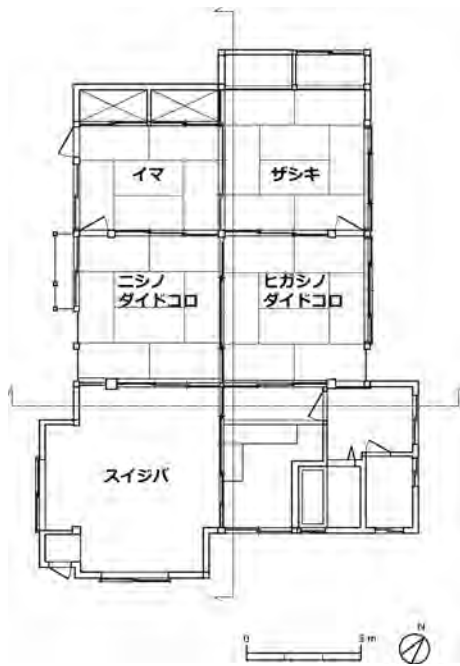


図 3-4-35 主屋 (019-1) 平面図



図 3-4-36 主屋 (019-1) 梁間断面図



図 3-4-37 主屋 (019-1) 桁行断面図

### <土蔵 (019-3) >

土蔵造、2階建、切妻造、波トタン板葺であり、東面する。

平面は、梁間2間半・桁行3間、半間毎に角柱を立てる。1階は東面いっぱい半間の下屋を設け、南端に半間幅の出入口を設ける。2階南面に窓を設ける。1階は北側奥行約1間の位置に間仕切りと横棧板戸を設ける。

小屋組は、登梁とする。聞き取りによれば元は置屋根であり、台風で損壊した後に補修したとのことである。妻側壁面土壁には地棟の痕跡が認められる。

外部は大壁であるが、現在は波トタン板で覆う。下屋内部のみ壁体外部の土壁が露出している。1階部分まで豎羽目を用いる。1階内部壁面は板壁を張る。2階内部壁面は露出する貫に下げ苧に相当する植物性の繊維が巻き付けてある。聞き取りによる指摘では、繊維はツタを用いるとされる。

補修部分から、壁体内の竹材の配置などが観察される事例で、残存部分は当初形態を良く残すことから、構法などを知るうえで貴重な事例と考えられる。



写真 3-4-22 土蔵 (019-3) 外観 (南東側)



写真 3-4-23 土蔵 (019-3) 小屋組

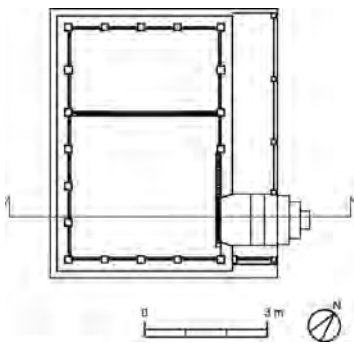


図 3-4-38 土蔵 (019-3) 1階平面図



図 3-4-39 土蔵 (019-3) 断面図

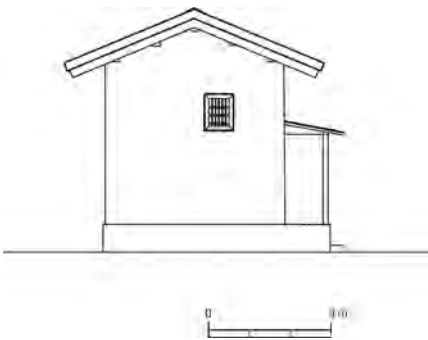


図 3-4-40 土蔵 (019-3) 立面図 (南側)

## No.020

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落の山際の南北路の西側に所在する。敷地北側に主屋が建ち、主屋（020-1）の南西側には土蔵（020-3）が建ち、南には農業用倉庫が、西には倉庫（020-2）が建つ。屋号は「長右衛門（チョエモン）」で、現所有者（昭和19年（1944）生まれ）の曾祖父が尾羽梨から移築している。



図 3-4-41 No.020 配置図

## ＜主屋（020-1）＞

主屋の外観は、入母屋造の茅葺をトタンで覆った金属板葺屋根である。入口は妻入りで南面に設けられている。

ダイドコロ上部には屋根の一部を切り上げた明かり窓がつく。主屋の南面は全面に、北・東・西面には部分的に下屋がつく。

主屋は平屋建で、ツシを持つが、トバコは確認されていない。建築当初の平面はザシキ・ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りであったが、後にザシキ北側の床の間を増築、土座に1段低く床を張って落ち間とし、キャクマ、イマに2分割し、土間の西半に床を張ってダイドコロとした。養蚕をおこなっていたが、囲炉裏の場所は不明である。

主屋の規模は、上屋は梁間2間半・桁行4間、土座・土間上部に十字梁が架かる。ネマ側の大黒柱は240mm×240mm、ザシキ側の小黒柱は210mm×190mmを測る。ネマ・イマ境の胴差下部には付樋端が和釘で留められ、ザシキ・ネマ境の胴差の下部には丸釘で留められている。主だった柱には面取りが施され、柱・梁にはケヤキが多用されている。ザシキ・ネマ境の独立柱はない。

現所有者（昭和7年（1932）生まれ）は祖父から「奥川並から移築した」と聞いている。昭和26年（1951）の『家屋調査台帳』には、主屋のところに「二百年前 再建明治22年」との記載がみられ、明治22年（1889）に移築されたと考えられる。構造形式から、建築年代については、もう少し年代が下がり、江戸後期から末期と考えられる。ザシキ・ネマ境の胴差の上に立つ東柱には、ザシキにもかかわらず番付が書きつけられたまま残っている。



写真 3-4-24 主屋（020-1）外観（南東側）



写真 3-4-25 主屋（020-1）キャクマ



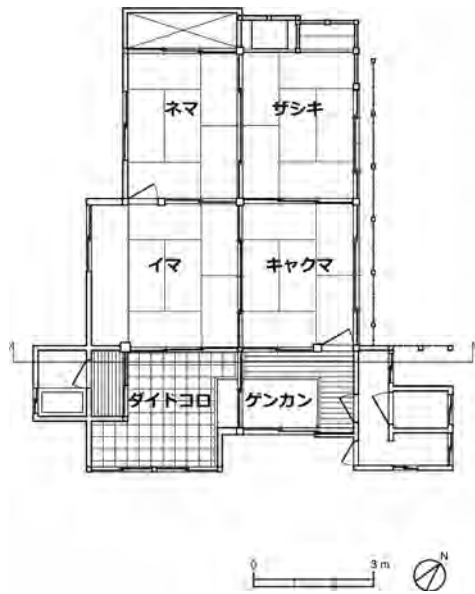


図 3-4-42 主屋 (020-1) 平面図



図 3-4-43 主屋 (020-1) 断面図

### <土蔵 (020-3)、隠居屋 (020-4) >

土蔵造、2階建、切妻造、置屋根、棧瓦葺であり、東面する。南側の隠居屋と接する。

平面は、梁間2間・桁行2間半、半間毎に角柱を立てる。1階は東面に約半間の出入口を設ける。2階東面に窓を設ける。1階は北側奥行1間の位置に間仕切りと横棧板戸、後補とみられる根太と化繊筵敷床が用いられている。

小屋組は、天秤梁相当の曲材の梁に地棟を架ける。登梁は地棟上で組む。置屋根は置桁上に棟上で相欠組の登梁を設ける。

壁体外部は大壁土壁、1階部分まで豎板張がみられる。1階内部壁面の間仕切り北側は豎板壁としている。1階内部南側と2階内部壁面は露出する貫に下げ苧に相当する植物性の繊維が巻き付けてある。聞き取りによると、繊維はツタとされる。

隠居屋との接続は土蔵+隠居屋 (003-2) にも類例が認められる。内部改変は加えられているが、菅並集落の土蔵の典型として重要な事例といえる。



写真 3-4-26 土蔵 (020-3)、隠居屋 (020-4)  
外観 (東側)



写真 3-4-27 土蔵 (020-3) 小屋組

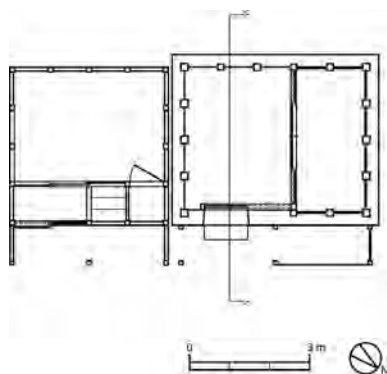


図 3-4-44 土蔵 (020-3) 隠居屋 (020-4) 1階平面図



図 3-4-45 土蔵 (020-3) 断面図

### <倉庫 (020-2) >

真壁造、平屋建、切妻造、トタン板葺であり、南面する。

平面は、梁間1間半・桁行2間、桁側に1間毎に角柱を立てる。南面に1間の出入口を設け引戸を用いる。

小屋組は、梁上に束を立て棟中央の束で棟木を架ける。梁に頬杖を用いる。壁体外部は土壁、一部を豎羽目板を張る。軒下に頬杖。外部妻側に梁・柱・束を見せ、梁下に長押状の部材が見られる。内部壁面は東側を杉皮張とする。柴や農具などを収納するときに土壁が削られないように杉皮を張ったと考える。

簡素な倉庫であるが、内部壁の杉皮張は他に集落内に事例がみられず、妻側の部材の露出など意匠的な工夫も見られることから、菅並集落での付属屋を知るうえで評価すべき事例と考えられる。



写真 3-4-28 倉庫 (020-2) 小屋組

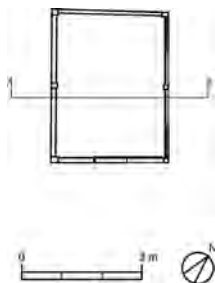


図 3-4-46 倉庫 (020-2) 平面図

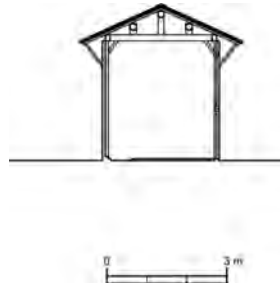


図 3-4-47 倉庫 (020-2) 断面図

## No.024、No.025

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落の中央近く、中央の南北路と山際の南北路を繋ぐ東西路に接して建つ。屋号は「三右衛門（サンニョ）」である。東西路の北と南に敷地があり、北側の敷地に主屋（024-3）とその西に蔵が建つ。南側の敷地には隠居屋（025-1）が建つ。もとは前所有者が主屋として使っていたが、当家が借りて現在は隠居屋としている。



図 3-4-48 No.024、No.025 配置図

## ＜主屋（024-3）＞

主屋は2階建、切妻造、瓦葺である。入口は妻入りで、南面に設けられている。主屋はザシキ・ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側2室の増築が行われ、土座に1段低く床を張って落ち間のダイドコロとし、土間の西半分には床を張り、スিজバとするなどの改変が行われた。聞き取りでは昭和30年代から40年代まで土座であったとのことである。

屋根は、聞き取りによると、元々が茅葺であり、上屋根、上屋梁から上を取り払い、和小屋を組み、瓦屋根にした。4周を下屋が廻る。スিজバの上部に妻側に引き違い戸の付くトバコが残っている。

主屋の規模は、上屋は梁間3間・桁行5間、土座・土間上部に十字梁が架かる。ネマ側の大黒柱は270mm×290mm、ザシキ側の小黒柱は245mm×260mmを測る。ザシキ・ネマ境の独立柱はない。小黒柱と側柱の半間の間には唐白を備え付けていた痕跡が残る。囲炉裏がスিজバとダイドコロのネマ側の2か所にあった。

昭和26年（1951）の家屋調査台帳には、主屋は「明治21年建立」と書き込みがあり、明治21年（1888）の建築と考えられる。



写真 3-4-29 主屋（024-3） 外観（南側）



写真 3-4-30 主屋（024-3） ダイドコロ（東）

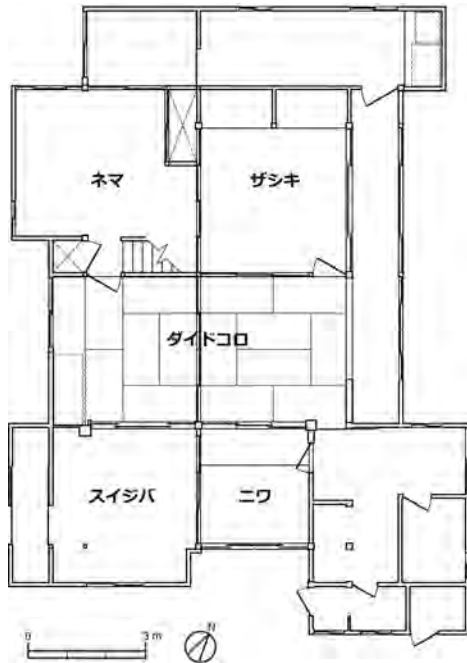


図 3-4-49 主屋 (024-3) 1階平面図

### < 隠居屋 (025-1) >

前所有者が主屋として使っていたが、現在は当家が借りて、隠居屋として使う。隠居屋は2階建、切妻造、トタン葺で、4周をトタン葺の下屋が廻る。本来の入口は妻入りで南面に設けられていたが、現在は資材の出し入れをするため東側の壁面やザシキ、ネマ、土座部分の床を撤去し、土間として使用している。2階も物置に改装されている。屋根も茅葺から瓦葺に改装したものである。

主屋の規模は、上屋は梁間3間・桁行3間半、土座・土間上部に十字梁が架かる。ネマ側の大黒柱は140mm×150mm、ザシキ側の小黒柱は160mm×160mmを測る。内部の改装が激しく、詳細は不明である。

昭和26年(1951)の家屋調査台帳には、主屋は「大正10年建立」書き込みがあり、大正10年(1921)の建築と考えられる。



写真 3-4-31 隠居屋 (025-1) 外観 (東側)



写真 3-4-32 隠居屋 (025-1) 十字梁

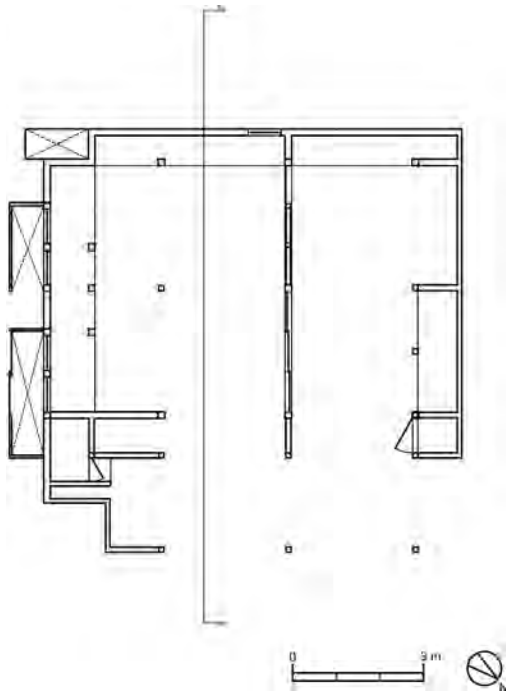


図 3-4-50 隠居屋 (025-1) 1階平面図



図 3-4-51 隠居屋 (025-1) 断面図

## No.026

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落中央に位置し、敷地西側に通りがあり、東西に長い形状である。敷地中央に主屋 (026-1)、その東側に隠居屋、南側に外便所を配置している。

なお、屋号は「庄左衛門」である。

### <主屋 (026-1) >

主屋の外観は、切妻造・棧瓦葺・妻入り（南入口）であり、主屋の4面ともに庇がつく。

主屋は2階建、当初は2階部分を、ツシとして利用し、後に一部を居室化していったと推測される。ザシキ・ネマが6畳間・ダイドコロよりも1段高くなっていることから、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室に分割・土間に床を張るなどの改変が行われたと推測される。なお、『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年（1951）時点では、現在の規模とほぼ同じであり、後に西側の風呂部分が増築されたことがわかる。

主屋の構造は、上屋は梁間3間・桁行5間、小屋組は和小屋、土座・土間境には大黒柱・



図 3-4-52 No.026 配置図

小黑柱が立つ。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「大正二年建立」との記載がみられ、部材表面の風食の程度からも妥当と考えられるため、建築年代は大正2年（1913）と推定される。



写真 3-4-33 主屋（026-1）外観（南東側）



写真 3-4-34 主屋（026-1）小屋組

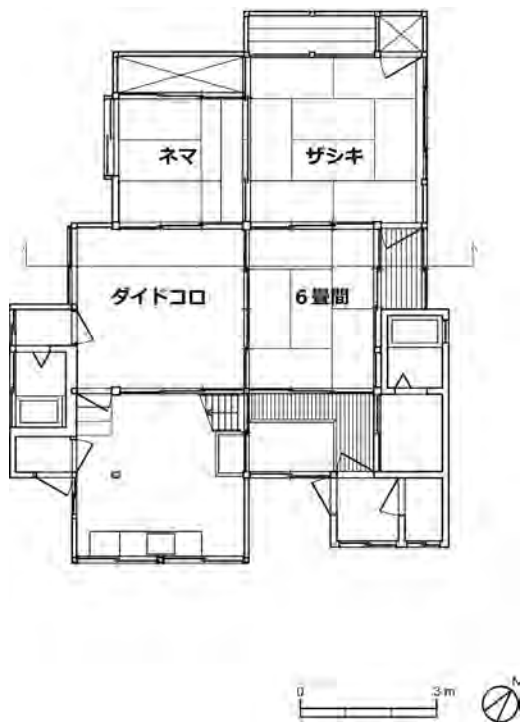


図 3-4-53 主屋（026-1）1階平面図



図 3-4-54 主屋（026-1）断面図

## No.027

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落の中央近くの南北路の西側に所在する。屋号は「善左衛門（ゼンザ）」である。敷地東側に主屋が建ち、主屋（027-1）の南に隠居屋が建ち、主屋（027-1）の西南に外便所が建つ。

## ＜主屋（027-1）＞

主屋は2階建、切妻造、瓦葺で、4周を下屋が廻る。入口は妻入りで南面に設けられている。昭和38年（1963）に茅葺屋根を取り払い、梁間3間・桁行6間の2階を増築し、瓦葺に改築した。ツシヤ、タバコはなく、米は蔵に収納していた。



図3-4-55 No.027 配置図

建築当初の平面はオザシキ、ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りであった。聞き取り調査では昭和7年から8年（1932～33）まで土座でムシロ敷きであった。現状の間取りは、南から入るとニワを挟んでダイドコロと風呂・脱衣室が配され、その北にダイドコ、ハチジョウが並び、さらにネマ、オザシキと続く。オザシキは4畳と6畳に仕切られる。ネマも3畳と4畳半に仕切られていたらしく、土座と上げ間境から1間の所に柱が立ち、胴差が架かる。土座と上げ間境、オザシキと縁側境、オザシキとネマの4畳と6畳境の胴差の下部には、付樋端もしくはその痕跡が残る。オザシキの4畳と6畳境と、オザシキの6畳と縁側境の付樋端は和釘で留められている。ネマと土座境と、オザシキの4畳と縁側境の付樋端は丸釘で留められている。ネマの3畳と4畳半境の胴差の下部には、付樋端を和釘で留めた痕跡が残る。オザシキと土座境も付樋端が付くが、ベンガラが塗られており、釘の形状は不明である。

主屋の規模は、上屋は梁間3間・桁行6間、土座・土間上部に十字梁が架かる。ネマ側の大黒柱は335mm×335mm、ザシキ側の小黒柱は265mm×265mmを測る。大黒柱、小黒柱、オザシキとネマの境柱、土座とオザシキ・ネマの境柱の、柱の4隅には面取りが施されている。オザシキ・ネマ境に独立柱はあるが、上屋を支える位置にはない。オザシキの東側の縁側の側柱と上屋柱に架けられた短い梁は雇い柄で上屋柱に繋ぐ。

現所有者（昭和7年（1932）生まれ）は祖父から「奥川並から移築した」と聞いている。昭和26年（1951）の家屋調査台帳には主屋に約百五十年前との書き込みがあり、構造形式や仕上げから江戸末期に移築されたものと考えられる。



写真 3-4-35 主屋 (027-1) 外観 (南東側)



写真 3-4-36 主屋 (027-1) 付樋端

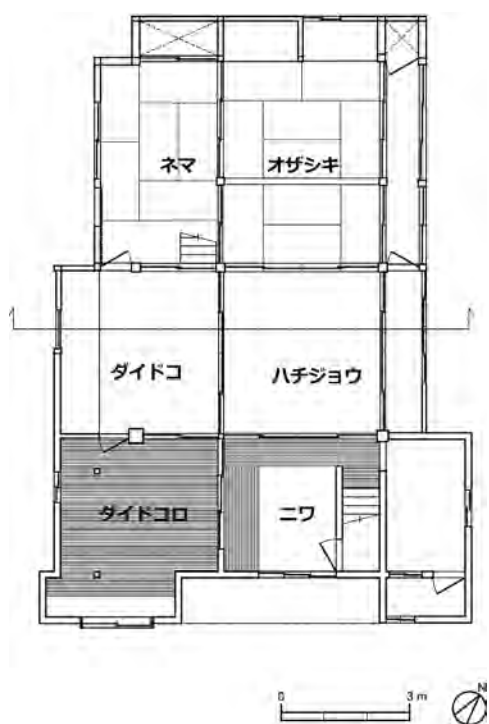


図 3-4-56 主屋 (027-1) 1階平面図



図 3-4-57 主屋 (027-1) 断面図



## No.028

## ＜敷地＞

敷地は、高時川右岸側の集落南の川側に位置し、敷地西側に通りがある。敷地西側に主屋（028-1）を配置し、その東側に隠居屋がある。

なお、屋号は「八蔵」である。



図 3-4-58 No.028 配置図

## ＜主屋（028-1）＞

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・平入り（西入口）であるが、痕跡よりもとは妻入り（南入口）であった。また、もとの入口より寝間側上部に、一部屋根を切り上げた明かり窓がある。主屋の4面ともに庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年（1951）には庇は瓦葺であった。

主屋は平屋建てで、ツシをもつ。①座敷北側の柱が他の材に比べて新しい、②座敷・縁側境に戸袋跡、③座敷・寝間が8畳間・6畳間よりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、座敷、寝間の上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、座敷北側の床の間や西側の縁側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室（8畳間、6畳間）に分割・土間東側に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年時点では、座敷北側の床の間や西側の縁側はすでに増築されている。また、土間の寝間側上部にタバコが設置されている。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立っており、座敷・寝間境の上屋柱も省略されている。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約百五十年」との記載がみられるが、構造形式や部材表面の風食の程度から、建築年代については、もう少し年代が下がり、江戸末期と考える。なお、一般的な菅並集落の主屋と異なり、座敷が山側に位置している平面構成であるため、移築されてきた可能性が考えられる。



写真 3-4-37 主屋 (028-1) 外観 (南側)



写真 3-4-38 主屋 (028-1) トバコ

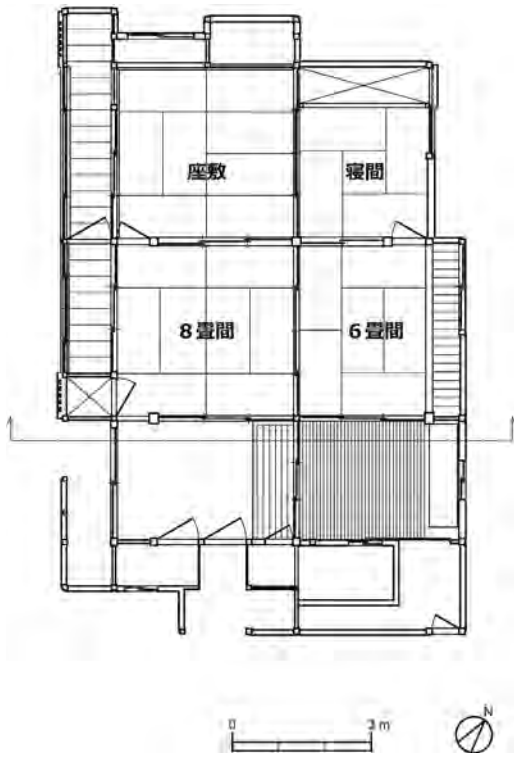


図 3-4-59 主屋 (028-1) 平面図



図 3-4-60 主屋 (028-1) 断面図

## No.029

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落の中央近くの南北路の西側に所在する。敷地南側に主屋（029-1）が建ち、北側には土蔵（029-2）が建つ。屋号は「金蔵」である。

## ＜主屋（029-1）＞

主屋の外観は、入母屋造の茅葺屋根をトタンで覆った金属板葺屋根である。入口は妻入りで南面に設けられている。主屋の南面は全面、北・西面には部分的に金属板葺の下屋がつく。

主屋は平屋建てで、天井などを改装したため、ツシの状況は確認できていない。タバコはニワの上部のネマ側に設けられていた。



図 3-4-61 No.029 配置図

建築当初の平面はザシキとネマの上げ間、土座、ニワとウシゴヤの土間からなる広間型三間取りであったが、土座に1段低く床を張り、落ち間とし、イマを2分割し、土間には床を張ってダイドコロとした。養蚕を行っており、イマに囲炉裏が2か所あった。

主屋の規模は、上屋は梁間3間半・桁行6間、土座・土間上部に架かる十字梁の桁の長さは6間を測る規模の大きなものである。ネマ側の大黒柱は290mm×300mm、ザシキ側の小黒柱は240mm×240mmを測る。大黒柱、ザシキとネマの境柱、土座とザシキ・ネマの境柱の3本の柱には面取りが施されている。

ザシキ・ネマと土座境の胴差の下部には付樋端が丸釘で留められている。ネマの西端の胴差の下部には付樋端の痕跡が残る。ザシキ・ネマと土座境と、ザシキ・ネマの境の胴差はいずれもケヤキで側面に手斧仕上げのような跡が残る。ザシキ・ネマ境には独立柱が1本立つ。

座敷の床廻りや、ネマの押入れ廻りは後補であり、床の間の奥壁には明かり窓がつく。長押は仏壇と床の間の前に限られる。

昭和26年（1951）の家屋調査台帳には主屋に約二百年前との書き込みがあり、構造形式や仕上げから江戸後期のものと考えられる。



写真 3-4-39 主屋（029-1）外観（南東側）



写真 3-4-40 主屋（029-1）タバコ

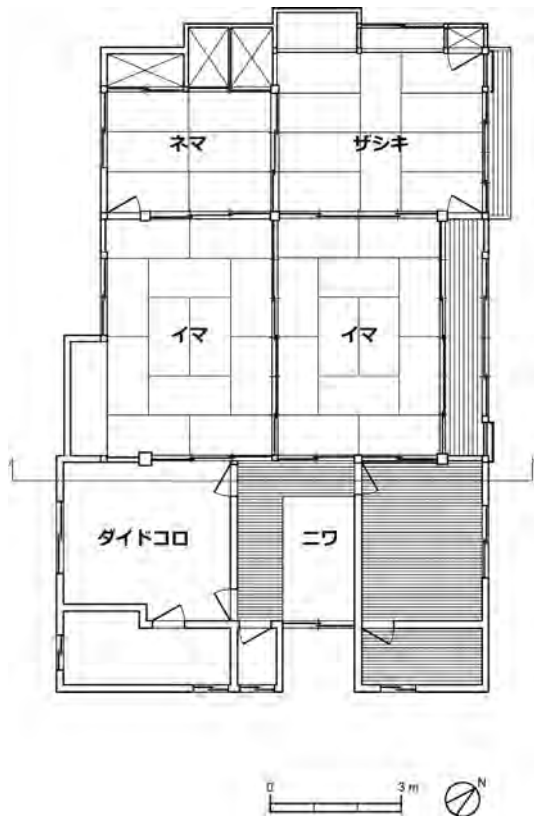


図 3-4-62 主屋 (029-1) 平面図



図 3-4-63 主屋 (029-1) 断面図

### <土蔵 (029-2) >

土蔵造、2階建、切妻造、置屋根、棧瓦葺であり、南面する。北側に後補とみられる車庫が接する。

平面は、梁間2間余・桁行2間半、およそ半間毎に角柱を立てる。1階は南面に約半間の出入口を設ける。2階東面に窓を設ける。1階は北側奥行1間の位置に間仕切りがみられる。

小屋組は、天秤梁相当の曲材の梁に地棟を架ける。登梁は地棟上で組まれている。置屋根は置桁上に棟上で相欠組の登梁を設ける。置屋根登梁端に刳形がみられる。

壁体外部は大壁漆喰塗壁、1階部分まで豎羽目板張としている。1階内部壁面の間仕切り北側は板壁である。2階内部壁面は貫と、下げ苧を伴う尺八竹が露出した土壁で、一部に垂直方向の竹材が露出している。

南面妻側に「水」の文字を示す円形の蔵印がみられる。土壁の構造や天秤梁に相当する曲材の様子は、土蔵の構法の多様性を示す事例として極めて貴重である。



写真 3-4-41 土蔵 (029-2) 外観 (南側)



写真 3-4-42 土蔵 (029-2) 小屋組

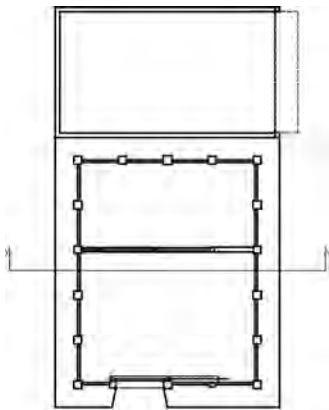


図 3-4-64 土蔵 (029-2) 1階平面図

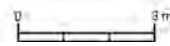


図 3-4-65 土蔵 (029-2) 断面図



図 3-4-66 土蔵 (029-2) 立面図 (南側)

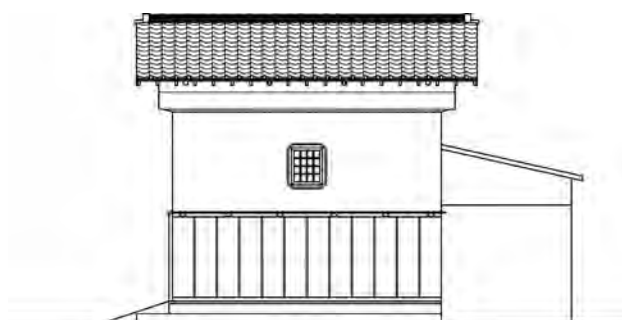


図 3-4-67 土蔵 (029-2) 立面図 (東側)

## No.032

## ＜敷地＞

敷地は、高時川右岸側の集落南・川側に位置し、敷地東側と南側に通りがある角地である。敷地南側に主屋(032-1)を配置し、その北側に車庫や隠居屋、南側に物置・外便所が並ぶ。

なお、屋号は「作治」である。

## ＜主屋(032-1)＞

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り(南入口)である。入口よりネマ側上部に、一部屋根を切り上げた明かり窓があり、主屋の4面ともに庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)当時、庇は杉皮葺であり、現在はすべて金属板葺に変わった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。①ザシキ・ネマと床の間・押入で塗り込めた壁面が面一でない、②ザシキ・縁側境に戸袋跡があり、縁側側の柱面の風食が激しい、③ザシキ・ネマはキャクマ・イマよりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間や西側の縁側、ネマ北側の押入の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、3室(キャクマ、イマ)に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年時点では、ザシキ北側の床の間や西側の縁側は増築されているが、ネマ北側の押入は増築されていない。なお、聞き取りによれば、イロリはイマ、カマドは土間のネマ側、ウマヤは土間のザシキ側にあった。また、土間のネマ側上部にタバコが設置されており、平側に引戸がつく。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱・小黒柱ともに上屋筋に立っており、ザシキ・ネマ境の上屋柱も省略されずに立っている。また、ザシキ・土座境、ネマ・土座境、ザシキ・ネマ境には付樋端がみられる。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約百五十年前」との記載がみられ、部材表面の風食の程度も妥当と考えられることから、建築年代については、江戸後期と推測される。なお、一般的な菅並集落の主屋と異なり、ザシキが山側に位置している平面構成であるため、移築されてきた可能性が考えられる。



図 3-4-68 No.032 配置図



写真 3-4-43 主屋 (032-1) 外観 (南東側)



写真 3-4-44 主屋 (032-1) ザシキ

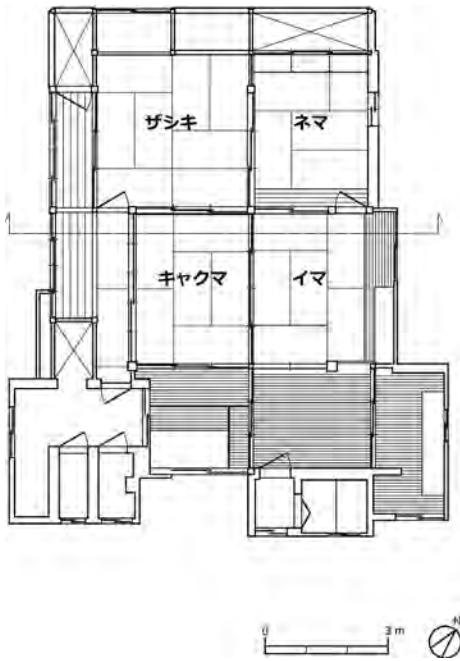


図 3-4-69 主屋 (032-1) 平面図



図 3-4-70 主屋 (032-1) 断面図

## No.035

### <敷地>

敷地は、高時川右岸側の集落南・川側に位置し、敷地東側と北側に通りがある角地である。敷地東側に隠居屋（035-1）を配置している。



図 3-4-71 No.035 配置図

### <隠居屋（035-1）>

隠居屋の外観は、切妻造・金属板葺・平入り（東入口）であるが、現在は塞がれているものの、もとは妻入り（南入口）であった。隠居屋の4面ともに庇がつく。

隠居屋は平屋建である。改変が大きいものの痕跡などから、建築当初の平面は、上げ間と土座・土間を空間的に2分割した形であったと推定され、聞き取りでも土座があったことが確認されている。

隠居屋は、上屋は梁間2間・桁行3間、小屋組は和小屋、余呉型民家でみられる十字梁が上げ間・土座上部に架かっている。桁が2重（上：新材、下：当初材）になっていることや、十字梁の上部に薄梁（簀子天井を支え、部材両端に扱首尻を差す）が残っていることから、もとは扱首組による茅葺の屋根であったと推測される。

『家屋調査台帳』では、該当する建物を特定することができなかった。



写真 3-4-45 隠居屋（035-1）外観（南東側）



写真 3-4-46 隠居屋（035-1）小屋組

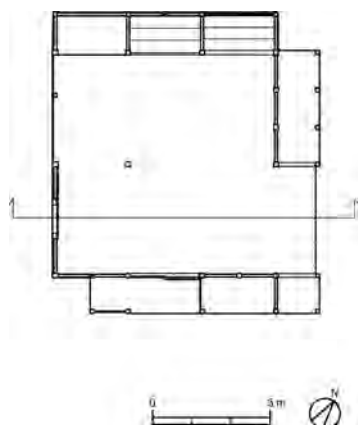


図 3-4-72 隠居屋（035-1）平面図

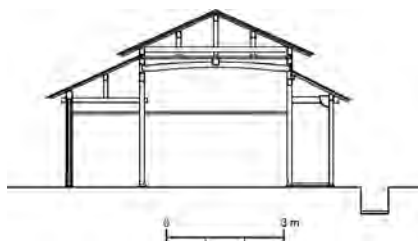


図 3-4-73 隠居屋（035-1）断面図



## No.036

## ＜敷地＞

敷地は、高時川右岸側の集落南・山側に位置し、敷地北側と西側に通りがある角地である。敷地北側に主屋(036-1)を配置し、その南側と西側の通りをはさんで反対側に付属屋がある。屋号は「庄太夫」であるが、高時川右岸側の集落中央部にあった「庄助(シヨスケ)」という屋号の家から分家したという。

## ＜主屋(036-1)＞

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り(南入口)である。入口よりネマ側上部に、一部屋根を切り上げた明かり窓があり、主屋の3面(北・東・南)に庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)当時、庇は杉皮葺であった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。①床の間の柱が他の材に比べて新しい、②所有者への聞き取りより、ネマ北側の押入は昭和50年代に増築、③ザシキ・ネマは板間(8畳間・6畳間)よりも1段高くなっているといったことより、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間やネマ北側の押入の増築・ネマ東側の縁側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室(板間(8畳間、6畳間))に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年以降に、ネマ北側の押入(聞き取りより昭和50年代)や東側の縁側は増築されていると判断できる。なお、聞き取りによれば、イロリは土座のネマ側、カマドは土間のネマ側にあったが、煮炊きはカマドで行った。また、土間のネマ側上部にタバコが設置されており、妻側に引戸がつく。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が、土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱・小黒柱ともに上屋筋に立っているが、ザシキ・ネマ境の上屋柱は省略されている。

『家屋調査台帳』によれば、主屋は、「明治五年移築」との記載がある。そのため、一般的な菅並集落の主屋と異なり、ザシキが山側に位置している平面構成である。部材表面の風食の程度も妥当と考えられることから、建築年代については、明治5年(1892)と推定される。



図 3-4-74 No.036 配置図



写真 3-4-47 主屋 (036-1) 外観 (西側)



写真 3-4-48 主屋 (036-1) 土座上部



図 3-4-75 主屋 (036-1) 平面図



図 3-4-76 主屋 (036-1) 断面図

## No.042

## ＜敷地＞

敷地は高時川右岸の集落中央の南北路と高時川の間に建つ。屋号は「作太夫（サクダユウ）」である。敷地の南側に主屋（042-1）が、その北には土蔵（042-3）が建つ。

## ＜主屋（042-1）＞

主屋の外観は、入母屋造、茅葺屋根を覆った金属板葺である。金属板屋根は瓦葺の屋根を模し、瓦の形をかたどるだけでなく、降り棟や屋根を支える垂木も丁寧に作り出している。屋根裏には昭和52年（1977）にトタン屋根に葺き替えた際の棟札が残る。主屋の南・東・西面は全面に、北面には部分的に瓦葺の下屋がつく。主屋全体の立ちが高い。入口は妻入りで南面に設けられている。南面には屋根の一部を切り上げた明かり窓がネマ側につく。

主屋はザシキ、ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りに建築当初から2部屋を付加したものである。南からニワ、ダイドコロ、次にダイドコが2室、クチザシキ、クチネマ、さらにオクザシキ、オクネマと続く。

オクザシキ、オクネマにはそれぞれに床の間が構えられ、オクネマの床の間には書院が付く。オクネマの床と脇床の間には狝潜りが開けられている。

主屋の規模は、上屋は梁間3間・桁行7間、土座・土間上部に十字梁が架かる。ネマ側の大黒柱は330mm×340mm、ザシキ側の小黒柱は258mm×260mmを測る。大黒柱、小黒柱、ザシキとネマの境柱、土座とザシキ・ネマの境柱の4隅には面取りが施されている。ザシキ・ネマ境の独立柱はない。トバコは十字梁を構成する桁の上のネマ側に現存している。

西側のダイドコには落炬燵と囲炉裏が、ニワの東端の小部屋にも囲炉裏があった。小部屋とニワの境の柱には、2段の横木を差し込んだ痕跡があり、ウシゴヤであったと考えられる。

なお、西のダイドコに置かれた水屋の中に大黒が祀られる。菅並集落南方の摺墨集落の旧永井良治家住宅でも同様の事例が報告されており（『高時川ダム建設地域民俗文化財調査報告書』）、この地域における大黒信仰の在り方を伝える貴重な事例である。昭和26年（1951）の家屋調査台帳には、主屋は明治18年（1885）の書き込みがあることや、建物の立ちが高く居室も広いこと、明治23年（1890）頃の建築とされる上丹生集落の城楽直家住宅（『高時川ダム建設地域民俗文化財調査報告書』）と似ていることから明治中期の建物と考えられる。



図3-4-77 No.042 配置図



写真 3-4-49 主屋 (042-1) 外観 (南側)



写真 3-4-50 主屋 (042-1) ニワ上部

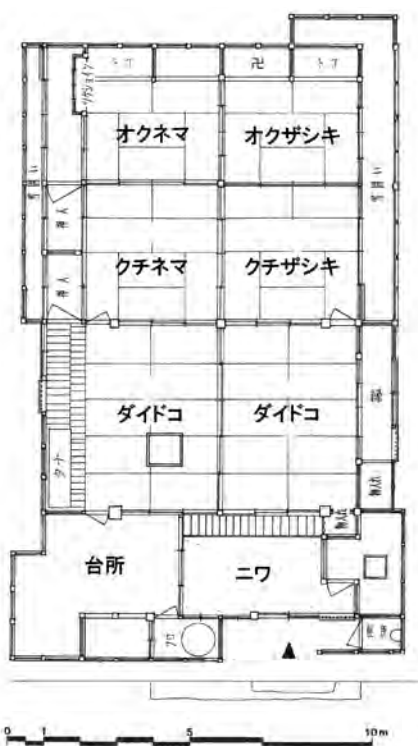


図 3-4-78 主屋 (042-1) 現状平面図  
〔余呉町教育委員会 1991 に加筆修正〕

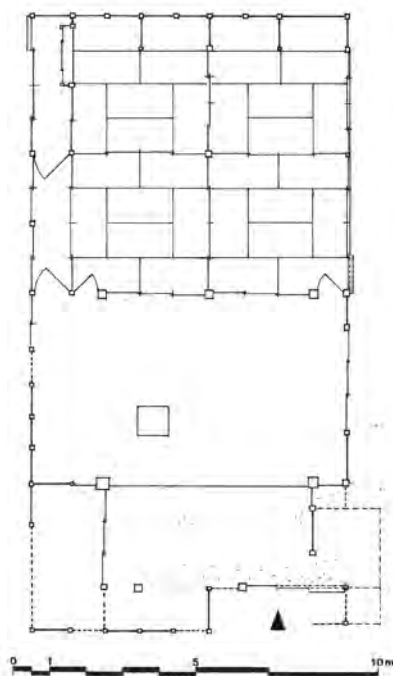


図 3-4-79 主屋 (042-1) 復原平面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕

図 3-4-80 主屋 (042-1) 断面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕



<土蔵 (042-3) >

土蔵造、2階建、切妻造、置屋根、棧瓦葺であり、西面する。

平面は、梁間2間・桁行4間、半間毎に角柱を立てる。1階は西面に約半間幅の下屋を設け、半間の出入口を設ける。2階西面に窓2面を設ける。1階は現状土間、北側に落とし込み板壁の穀物貯蔵装置を設ける。

小屋組は、天秤梁に地棟を架ける。登梁は地棟上で組まれている。置屋根は置桁上に棟上で相欠組の登梁を設ける。

外部は大壁漆喰塗壁、外周を波トタン板、一部を豎羽目張とする。1階内部と2階内部壁面の貫に掛けられる下げ葎に相当する部材に針金が用いられている。針金は銅線とみられており、和釘の使用から建築年代は明治初期から中期と推定する。1階、2階とも柱に墨書が認められる。2階墨書に「太郎衛門□き作太夫之□候／□作／作太夫 大福／御縁すくひにてたのみ申し候／かしこ申候以上六月十六日」。作太夫は屋号。聞き取りによれば、移築の可能性もある。墨書の記録を伴う重要な事例といえる。



写真 3-4-51 土蔵 (042-3) 外観 (南側)



写真 3-4-52 土蔵 (042-3) 柱の墨書



写真 3-4-53 貫にかかる下げ葎相当の針金材

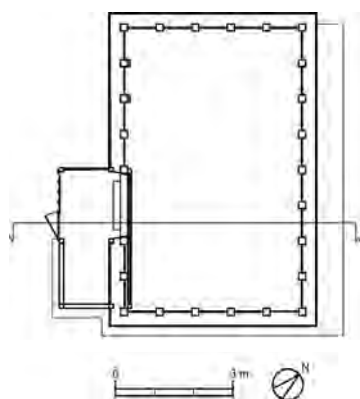


図 3-4-81 土蔵 (042-3)  
1 階平面図

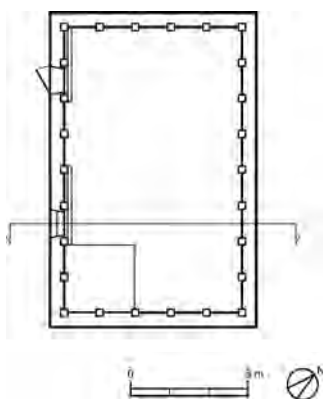


図 3-4-82 土蔵 (042-3)  
2 階平面図



図 3-4-83 土蔵 (042-3)  
断面図

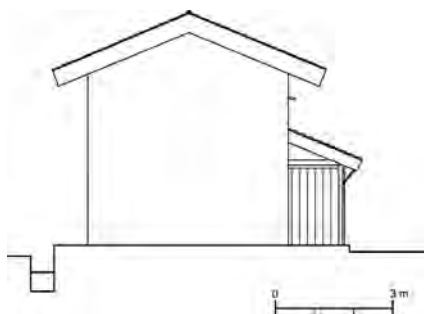


図 3-4-84 土蔵 (042-3) 立面図 (北側)



図 3-4-85 土蔵 (042-3) 立面図 (西側)

## No.044

## ＜敷地＞

敷地は、高時川左岸側の集落北・山側に位置し、敷地北側と西側に通りがある角地である。敷地北側に主屋(044-3)を配置し、その西側に付属屋、南西側に外便所(044-2)、南側に土蔵(044-4)がある。また、主屋東側を流れる水路をはさんで南東方向の少し離れたところに、隠居屋(044-5)がある。

なお、屋号は「与茂太夫(ヨモダユウ)」であるが、東林寺に安置されている仁王像1対に、「享和二戌年再建立寄進与茂太夫」の裏書があり、当家のことであると考えられる。



図 3-4-86 No.044 配置図

## ＜主屋(044-3)＞

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り(南入口)である。入口上部には、一部屋根を切り上げた明かり窓があり、主屋の4面ともに庇がつく。

主屋は平屋建てで、ツシをもつ。①主屋北側の柱が他の材に比べて新しい、②イマ(西側)・縁側境に雨戸跡、③ザシキ・ネマはイマよりも1段高くなっているといったことより、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間や西側の縁側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室(イマ、イマ)に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ、現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年(1951)時点では、すでに現在の規模と同じ平面になっていたと考えられる。なお、聞き取りによれば、イロリは土座の中央にあったという。また、土間のネマ側上部にタバコが設置されており、平側に引戸がつく。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が、土座・土間上部に架かる。土座・土間境にある大黒柱が上屋筋より半間外側に立っており、ザシキ・ネマ境の上屋柱も省略されている。また、ザシキ・ネマ境には付樋端がみられる。『家屋調査台帳』には、主屋のところに「150年前」との記載がみられるが、所有者によれば、幕末頃から明治初期の間に建てられたという。部材表面の風食の程度などから判断するに、建築年代については、江戸末期と考える。



写真 3-4-54 主屋 (044-3) 外観 (南側)



写真 3-4-55 主屋 (044-3) ザシキ



図 3-4-87 主屋 (044-3) 平面図



図 3-4-88 主屋 (044-3) 断面図

### <土蔵 (044-4) >

土蔵の外観は、切妻造・棧瓦葺・妻入り（北入口）・置屋根である。入口側に半間の庇をかけ、戸前を板壁で囲んでいる。東側・西側の外壁は大壁造で、腰に下見板を張る。腰上は中途仕上げとなっているが、各壁面で数か所ずつ漆喰が残っていたことにより、もとは漆喰仕上げであったと考えられる。また、北側（妻面）は竹菱木をゴザ目にしたもの、南側は目板張りで腰壁の上を覆っている。

土蔵は2階建、その平面規模は2間×3間、入口は引戸である。1階は、入口側が土間、その奥に床を張って空間を2分している。2階は調査を行っていない。

『家屋調査台帳』によれば、主屋は「100年前」との記載があり、部材表面の風食の程度も妥当と考えられるため、建築年代については、江戸末期と推定される。





写真 3-4-56 土蔵 (044-4) 外観 (北側)



写真 3-4-57 土蔵 (044-4) 壁面のゴザ目の竹菱木

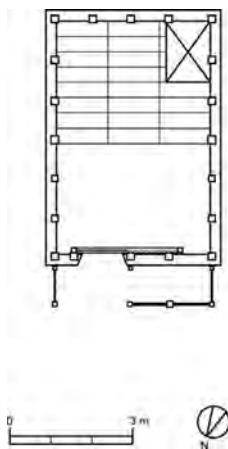


図 3-4-89 土蔵 (044-4) 1階平面図

### < 隠居屋 (044-5) >

隠居屋の外観は、切妻造・棧瓦葺・平入り（西入口）である。入口上部には、明かり窓があり、西側、南側の2面に庇がつく。

隠居屋は平屋建で、ツシがあったと考えられる。10 畳間は6 畳間よりも1 段高くなっていることにより、建築当初の平面は、上げ間と土座・土間を空間的に2 分割した形であった。後に、土座に1 段低く床を張って落ち間とし、土座・土間を建具で仕切るなどの改変が行われたと推測される。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年（1951）時点では、西側と南側の庇部分がなかったことが分かり、特に上げ間の床の間は昭和26年以降の増築と推定できる。なお、聞き取りによれば、イロリは土座の中央あたりにあった。

隠居屋の構造は、上屋は梁間2 間半・桁行4 間、小屋組は和小屋であるが、余呉型民家で見られる十字梁が、上げ間・土座上部に架かる。桁が2 重（上：新材、下：当初材）になっていることや、十字梁の上部に薄梁（簀子天井を支え、部材両端に扱首尻を差す）が残っており、『家屋調査台帳』の記載からみても、もとは扱首組による茅葺の屋根であったことがわかる。

『家屋調査台帳』には、隠居屋に関する建築年代の記載がみられない。なお、一般的な菅並集落の主屋などとは異なり、座敷が南側の平面構成であるため、移築されてきた可能性が考えられる。



写真 3-4-58 隠居屋 (044-5) 外観 (西側)



写真 3-4-59 隠居屋 (044-5) 十字梁



図 3-4-90 隠居屋 (044-5) 平面図



図 3-4-91 隠居屋 (044-5) 断面図

### < 便所 (044-2) >

便所の外観は、切妻造・棧瓦葺、小屋組は和小屋である。柱や梁などの主要材をベンガラ塗としている。

平面規模は半間×1間半であるが、中央に半間×半間の小便、その両側に半間×半間の大便が並ぶ構成である。

『家屋調査台帳』には、便所のところに「100年前」との記載がみられる。「木造瓦葺平屋建」や屋敷内での配置は現在の便所と一致するが、平面規模や建物の向きが異なることから、建築年代は不明である。



写真 3-4-60 便所 (044-2) 外観 (北側)

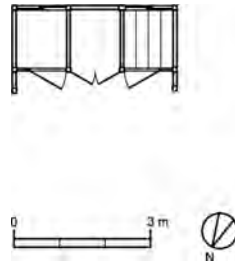


図 3-4-92 便所 (044-2) 平面図

## No.045

### <敷地>

敷地は高時川左岸の集落の北よりの山側に位置する。屋号は「作右衛門 (サクエモン)」である。敷地西側に主屋 (045-1) が建ち、主屋の南東に倉庫 (045-2) が建ち、倉庫の南に水屋 (045-3) が建つ。水屋は敷地の南を限る水路の上に建つ。

### <主屋 (045-1) >

主屋の外観は、入母屋造、茅葺屋根を覆った金属板葺である。金属板屋根は瓦葺の屋根を模し、瓦の形をかたどる。主屋の南面は全面に、東・西面には部分的に金属板葺の下屋がつく。入口は妻入りで南面に設けられている。

建築当初の平面はザシキ、ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りである。南からニワ、次にダイドコが2室、ザシキ、ネマで構成されていた。ザシキの天井は竿縁天井ではなくササラ天井であり、長押も仏壇の前にのみつくが、後補の可能性が高い。

主屋の上屋は梁間2間半・桁行4間半を測り、土座・土間上部に十字梁が架かる。大黒柱、小黒柱ともに八角形を呈し、ネマ側の大黒柱は最大幅274mm、ザシキ側の小黒柱は最大幅260mmを測る。大黒柱、小黒柱、ザシキとネマの境柱、土座とザシキ・ネマの境柱の柱には面取りが施されている。

ネマとダイドコ境の胴差下端には付樋端が付き、2枚の帯戸が建てられている。ザシキとダイドコ境の胴差にも付樋端が付き、3枚の板戸を設ける。ザシキとネマ境の胴差には付樋端の痕跡が残るものの、現在は取り払われ、壁として塗りこめられている。

東側のダイドコには囲炉裏があった。小黒柱と側柱の間には唐白が据えられていた。トバコは十字梁を構成する桁の上のネマ側に現存している。

昭和26年(1951)の家屋調査台帳に建築年代の書き込みはないが、ザシキの天井がササ



図 3-4-93 No.045 配置図

ラ天井のままであることや、大黒柱、小黒柱が八角形であることなどから江戸後期の建物と考えられる。



写真 3-4-61 主屋 (045-1) 外観 (南側)



写真 3-4-62 主屋 (045-1) 八角形の大黒柱



図 3-4-94 主屋 (045-1) 平面図

### <倉庫 (045-2) >

倉庫と、付属する下屋で構成される。倉庫は2階建、切妻造、波トタン板壁、波トタン板葺であり、西面する。

平面は、倉庫部分が梁間1間半・桁行3間、半間毎に角柱を立てる。1階は西面に1間半のシャッター開き出入口を設ける。1階入口側の1間半はコンクリート土間、奥1間半は床を張る。西側壁から奥行半間に棚を設ける。倉庫1階南側と東側に下屋を伴う。東側の下屋は、梁間方向へ約4尺の土間、さらに東側へ同じく約1間の土間に一部床が続く。南側下屋は敷地周辺の水路擁壁までを波トタン板で覆う土間で、柱や建具が設けられている。倉庫2階は板床である。

倉庫の小屋組は、折置組、梁中央上に束を立て棟木を受ける。

倉庫の外部は波トタン板壁である。下屋外部も波トタン板壁で、北西側一部がベニヤ板壁としている。倉庫壁面内部は貫が露出している。下屋壁面内部は波トタン板壁が主であるが、転用と見られる扉やベニヤ板壁も用いられている。

聞き取りによれば、倉庫部分は福井県の敦賀から移築したとされる。倉庫周辺の下屋は所有者家族による自作とのことで、仮設のようであるが、生活の利便に合わせた工夫が凝らされている様子である。



写真 3-4-63 倉庫 (045-2) 外観 (西側)



写真 3-4-64 水屋 (045-3) 外観 (北側)

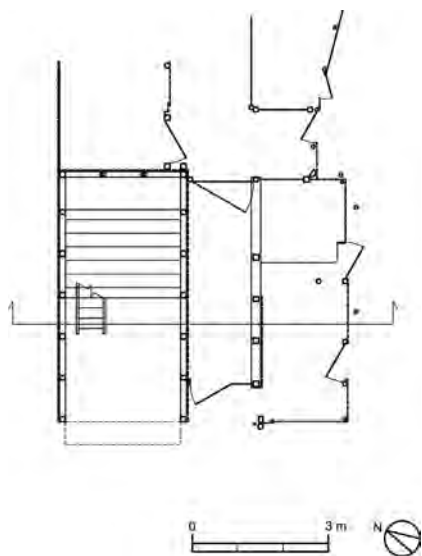


図 3-4-95 倉庫 (045-2) 1階平面図

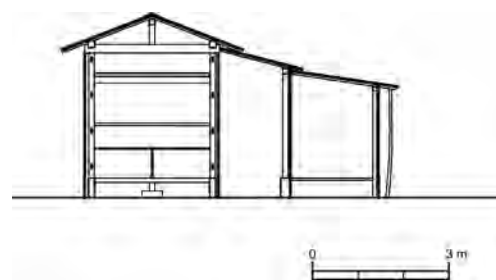


図 3-4-96 倉庫 (045-2) 断面図

## No.046

### <敷地>

敷地は高時川左岸の集落の北よりの山側に位置する。屋号は「五郎左（ゴロウザ）」である。敷地中央に主屋が建ち、主屋の南西に蔵が、南東にプレハブの車庫が建つ。主屋は菅並集落南方の摺墨集落から移築されたものである。



図 3-4-97 No.046 配置図

### <主屋 (046-1) >

主屋の外観は、入母屋造、茅葺屋根を覆った金属板葺である。主屋の東・西・南面には、瓦葺の下屋がつく。入口は妻入りで南面に設けられ、明かり窓も南面ネマ側につく。

建築当初の平面はザシキ、ネマの上げ間、土座、土間からなる広間型三間取りである。ニワの一部と土座に床を張り、南からゲンカン、スイジバ、次にダイドコが2室、ザシキ、ネマに改装されている。ザシキの天井は竿縁天井である。長押は仏壇の前など一部につくものの後補である。囲炉裏がダイドコ（西）にあったが、現在はオチゴタツとなっている。ザシキが高時川側に無いのは、移築してきたためと考えられる。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行5間半で、土座・土間上部に十字梁が架かる。大黒柱は330mm×330mm、小黒柱は265mm×280mmを測る。

トバコは小黒柱と南の出入口近くの側柱に桁を渡して、その上に設けられており、十字梁に支えられたものではない。トバコの出し入れのための戸は、片引きの引戸が付くが、板張りではなく金網が張られている。この家以外ではトバコをザシキ側に設けた例は確認されていないことや、十字梁より下に設けられていることなどから、本来のトバコでは無く、ウマヤの上部に設けられたコズシと呼ばれる収納空間をトバコに改装したものと考えられる。この収納空間の下部はウマヤであったと思われる。

聞き取りにより菅並集落南方の摺墨集落からの移築であることがわかり、昭和26年(1951)の家屋調査台帳の「昭和5年再」の書き込みがそれを裏付ける。



写真 3-4-65 主屋 (046-1) 外観 (南側)



写真 3-4-66 主屋 (046-1) ニワ上部

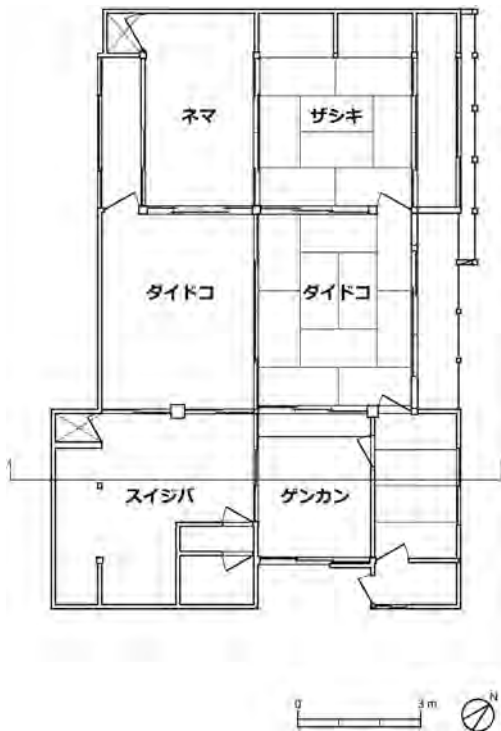


図 3-4-98 主屋 (046-1) 平面図



図 3-4-99 主屋 (046-1) 断面図

### <土蔵 (046-3) >

土蔵造、2階建、切妻造、置屋根、棧瓦葺であり、南面する。

平面は、梁間2間・桁行2間半、半間毎に角柱を立てる。1階は南面に梁間方向1間の下屋を設け半間の出入口を設ける。2階北面に窓を設ける。1階は西側に奥行1間の板間を設け、北西部に梁間開き戸1間・桁行半間の物入がみられる。

小屋組は、天秤梁相当の梁に束を立て地棟を架ける。登梁は地棟上で組まれている。置屋根は置桁上に棟上で相欠組の登梁を設け、屋根桁・垂木・野地板・棧瓦である。

壁体外部は大壁漆喰壁、1階部分まで波型トタンで覆う。1階内部壁面は落とし込みの板壁である。2階内部壁面は入口側一部を板で、他はトタンで覆う。

東で地棟を支えることで、集落内の曲材を用いる類例に比して年代が下る可能性があり、曲材を用いる菅並集落の土蔵の変遷を知る上で重要な事例といえる。



写真 3-4-67 土蔵 (046-3) 外観 (西側)



写真 3-4-68 土蔵 (046-3) 小屋組

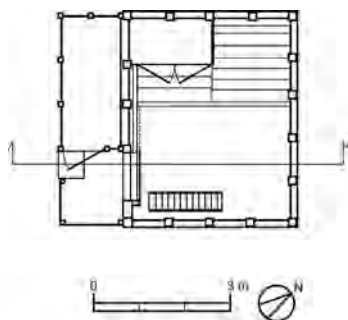


図 3-4-100 土蔵 (046-3) 1階平面図

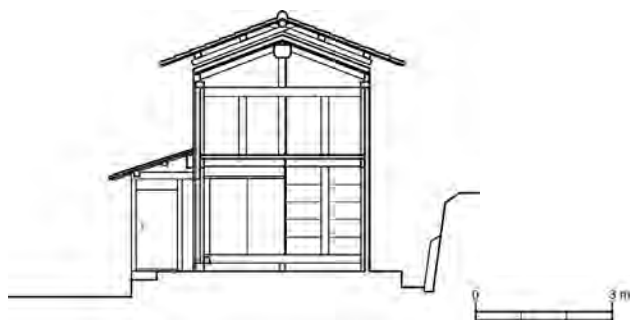


図 3-4-101 土蔵 (046-3) 断面図

## No.056

### <敷地>

敷地は、高時川の支流・妙理川右岸側の集落北に位置し、敷地西側と南側に通りに面する角地である。敷地北側に主屋（056-1）を配置し、その南西側に土蔵や外便所、南東側には隠居屋がある。なお、屋号は「上六兵衛（カミロク）」である。



図 3-4-102 No.056 配置図

### <主屋 (056-1) >

主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り（南入口）である。主屋の3面（北・西・南）に庇がつく。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年（1951）当時、庇は瓦葺と杉皮葺であったが、現在、杉皮葺のみ金属板葺に変わった。

主屋は平屋建で、ツシをもつ。①床の間の柱が他の材に比べてすべて新しい、②ザシキ・ネマは8畳間・6畳間よりも1段高くなっているといったことから、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定される。後に、ザシキ北側の床の間の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室（8畳間、6畳間）に分割・土間に床を張るなどの改変が行われ現在に至る。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年には、すでにザシキ北側の床の間は増築されている。なお、聞き取りによれば、イロリは土座のネマ側、カマドは土間のネマ側にあったという。また、土間のネマ側上部にタバコが設置されており、平側に引戸がつく。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。桁行方向の梁は1本ではなく、十字に交差する部分で分かれて2本で継いでいる。土座・土間境にある大黒柱・小黒柱ともに上屋筋に建っており、ザシキ・ネマ境の上屋柱も省略されずに建っている。また、ザシキ・土座境、ネマ・8畳間境、ザシキ・6畳間境には付樋端がみられる。



『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約百八十年前」との記載がみられるが、部材表面の風食の程度などから、建築年代についてはもう少し年代が下がり、江戸後期と考えられる。



写真 3-4-69 主屋 (056-1) 外観 (南東側)



写真 3-4-70 主屋 (056-1) 大黒柱と十字梁

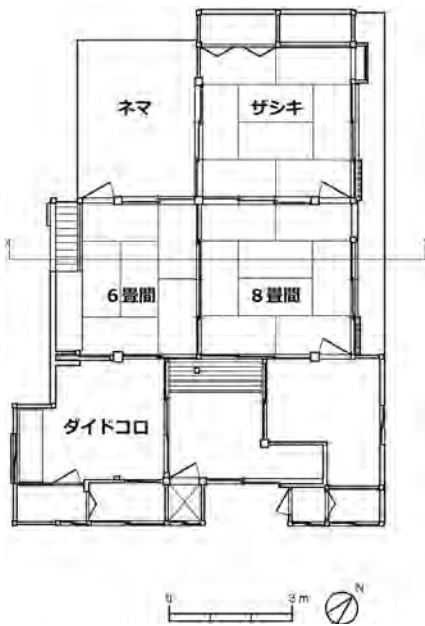


図 3-4-103 主屋 (056-1) 平面図



図 3-4-104 主屋 (056-1) 断面図

## (参考) 旧杉山久男家住宅

### <敷地>

かつての敷地は、高時川の支流・妙理川右岸側の集落北に位置し、敷地西側に通りがある。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)には、主屋の北東側に土蔵(トタン葺2階建)、南西側に便所(杉皮葺)を配置していた。以前の調査時に主屋は建っていた〔余呉町教育委員会1991〕が、現在、当家が集落内の別の場所に移ったため、解体された。なお、屋号は「八郎兵衛」である。



写真3-4-71 旧杉山久男家住宅・主屋 外観  
(南側・現存せず)〔余呉町教育委員会1991〕

### <主屋>

以前の調査時の主屋の外観は、入母屋造・茅葺を覆った金属板葺・妻入り(南入口)である。主屋の3面(北・南・西)に庇がつく。

主屋は平屋建てで、ツシをもつ。以前の調査によれば、建築当初の平面は、ザシキ、ネマの上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定されている〔余呉町教育委員会1991〕。後に、ザシキ北側の増築・土座に1段低く床を張って落ち間とし、2室(ダイドコ、ダイドコ)に分割・土間に床を張るなどの改変が行われた〔余呉町教育委員会1991〕。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年(1951)時点では、ザシキ北側は増築されている。これは、この地域では珍しい「三社床」(床の間(半間・床の間(1間)・仏間(半間の3つに分かる形式のこと)と呼ばれるものであった〔余呉町教育委員会1991〕。なお、以前の調査時の図面から判断すると、土間のネマ側上部にトバコが設置され、平側に引戸がついていた。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間半、小屋組は扱首、余呉型民家に特徴的な十字梁が土座・土間上部に架かる。土座・土間境の大黒柱が上屋筋より半間外側に立っている。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約二百年前」との記載がみられる。また、以前の調査時の聞き取りによると、この主屋は18世紀初めに奥川並で購入した民家を解体し、川に流して運び、移築したと伝えられている〔余呉町教育委員会1991〕。構造形式などから、建築年代については、もう少し年代が下がり、江戸後期と考えられる。



写真3-4-72 旧杉山久男家住宅・主屋 三社床  
〔余呉町教育委員会1991〕

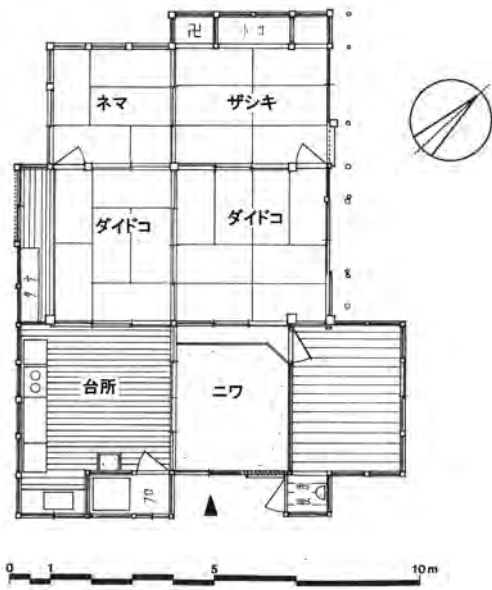


図 3-4-105 旧杉山久男家住宅・主屋  
現状平面図〔余呉町教育委員会 1991 に加筆修正〕

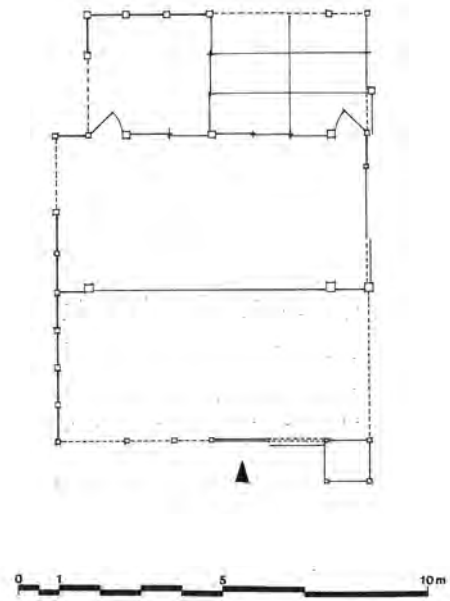


図 3-4-106 旧杉山久男家住宅・主屋 復原平面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕



図 3-4-107 旧杉山久男家住宅・主屋 断面図  
〔余呉町教育委員会 1991〕

## (参考) 旧前田弥左衛門家住宅

### <敷地>

敷地は、高時川の支流・妙理川右岸側の集落北に位置し、敷地北側と西側に通りがある角地であった。『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)当時、主屋の南東側に土蔵(茅葺2階建)、便所(杉皮葺)を配置していた。以前の調査時に主屋や土蔵(金属板葺)は建っていたが、その後、解体された。なお、屋号は「弥左衛門」である。



写真 3-4-73 旧前田弥左衛門家住宅・主屋 外観(南側・現存せず)〔余呉町教育委員会 1991〕

### <主屋>

主屋の外観は、入母屋造・茅葺・平入り(西入口)に、切妻造の落ち棟がつく。入母屋造の南側妻面は軒先を切り上げて兜造のような形態となっている。以前の調査時の写真を見る限りでは南と西に金属板葺の下屋がついているが、『家屋調査台帳』によれば、昭和26年(1951)には、下屋は杉皮葺であった。なお、以前の調査時の内容から判断すると、土座のザシキ側上部にタバコが設置されていた〔余呉町教育委員会 1991〕。

主屋は平屋建てで、ツシをもつ。以前の調査によれば、建築当初の平面は、2室の上げ間・土座・土間による広間型三間取りと推定されている。後に、西側上げ間の北側にザシキを増築・土座に1段低く床を張って落ち間とするなどの改変が行われた〔余呉町教育委員会 1991〕。『家屋調査台帳』の屋敷配置図に描かれている主屋の規模から判断すると、昭和26年時点と以前の調査時とはほぼ同じであるとわかる。なお、イロリは土座のネマ側にあった。

主屋の構造は、上屋は梁間2間半・桁行4間、小屋組は叔首、余呉型民家の十字梁が建物中央で交差するのに対し、ネマ側に寄って交差している。土座・土間境にある大きな柱2本とも、上屋筋より半間外側に立っている〔余呉町教育委員会 1991〕。

『家屋調査台帳』には、主屋のところに「約二百年前」との記載がみられるが、構造形式などから、建築年代については、もう少し年代が下がるものの、江戸後期と思われる。



写真 3-4-74 旧前田弥左衛門家住宅・主屋  
ダイドコ上部〔余呉町教育委員会 1991〕

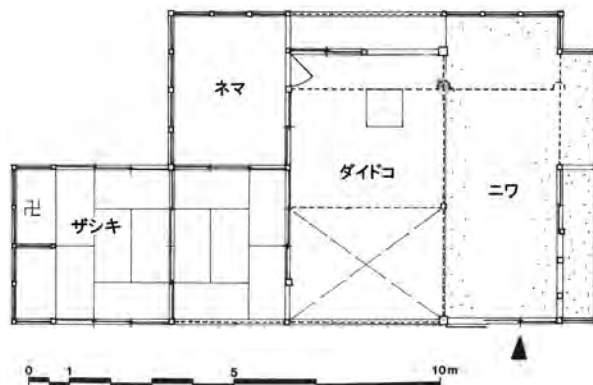


図 3-4-108 旧前田弥左衛門家住宅・主屋  
平面図〔余呉町教育委員会 1991 に加筆修正〕

## 東林寺

千花山東林寺は建保4年（1216）に比叡山の僧泰恒法師が開基したと伝えられている。堂内に安置されている重要文化財「木造観音菩薩立像」（昭和34年12月18日指定）には、背面腰下に建保四年の墨書銘がある。ヒノキ材製の板光背と台座も当初のものと考えられている。現在は洞壽院の末寺となっている。



図3-4-109 東林寺 配置図

### <敷地>

東林寺は、高時川と妙理川の合流地点に立地する六所神社のすぐ西に位置する。六所神社の参道に並行して、東林寺観音堂に向かう参道が設けられている。参道の両側には明治2年（1869）や大正5年（1916）と刻まれた石灯籠が並び立つ。参道と観音堂を結ぶ中軸線上には、平成28年（2016）の銘がある角塔婆が立てられている。

### <観音堂>

観音堂は高さ約60cmの自然石を積んだ基壇の上に南面して建ち、7段の切り石の石段が付く。もとは茅葺であったが、現在は金属板で覆われている。入母屋造、平入りのお堂である。内部は、内陣と外陣からなり、前面のみに縁が付く。前面の柱に縦溝を付け、横板を落とし込み雪囲いとしている。縁の上部は棹縁天井となっている。

観音堂は方五間のお堂で、奥行3間の外陣と、奥行2間の内陣からなる。縁の前面と、お堂の背部にのみ角柱を立てるほかは、すべて丸柱である。堂の側面の丸柱は直径25～28cmを測り、堂の正面の丸柱は直径26～29cmを測る。内陣・外陣境の丸柱はほかの丸柱より太く、直径37～39cmを測る。丸柱の直径にはややばらつきがある。外陣と内陣の外壁と、外陣の内壁では内法長押が丸柱を挟み込んでいる。

西側側面の丸柱は礎石の上に立ち、厚さ14～90mmの礎板を挟み、高さを調整している。礎板は1辺28cm～35cmを測り、4隅を切っている。

堂の側面と前面の丸柱の上には舟肘木が載る。舟肘木の下端の繰り上げ曲線は端部近くで丸味を帯びている。

内陣の奥を3分割し、壇を設け仏像をならべている。西端の一面のみ後に再分割し、神棚が置かれている。中央の仏壇両側の柱には平三斗が載り、内陣・外陣境の丸柱から架け渡される梁が架かる。この梁は内陣・外陣境の丸柱に架けられた外陣の梁の上に直接載っている。

外回りの柱の風蝕は激しく、礎石と柱の間に挟んだ礎盤の規格や、床板を支える束や大引などの規格や仕上げも様々で、堂宮大工が統括して施工した建物とは思えない。建築年代も不明である。ただ、重要文化財「木造観音菩薩立像」が安置されているだけで無く、集落の

オコナイもこの堂内でおこなわれ、住民の信仰とも強く結びついたお堂であり、隣接する六所神社とともに貴重なものである。

なお、大正14年(1925)、昭和5年(1930)、昭和23年(1948)、昭和33年(1958)の葺替えの諸事控帳などが残されており、頻繁に屋根の補修をしていたことがわかる。また、昭和45年(1970)に金属板で覆ったことも判明した。



写真 3-4-75 東林寺・観音堂 外観 (南東側)



写真 3-4-76 東林寺・観音堂 内部

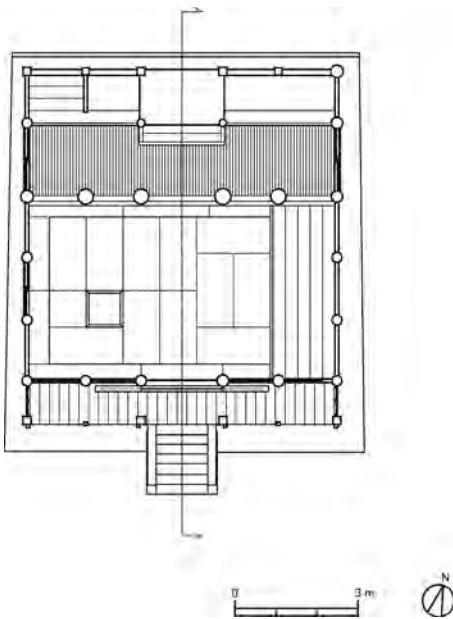


図 3-4-110 東林寺・観音堂 平面図



図 3-4-111 東林寺・観音堂 断面図



図 3-4-112 東林寺・観音堂 立面図 (西側)

## 六所神社

### <敷地>

六所神社は高時川と妙理川の合流点に位置する。合流点の近くに鳥居が立てられ、そこから本殿に続く参道が伸びる。参道の東側に社務所が、西側に手水屋があり、参道の軸線上に拝殿が設けられている。本殿は参道の突当りに位置し、玉垣と中門で囲われ、さらに大雪に備えた鞘堂に覆われている。本殿の背後には、丹生川に住み人畜を害した大蛇を6人の山伏が退治した場所と伝える大岩がある。



図 3-4-113 六所神社 配置図

### <本殿>

本殿は一間社流造、柿葺である。身舎は芯々で間口1間半、奥行1間余を測る。身舎・庇の奥行は2間を測り、間口に対する比率は1.57と、滋賀県下の一間社流造の本殿の平均的な値である1.6～1.8に比べてやや短い〔滋賀県教育委員会1986, p14〕。

身舎組物を出組としており、妻飾りの虹梁も一手外に迫り出し、雲文を彫った板支輪で間を埋める。正面柱間には双折棧唐戸が付く。内部には間仕切りを設け、内外陣に2分する。

妻飾りは虹梁の上に大瓶束を立て、笈形で飾る。向拝虹梁の両端には阿吽形の象鼻が付く。

三方に付く切目縁には高欄が廻らされ、階段には昇り高欄が付き、昇り高欄の親柱にのみ擬宝珠が付く。階段は庇柱内に収まり、階段の下に浜床が付く。

縁の背面側は脇障子で塞ぐ。脇障子の笠木は縁先に立つ柱の外側で大きく上に反る。笠木の上には透かし欄間が載る。縁先に立つ柱との間は、植物文様を施した板壁が入る。

滋賀県の社寺建築の様式は周辺地域と比べて1世紀近い遅れがある〔滋賀県教育委員会1986, p14〕。建築年代は江戸後期以降と考えられる。



写真 3-4-77 六所神社・本殿 外観（東側）



写真 3-4-78 六所神社・本殿 内部

### <鞘堂>

本殿を切妻造、平入り、金属板葺（茅葺）の鞘堂が覆っている。鞘堂は間口3間、奥行4間で、前面と背面に6寸角、側面に7寸角の柱を立て雪に備えている。側面の柱は屋根裏まで延び、棟木や母屋桁を支えている。母屋桁の上にさらに合掌材となる扱首を組み、茅葺屋根としている。豪雪への備えであろう。

鞘堂の背面と両側面の背面寄りには縦板が張られている。現在、前面寄りの側壁はポリカーボネート製の波板が張られ、採光が図られている。前面の中央間には建具は無いが、両脇には蔀戸が建てられている。

両側面の棟持ち柱の足元は、足固めの太い横架材で繋がれる。この横架材は本殿の床下を貫いている。社務所に残る由緒書に、「明治27年、鞘堂再建、大工伊香郡丹生村大字菅並藤田半兵衛ナリ」とあり、明治27年（1894）に再建されたものと判明した。



写真 3-4-79 六所神社・鞘堂 外観（南西側）



写真 3-4-80 六所神社・鞘堂 内部

### <中門>

本殿と鞘堂を囲む玉垣の出入口には中門が建つ。切妻屋根の薬医門である。本柱、控柱はいずれも角柱であり、本柱の柱間は1間半を測る。

社務所、玉垣、中門の新設を願い出た文書が六所神社文書の中に残されている。大正3年（1914）4月1日付の滋賀県知事に対する建設願で、中門はこの頃に建てられたものである。

なお、玉垣や中門の礎石は平成25年（2013）に改修されている。





写真 3-4-81 六所神社・中門 外観（南側）



写真 3-4-82 六所神社・中門 軒裏

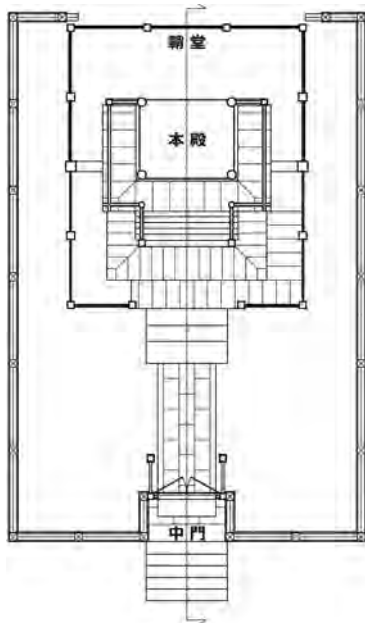


図 3-4-114 六所神社・本殿+鞘堂+中門 平面図



図 3-4-115 六所神社・本殿+鞘堂+中門 断面図



図 3-4-116 六所神社・鞘堂 立面図（西側）

### < 拝殿 >

拝殿は参道の軸線状に建ち、平入り、茅葺をトタンで覆った金属板葺入母屋造である。平面は3間四方で、四周開放形である。複雑化と閉鎖化が進む拝殿の変遷の中で、単純で開放的な拝殿である。六所神社には、明治42年（1909）11月の拝殿設計書が残ることから、この頃に工事が竣工したものと考えられる。



写真 3-4-83 六所神社・拝殿 外観（南西側）

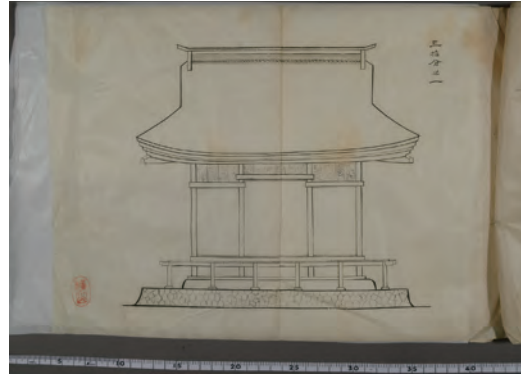


写真 3-4-84 六所神社・拝殿 設計図

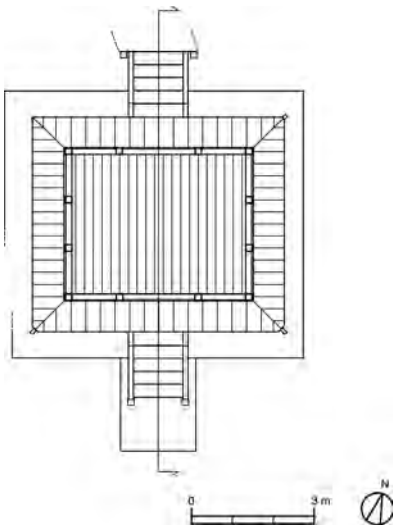


図 3-4-117 六所神社・拝殿 平面図

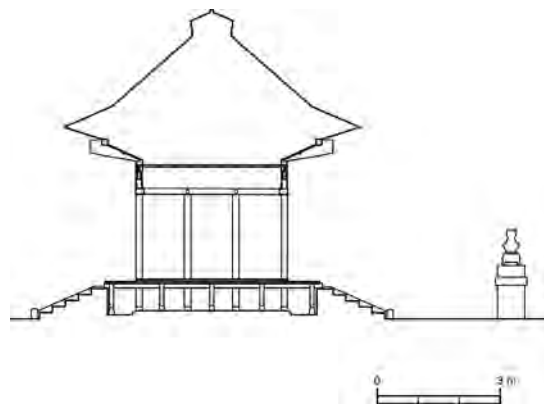


図 3-4-118 六所神社・拝殿 断面図

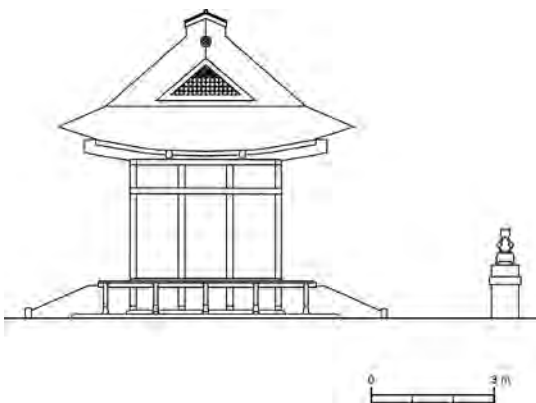


図 3-4-119 六所神社・拝殿 立面図（西側）

＜社務所＞

社務所は平屋建、切妻造、金属板葺、平入りである。当初、土間と6畳の部屋2室からなり、屋根は杉皮葺であった。奥の6畳間には縁が、土間よりの6畳間と土間には平面からの入口が付く。後に幅1間の細長い部屋が東側に増築されている。

社務所の建築年代は、前述の中門と同じく、大正3年（1909）頃である。



写真 3-4-85 六所神社・社務所 外観（南西側）



写真 3-4-86 六所神社・社務所 内部

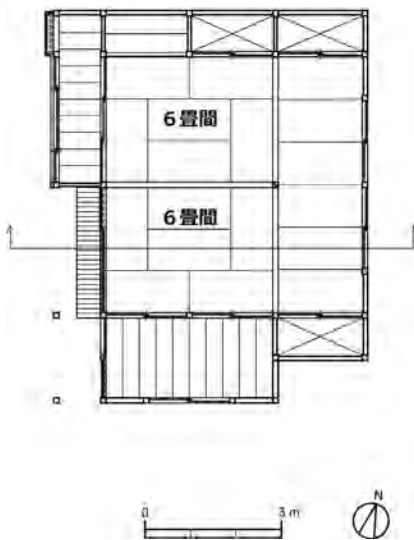


図 3-4-120 六所神社・社務所 平面図

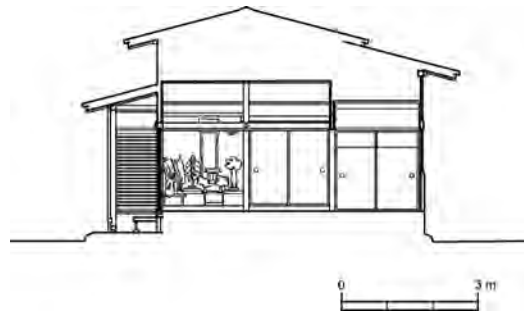


図 3-4-121 六所神社・社務所 断面図

## 洞壽院

### <敷地>

塩谷山洞壽院は、応永13年(1406)に如仲天間禪師が開創した曹洞宗の寺院であり、近江にある曹洞宗の中心的な寺院である。

菅並集落の中央部から北西におよそ1km離れたあたり、高時川の支流・妙理川左岸側に、洞壽院の境内がある。境内は東西に長い形状をしており、境内入口となる東側に山門、そこから西に進むと山側(北側)に土蔵や稲荷神社、

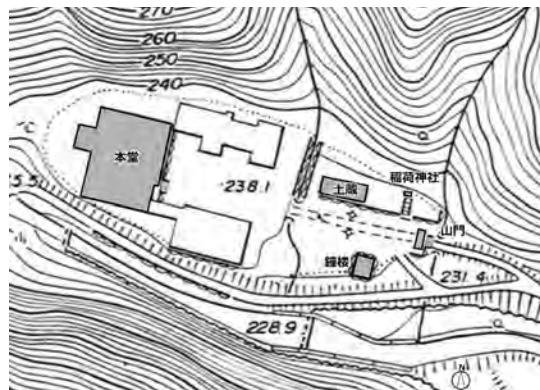


図 3-4-122 洞壽院 配置図

川側(南側)に鐘楼が建ち並ぶ。境内中央を東西に流れる水路を越えて、さらに西に進むと、山側に庫裏、川側に雲堂(衆寮)、そして両建物を繋ぐように本堂が最奥西側に建ち、コの字状の配置となっている。現在の伽藍配置を、明治29年(1896)8月作成の「滋賀縣伊香郡菅並村曹洞宗塩谷山洞壽院之景」(写真3-4-89)と比較すると、鐘楼の位置が異なる以外は変わっていない。

### <本堂>

本堂は、入母屋造・金属板葺・平入り(東入口)であるが、『高時川源流地域学術調査報告書』によればもとは茅葺であり、屋根改修の時期については、昭和43年(1968)ということが寺に伝わる棟札からわかる。なお、「滋賀縣伊香郡菅並村曹洞宗塩谷山洞壽院之景」(写真3-4-88)の本堂部分の描写は板葺であるため、明治29年(1896)当時は板葺であった可能性が高い。

本堂の規模は、梁間9間半・桁行12間に、梁間2間半・桁行4間半の開山堂・位牌堂が西側につく形をとっている。平面形式は、いわゆる「前面土間8室型」で、背面に開山堂・位牌堂がとりつく曹洞宗本堂としては古風な平面形式である。現在、土間の一部にはスロープがついている。中央よりやや南側に位置する内陣は折上格天井、その手前(東側)の大間は2重折上小組格天井、その他の室は格天井、広縁・土間は竿縁天井である。大間は丸柱であるが、それ以外はすべて角柱となっている。また、大間の四方を大虹梁で繋いでいるが、大間と大間の北隣の部屋から前面の側柱に向かっても大虹梁で繋いでいる。なお、小屋組については、今回、確認できていない。

明治28年(1895)6月作成の『古社寺取調書 伊香郡丹生村』によれば、本堂は、寛永・寛文・嘉永と3度も火災を被り、特に嘉永3年(1850)では、山門・鐘楼・鎮守堂以外の建物がすべて焼失したが、文久3年(1863)に本堂が再建されたと記している。ただ、明治期の『社寺明細帳』では、後年の追記で、「大正七年一月卅一日積雪ノ為全潰ノ旨全年二月四日付報告ニ付抹消ス」と記されている。現在の本堂をみると、年代の異なる部材がみられるため、現本堂は、大正7年(1918)に雪により潰れた前本堂の部材を一部使用しながら、大

正7年以降に再建したと考えられる。



写真 3-4-87 洞壽院・本堂 外観（南東側）



写真 3-4-88 洞壽院・本堂 内部

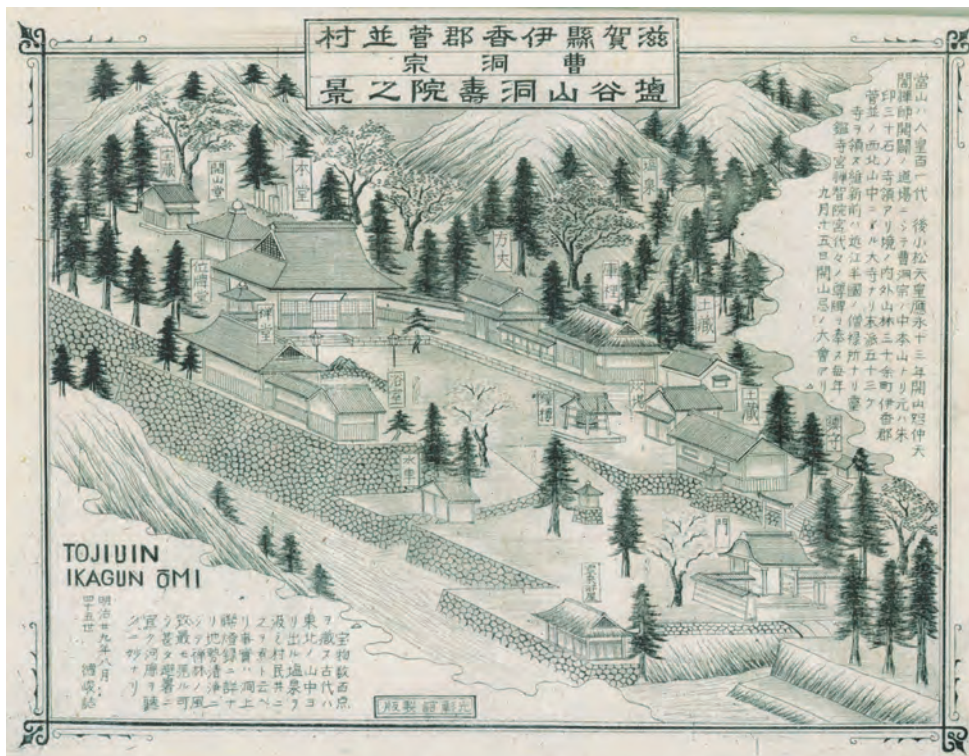


写真 3-4-89 「滋賀縣伊香郡菅並村曹洞宗山谷洞壽院之景」(明治 29 年 8 月)

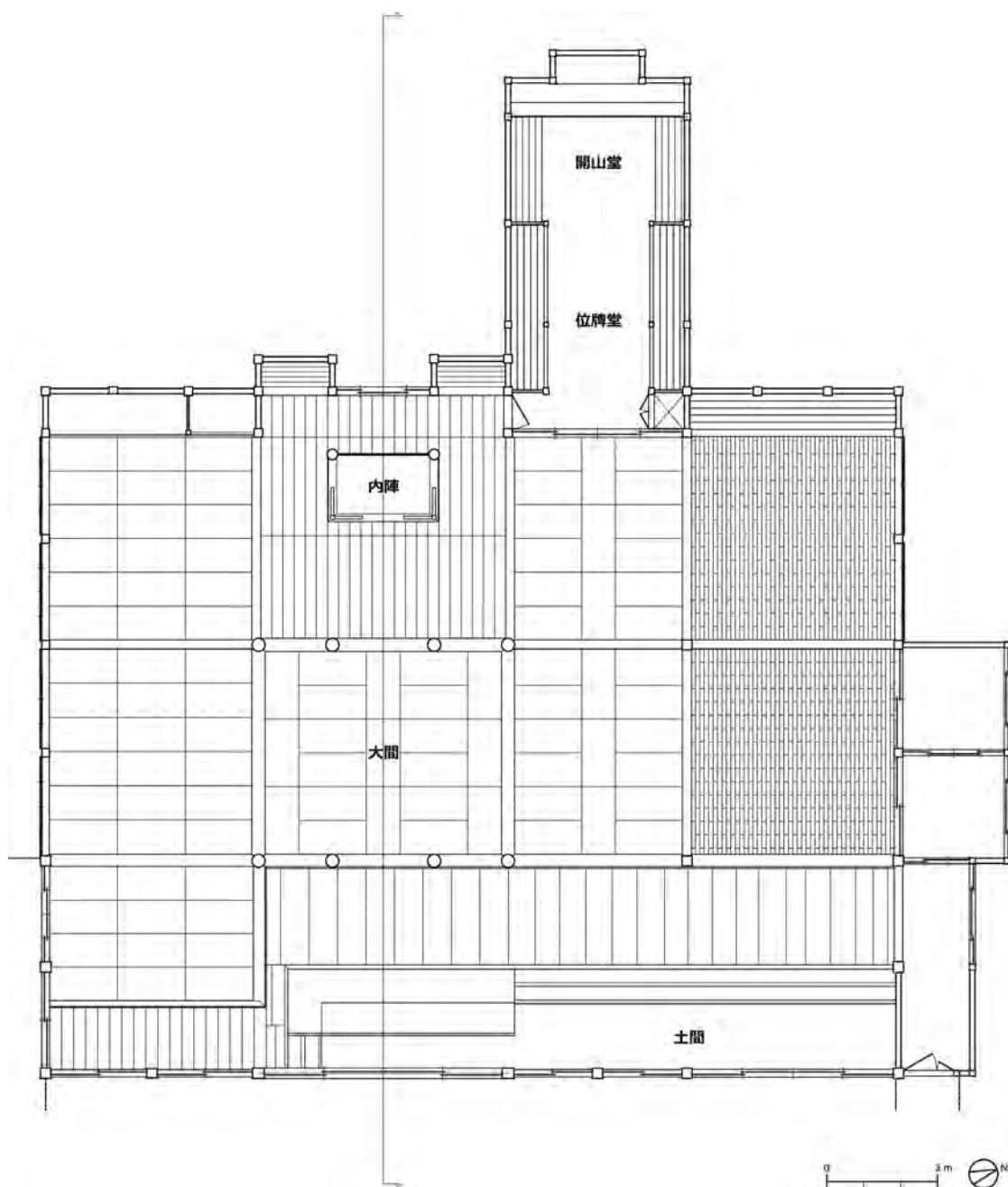


图 3-4-123 洞壽院・本堂 平面図

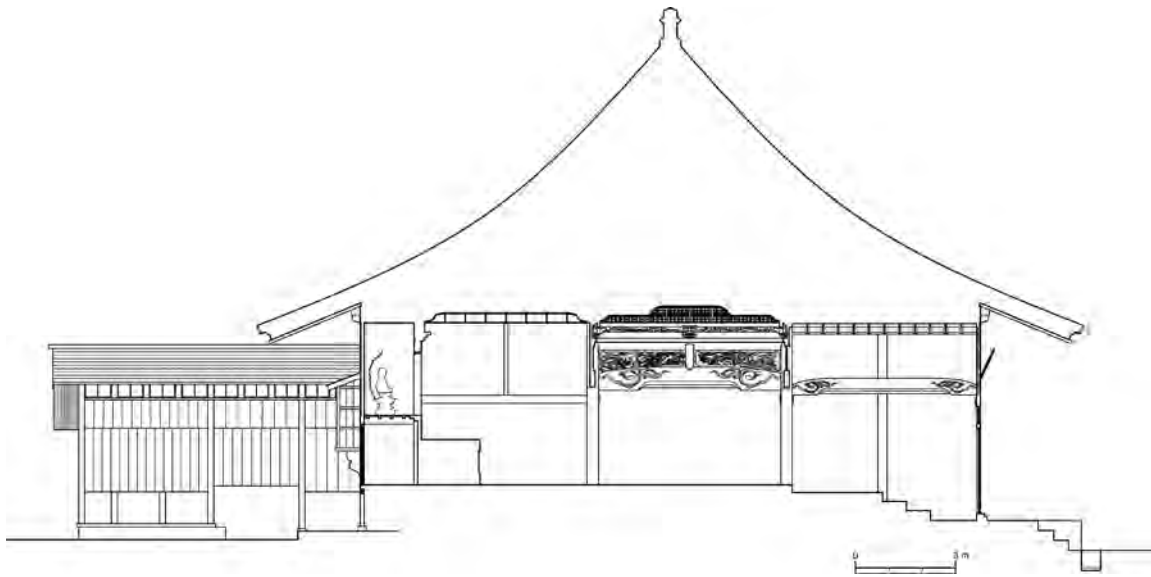


図 3-4-124 洞壽院・本堂 断面図

### <土蔵>

土蔵は、土蔵造、2階建、切妻造、置屋根、棧瓦葺であり、北面する。

平面は、梁間2間半・桁行6間、桁行方向は半間毎に角柱を立てる。桁行方向と梁間方向で柱間真々寸法が異なり、梁間方向は1間6尺2寸として2間半に相当する。1階、2階とも中央に壁が設けられ、東西に区画される。仮に東室、西室とする。1階は東室・西室とも北側に下屋を伴う。約半間の出入口を設ける。1階と2階南面に4か所、2階北面に1か所の窓を設ける。東室1階は南側に間仕切りと板壁を設け、以下の文言が掲げられている。

「口宣

- 一 第一火用心大切之事
- 一 月々三度払清座替之  
管として可扱丁寧之事
- 一 庫替外の不可入  
□時々山主点検有之候事

元治二己丑年

仲春

山主白」

小屋組は、登梁に地棟を架ける。地棟は桁行中央の柱位置で継がれている。地棟の下に、中央の柱上と東西それぞれ1間ごと計3か所に天秤梁相当の曲材を用いる登梁が架かる。登梁は地棟上で組む。置屋根は置桁上に棟上で相欠組の登梁を設ける。置屋根登梁の参道側に削形がみられる。

壁体外部は大壁で一部漆喰塗壁、北側は土壁である。1階部分まで下見板を張る。内部壁面は露出する貫に下げ苧に相当する植物性の繊維を巻き付けている。破損部分の観察や聞き

取り等の指摘から、壁下地を固定しているツタを用いるとされる。

集落の土蔵と構法（第3章第3節第2項参照）のうえで類似する。集落における寺院の土蔵の在り方の実態につながる事例として、また非常に地域性の高い独特な構法を用いる事例として、評価されるべきであろう。聞き取りによる西側を北、東側を南とする特有の呼称なども集落との密接な関わりを推測させる。



写真 3-4-90 洞壽院・土蔵 外観（南西側）



写真 3-4-91 洞壽院・土蔵 小屋組



写真 3-4-92 貫にかかる下げ苧相当の繊維材

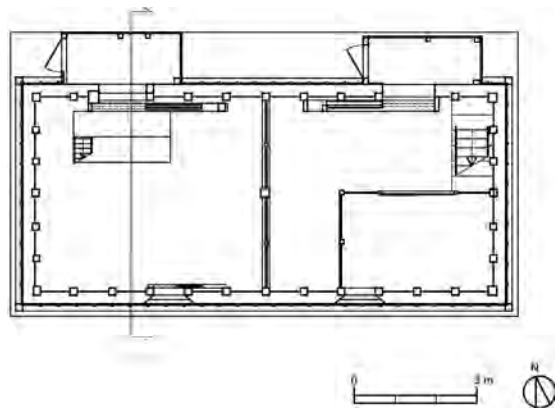


図 3-4-125 洞壽院・土蔵 1階平面図

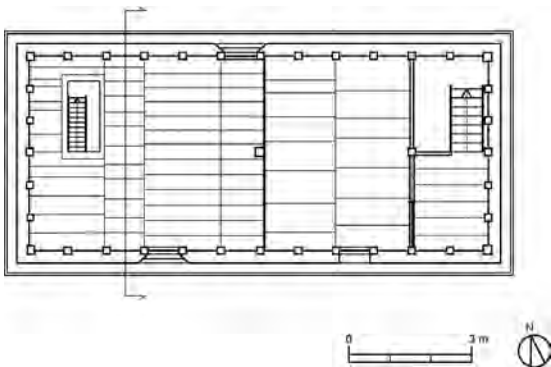


図 3-4-126 洞壽院・土蔵 2階平面図

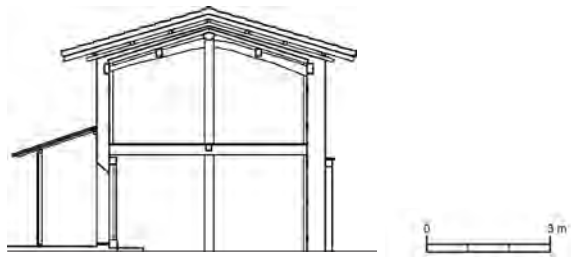


図 3-4-127 洞壽院・土蔵 断面図



### <鐘楼>

鐘楼は、石積みで築かれた基壇の上に建ち、屋根は切妻造・棧瓦葺である。

鐘楼の規模は、方一間、角柱四方転びの形式であり、各柱は飛貫と腰貫の上下2本の貫、柱頂部は梁・桁で繋ぎ、組物は用いない。小屋組は、梁の上に地棟をかけ、束建てをする簡素な構造となっている。

明治28年（1895）6月作成の『古社寺取調書 伊香郡丹生村』によれば、鐘楼（文書では「鐘樓堂」）は、明治20年（1887）に再建されたと記しているが、現在の鐘楼と比べるとやや規模が大きい。また、明治期の『社寺明細帳』では、後年の追記で、「六年三月十一日雪ノ為壓潰届」と記されているが、ここで書かれている「六年」とは大正6年（1917）のことと考えられる。明治20年に再建された鐘楼は大正6年に雪によって押し潰され、大正6年以降に現在の鐘楼が建築されたものと考えられる。



写真 3-4-93 洞壽院・鐘楼 外観（東側）

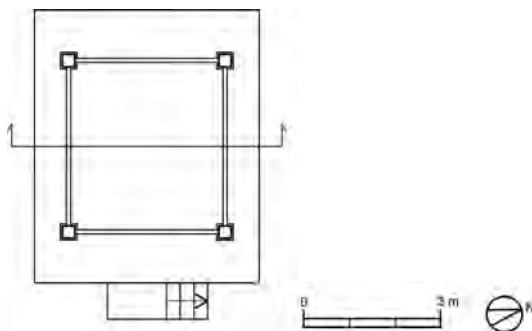


図 3-4-128 洞壽院・鐘楼 平面図



図 3-4-129 洞壽院・鐘楼 断面図

### <稲荷神社>

稲荷神社は、三間社・流造・金属板葺である。平成25年（2013）に屋根の葺き替えを行っている。平面規模は梁間3間・桁行1間であり、内部が3つに分かれている。

寺に伝わる棟札や棟札の写し（写真2-2-4）を見ると、鎮守白山権現（永禄9年（1566）再建→元和6年（1620）再建→延宝6年（1678）再建）、稲荷明神（享保17年（1732）再建）、天照大神（享保13年（1728）建立）という3つの社が洞壽院にはあり、寛政4年（1792）に1つの社にし、その後、慶応2年（1866）に再建したことがわかる。なお、明治28年（1895）

6月作成の『古社寺取調書 伊香郡丹生村』には、享保13年（1728）建立の鎮守堂が記されているが、以前にあった天照大神の社と取り違えた可能性が高い。現在の稲荷神社の部材を観察すると、年代の古いものは一部であるため、部材を新材に入れ替えながら現在に至っていると考えられる。大正期の大雪によって本堂や鐘楼、山門が潰れていることや、時期差のある部材で構成されていることから考えれば、小規模な稲荷神社も大正6、7年の大雪により被害を受け、それ以降に再建されたと考えられる。



写真 3-4-94 洞壽院・稲荷神社 外観（南側）

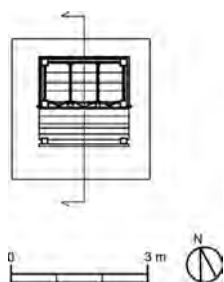


図 3-4-130 洞壽院・稲荷神社 平面図



図 3-4-131 洞壽院・稲荷神社 断面図

### <山門>

山門は、親柱が円柱、控柱が角柱の四脚門であり、屋根は切妻造・銅板葺、門の左右には袖塀築地塀がつく。

明治28年（1895）6月作成の『古社寺取調書 伊香郡丹生村』によれば、山門は元禄9年（1696）に建立されたと記しているが、現在の山門と比べるとやや規模が大きい。明治期の『社寺明細帳』では、後年の追記で、「大正七年一月卅一日積雪ノ為全潰ノ旨全年二月四日付報告ニ付抹消ス」と記されている。ただ、梁の絵様などは江戸期のものと考えられるため、山門は大正7年（1918）に雪で全潰したものの、使用できる部材を多く用いて再建したものと考えられる。



写真 3-4-95 洞壽院・山門 外観（東側）

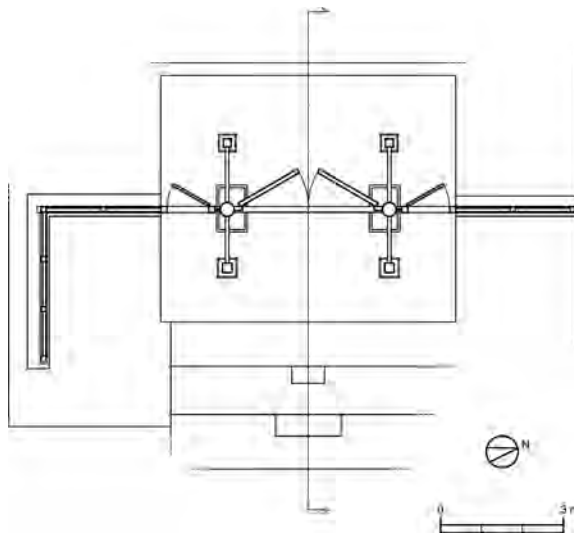


図 3-4-132 洞壽院・山門 平面図

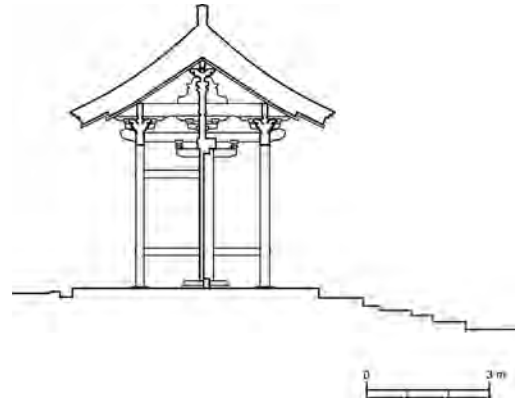


図 3-4-133 洞壽院・山門 断面図

なお、詳細な調査は行っていないが、山門と本堂を繋ぐ参道の中央には、「滋賀縣伊香郡菅並村曹洞宗塩谷山洞壽院之景」(写真 3-4-89)にも描かれている宝篋印塔が2基ある。『社寺明細帳』によれば、宝篋印塔(文書では「寶鏡塔」)は文化9年(1812)の築造とあり、洞壽院境内の景観を構成する重要な要素であると考えられるため、ここに記した。



写真 3-4-96 洞壽院・宝篋印塔(土蔵側)



写真 3-4-97 洞壽院・宝篋印塔(鐘樓側)

## 第2項 菅並集落の建造物の特徴

今回の調査では、主屋18棟、隠居屋6棟、土蔵8棟、付属屋3棟、社寺建築11棟の実測調査を実施した（図3-4-1、表3-3-1）。さらに、過去の調査で報告されている主屋4棟を加えて、菅並集落の建造物の特徴について考察した。

### 1. 菅並集落の主屋の特徴

今回、調査を実施した主屋と、過去の調査報告書に掲載されている主屋をもとに、菅並集落内にある主屋の編年表（図3-4-135、図3-4-136）を作成した。それぞれの主屋の建築年代については、調査家屋ごとの観察や『家屋建物調査台帳』の屋敷配置図に残されている建築年代を参考に並べることとした。

なお、実測調査を行った18棟の主屋のうち、5棟は移築、2棟は移築の可能性のある主屋であった。移築された建物が、移築にともない改装される可能性もあることから、移築された年代を建築年代として分類した。

#### <菅並集落の余呉型民家の変遷>

これを見ると、菅並集落の場合、いわゆる余呉型民家の特徴を持つ主屋の建築年代は明治期までということが出来る。この時期の標準的な主屋は、茅葺（扱首組）・入母屋造・妻入り・南入口・広間型三間取り・上屋梁の幅2間半・縁側なし・屋根勾配は約50度ということが出来る。その他の特徴としては、土間と土座の上に十字梁が架かっていることが挙げられ、寝間・座敷境の上屋柱や半間壁は古式と思われる（図3-4-136）。なお、寝間・座敷境の上屋柱は江戸時代末期以降、大黒柱は寝間・座敷境の上屋柱よりも少し後になって上屋筋より半間外側に立ることが本格化すると考えられる（図3-4-135、図3-4-137）。また、上屋梁の幅が3間になると、主屋は奥行方向に大きくなる傾向が見受けられた（図3-4-134）。

一方、江戸期・明治期の余呉型民家の主屋と大正期初頭以降の主屋を比較すると、下記の2点が挙げられる（図3-4-138）。

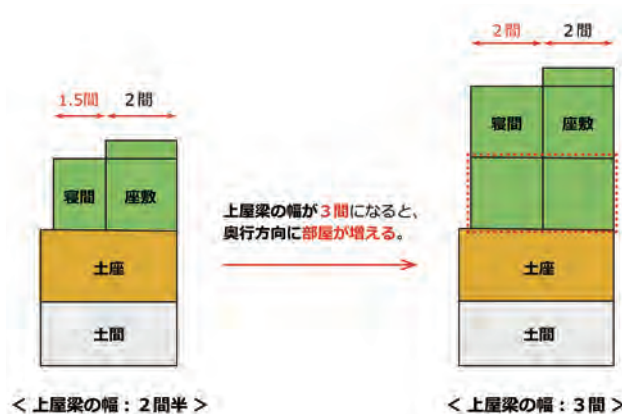


図3-4-134 上屋梁の幅と間取りの関係

- ① 大正期頃には余呉型民家の間取りは踏襲しつつも、当初から2階建を想定して造ることが増え、余呉型の特徴の1つである「十字梁」の必要が無くなった。屋根も茅葺から瓦

葺へと変わり、主屋の外観が大正期あたりから大きく変わり始める。

- ② 主屋の間取りは大正期以降も余呉型民家と類似し、床上部分の段差も継承されており、主屋の内部空間については変化が小さい。

以上のようなことから、標準的な江戸期・明治期の主屋（余呉型民家）には、茅葺（扱首組）・入母屋造・妻入り・南入口・広間型三間取り・上屋梁の幅2間半・縁側なし・屋根勾配は約50度といった特徴が見て取れる。大正期の主屋になると、瓦葺（和小屋）・十字梁構造の消失といった変化がみてとれるが、間取りについては、依然、江戸期・明治期と類似したものが多かったと推測される。

#### <菅並集落の余呉型民家の変容>

前述のように余呉型民家の変遷していく一方で、生活様式や産業の変化により、伝統的な余呉型民家の変容も進んでいる。

最も大きく変容したのは土座である。戦前から戦後にかけて、土座や土間に床を張り、十字梁の交差部直下に柱を立て、建具を入れ、土間、土座を細分化し、竿縁天井を張り、居室とした。今回、調査した主屋はすべて土座が細分化され、その平面形は整形四間取り型に近い。土座に張る床の高さは例外なく低く、上げ間の床との間には、20～30cm近い段差がある。この地で長きにわたり重用されてきた広間型三間取りの空間構成をそのまま踏襲している。天井を張ったことにより、十字梁やトバコは下から見上げても一部しか見えない状況となっているが、十字梁はよく残っている。トバコもほとんどの家に残るが継続して使用している家は無い。牛耕が廃れて以降、ウマヤも姿を消したが、痕跡が残る家もある。

以上のように、菅並集落では、少なくとも戦前までの主屋については、余呉型民家あるいは余呉型民家を継承した主屋と推定され、内装には手が入れているものの、広間型三間取り型の民家の特徴を残している。このように余呉型民家の変遷や変容を流れとして知ることができる主屋がまとまって現存している集落は他になく、伝統的建造物群としての価値を有しているといえる。そのため、戦前までの主屋については保存すべき対象と考えることができる。

## 2. 菅並集落の隠居屋の特徴

調査家屋数が少ないものの、菅並集落の隠居屋は、二間取りが標準であったと考えられる。隠居の生活様式には地域差があり、隠居屋の無い集落もある。菅並集落の隠居屋には炊事場、トイレ、風呂はなく、食事、入浴などは主屋で行い、隠居屋は就寝や普段の生活の場であったと考えられる。

茅葺の隠居屋は、主屋と同じく十字梁を用いた構造をとっていた。ただし、現在は「合掌崩し」をし、茅葺から瓦葺へ屋根替えをした隠居屋が多い状況である（図3-4-137）。

### 3. 菅並集落の社寺建築の特徴

集落北側にある六所神社、東林寺、洞壽院の主要建造物について調査を行った。六所神社の本殿は、雪国らしく鞘堂に覆われている。鞘堂と拝殿の屋根は茅葺である。東林寺も茅葺の屋根がのる。洞寿院には広い境内に、大規模な本堂、山門、鐘楼、土蔵が残っている。いずれも極端に古くはないものの、オコナイをはじめとした様々な行事を通して、心の紐帯として村人同士を結びつけている。






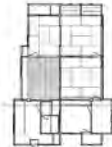








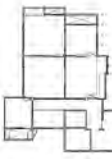
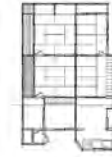





江戸後期	江戸末期	明治期	大正期
 002-1	 003-1 (移築)	 036-1 (M5 移築)	 026-1 (T2)
 019-1	 015-1	 042-1 (M18)	 004-1 (T5)
 029-1	 027-1 (移築)	 017-1 (M20)	
 032-1 (移築か)	 028-1 (移築?)	 024-3 (M21)	
 045-1	 044-3	 020-1 (M22 移築)	
 056-1		 010-2 (M前期)	
 消滅① 旧杉山久男家住宅 (移築)	 消滅② 旧前田弥左衛門家住宅		

図 3-4-135 主屋平面の編年表














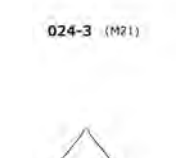
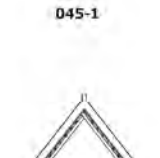





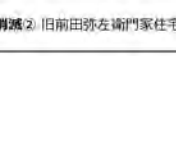
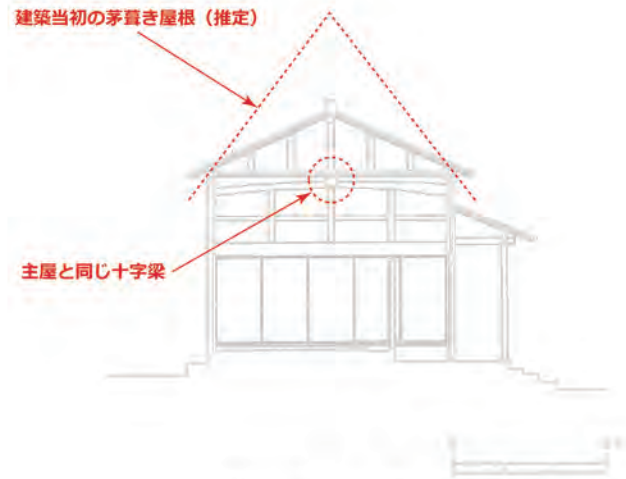
江戸後期	江戸末期	明治期	大正期
 002-1	 003-1 (移築) ※ 屋根葺き前	 036-1 (M5 移築)	 026-1 (T2)
 019-1	 015-1	 042-1 (M18)	 004-1 (T5)
 029-1	 027-1 (移築) ※ 屋根葺き後	 017-1 (M20)	
 032-1 (移築?)	 028-1 (移築?)	 024-3 (M21)	
 045-1	 044-3	 020-1 (M22 移築)	
 056-1		 010-2 (M前期)	
 消滅① 旧杉山久男家住宅 (移築)	 消滅② 旧前田弥左衛門家住宅		

図 3-4-136 主屋断面の編年表

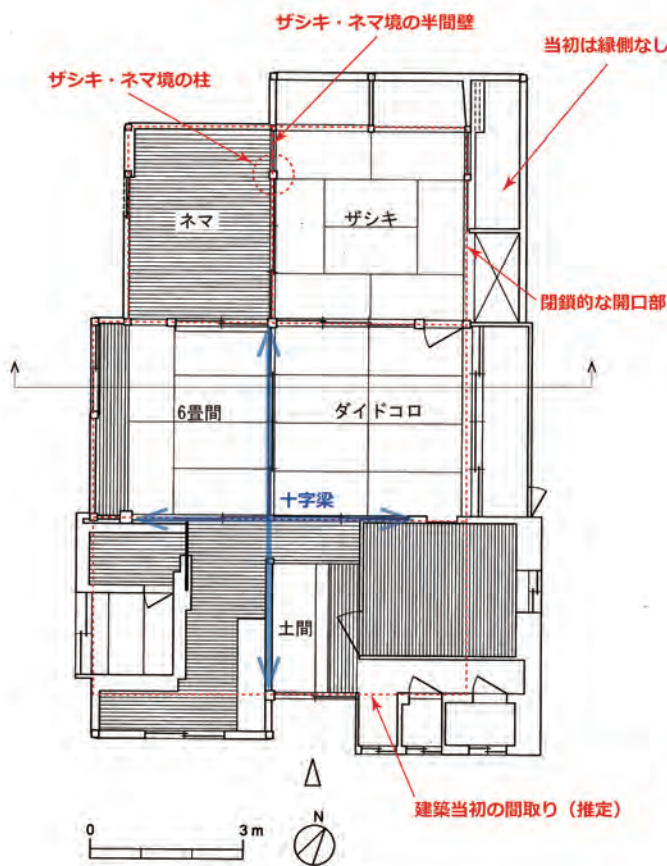




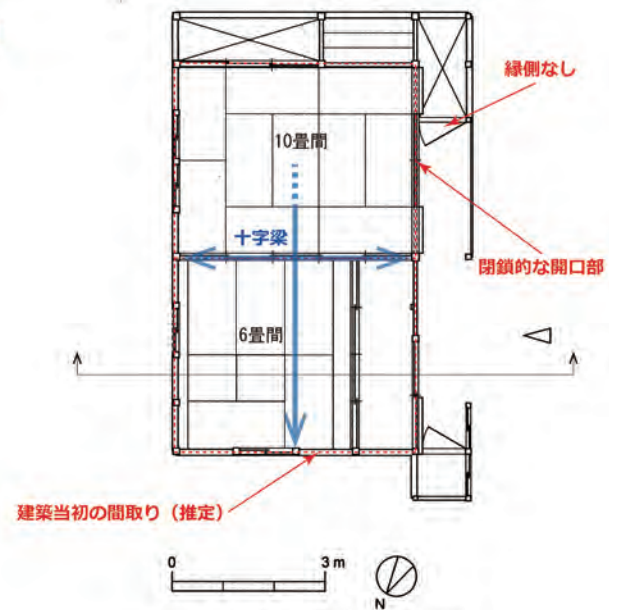
(002-1) 主屋 断面図



(044-5) 隠居屋 断面図



(002-1) 主屋 平面図



(044-5) 隠居屋 平面図

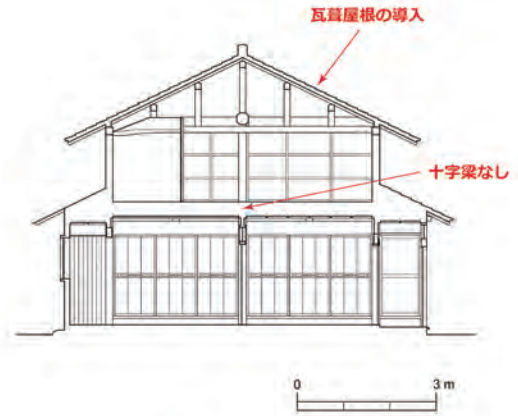
図 3-4-137 菅並集落の主屋と隠居屋

< 江戸期 >

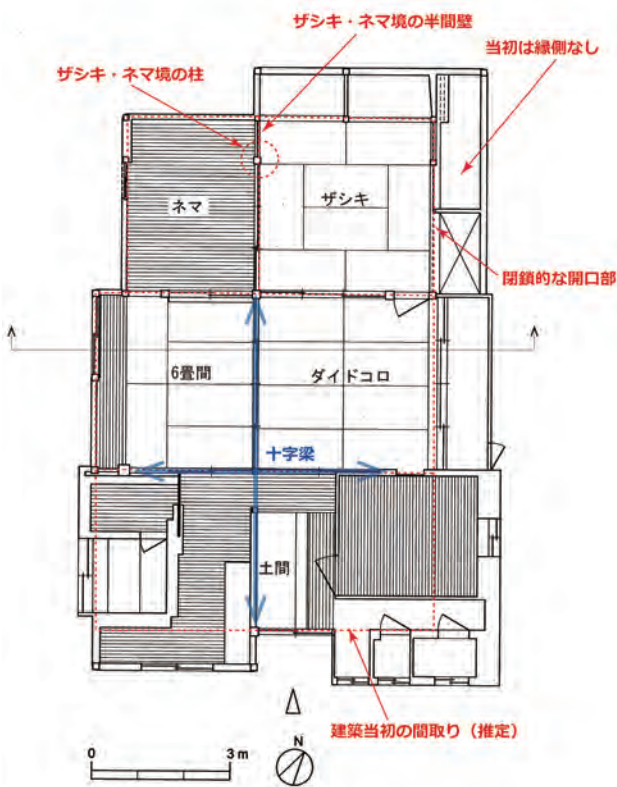


(002-1) 主屋 断面図

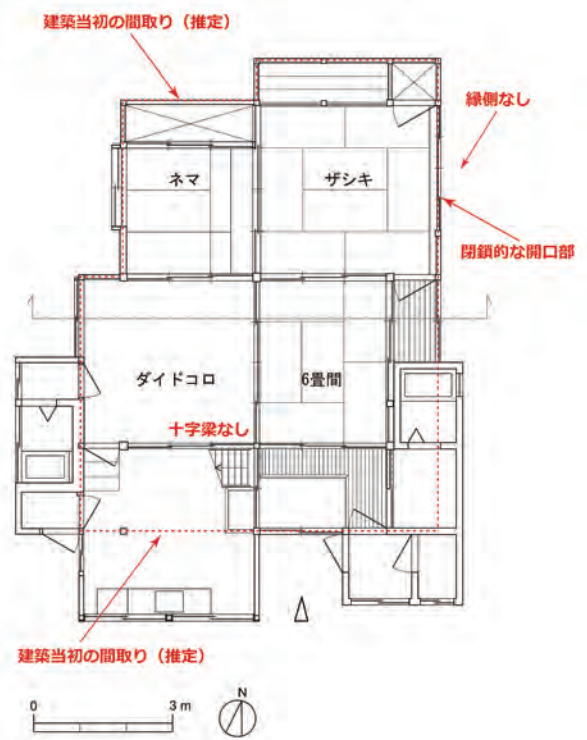
< 大正期 >



(026-1) 主屋 断面図



(002-1) 主屋 平面図



(026-1) 主屋 平面図

図 3-4-138 菅並集落の民家構造の変化

## 第5節 集落景観の展開

『滋賀県市町村沿革史』によると、明治11年（1878）の菅並集落の戸数は79戸（人口：290人）であったが、令和4年（2022）1月現在の菅並集落の戸数は34戸（人口：47人）であり、およそ140年の間に、戸数は約43%、人口は約16%に減少している。

以前の菅並集落がどのような姿であったかを知ることができる資料として、菅並自治会所蔵の『大字菅並家屋台帳』（写真3-5-1）と『家屋調査台帳』（写真3-5-2）を挙げるができる。『大字菅並家屋台帳』の中には「昭和廿六年八月再調査二つき旧書類となる」との記述があり、『家屋調査台帳』の表紙には「昭和二十六年八月」と記載されている。なお、第3章第4節第1項の土蔵+隠居屋(003-2)の解説で取り上げた『土蔵上屋新設工事木割帳』（昭和4年（1929）10月作成、横山三太夫家文書）は、もともとあった土蔵部分に、隠居屋部分を増築したことがわかる史料であるが、『大字菅並家屋台帳』で該当建物を見ると、土蔵部分しか描かれていないことがわかる。以上のことから、『大字菅並家屋台帳』については昭和4年（1929）以前、『家屋調査台帳』は昭和26年（1951）に作成されたものと考えられる。両家屋台帳とも、家屋・敷地の地番・所有者名、建物種別（用途）、構造、屋根葺材、建坪数などの情報が屋敷ごとに表でまとめられており、あわせて屋敷配置図が描かれている。また、『家屋調査台帳』の屋敷配置図には、建築年代（ただし、所有者への聞き取りをもとにしたものか）が記載されている（写真3-5-3）。

この2つの家屋台帳と令和2年（2020）に行った菅並集落内の建物調査の結果をもとに、集落景観に大きな影響を及ぼすと考えられる建物の屋根材の変化を分析することで、集落景観の変化をとらえることにした。建物の屋根材の変化については、建物の種別ごとに分析を行うことにした。なお、建物種別については、『家屋調査台帳』の分類を参考にし、「主屋」「土蔵」（『大字菅並家屋台帳』では「倉庫」と表現）「納屋」「便所」の4つに分類した。そのため、「主屋」の中には、「隠居屋」も含まれているものと考えられる。

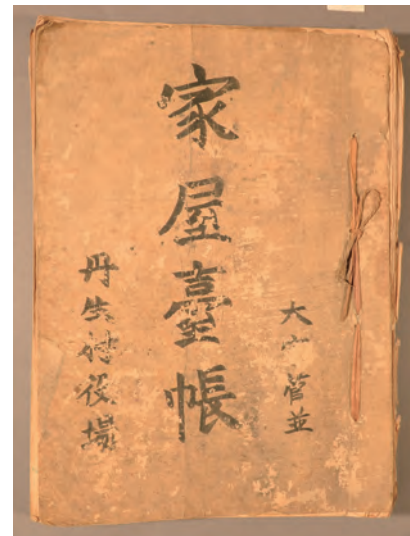


写真3-5-1 『大字菅並家屋台帳』

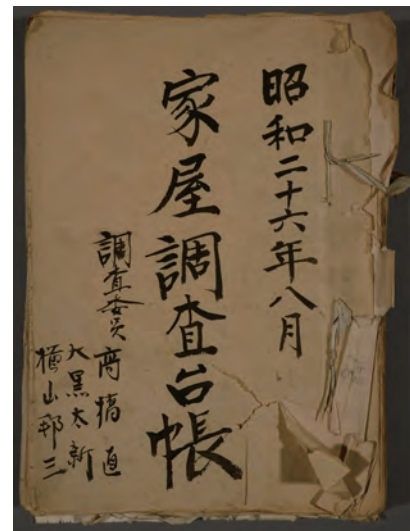


写真3-5-2 『家屋調査台帳』

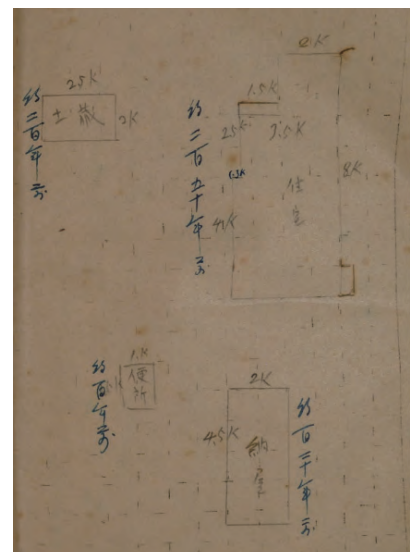


写真3-5-3 『家屋調査台帳』に描かれている屋敷配置図

建物種別ごとに分析した結果から、下記のようなことが明らかとなった。

主屋（表 3-5-1）：全体の棟数は減少しているものの、茅葺が主流であることにはかわりはない（令和 2 年（2020）のデータにある金属板葺は、茅葺を覆っている状態のものであり、家並みは茅葺のままといえる）。

土蔵（表 3-5-2）：昭和 4 年（1929）以前は板葺が中心であったが、昭和 26 年（1951）には瓦葺が主流になったことがわかる。現在も、瓦葺が主流である。

納屋（表 3-5-3）：以前はさまざまな葺材がみられたが、現在は金属板葺が主流である。

便所（表 3-5-4）：以前は杉皮葺が多かった。ただし、時代の変化とともに、主屋内に便所が設けられるようになり、外便所は多くが姿を消した。

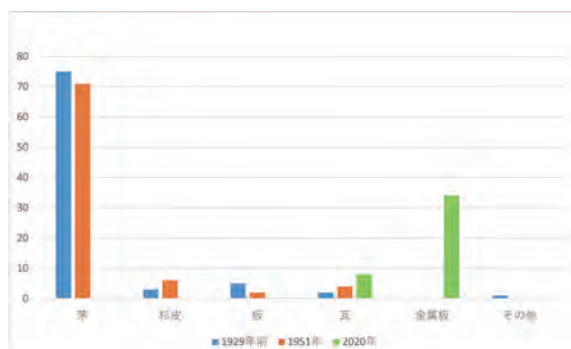


表 3-5-1 屋根葺材の変化（主屋）

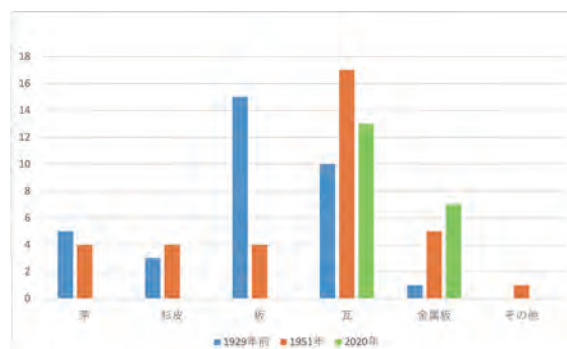


表 3-5-2 屋根葺材の変化（土蔵）

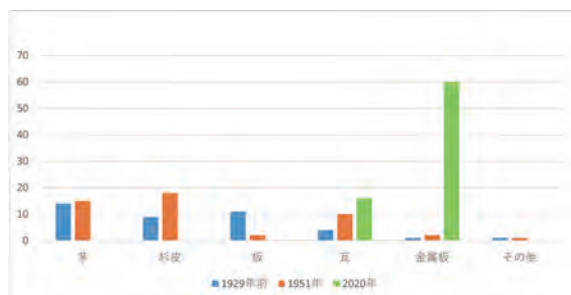


表 3-5-3 屋根葺材の変化（納屋）

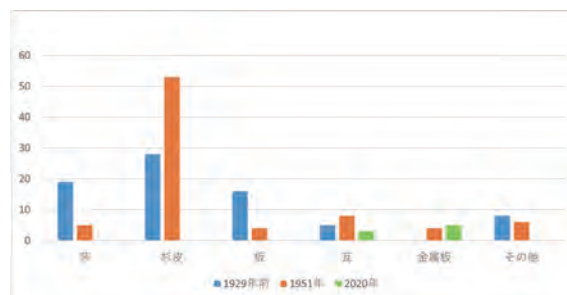


表 3-5-4 屋根葺材の変化（便所）

このことより、屋根葺材の変化はあるものの、菅並集落における主屋や納屋の屋根景観は大きな変化はなかったととらえることができるであろう。一方、土蔵・便所は変化が大きかったと思われるが、土蔵については、戦後、屋根葺材の変化により屋根勾配が変わったため、集落景観の変化に大きな影響を及ぼしたと推測される。

また、昭和 26 年（1951）の『家屋調査台帳』をもとに、当時の菅並集落の各屋敷における建物配置を調査した。方法としては、屋敷ごとに調査された屋敷配置図（写真 3-5-3）を対象に、主屋から見た土蔵・納屋・便所の方角をデータベース化し、建物種別ごとに配置の傾向があるかを見ていくこととした。なお、第 3 章第 2 節で、高時川の右岸側・左岸側で主

屋（余呉型民家）の間取りに傾向があることが明らかとなっているので、土蔵・納屋・便所の配置においても、高時川の右岸側・左岸側でも集計を行った。

建物種別ごとに分析した結果から、下記のようなことが明らかとなった。

土蔵（表3-5-5）：右岸側の集落では、主屋からみて「西」「南西」「南」「南東」、一方、左岸側の集落では、「南西」「南」「南東」に配置されるのが大半であった。

納屋（表3-5-6）：右岸側の集落では、主屋からみて「西」「南西」「南」、一方、左岸側の集落では、「南西」「南」「南東」に配置されるのが大半であった。

便所（表3-5-7）：右岸側の集落では、主屋からみて「南西」「南」、一方、左岸側の集落では、「南西」「南」「南東」に配置されるのが大半であった。

種別	主屋からみた位置	軒数		
		高時川右岸側	高時川左岸側	集落全体
土蔵	北	1	0	1
	北東	0	0	0
	東	2	0	2
	南東	0	4	4
	南	5	3	8
	南西	5	3	8
	西	8	0	8
	北西	2	0	2

表3-5-5 屋敷内立地の傾向（土蔵）

種別	主屋からみた位置	軒数		
		高時川右岸側	高時川左岸側	集落全体
納屋	北	1	0	1
	北東	0	0	0
	東	1	0	1
	南東	6	2	8
	南	11	5	16
	南西	10	2	12
	西	7	1	8
	北西	1	0	1

表3-5-6 屋敷内立地の傾向（納屋）

種別	主屋からみた位置	軒数		
		高時川右岸側	高時川左岸側	集落全体
便所	北	0	0	0
	北東	0	0	0
	東	2	0	2
	南東	8	4	12
	南	18	3	21
	南西	19	7	26
	西	4	1	5
	北西	0	0	0

表3-5-7 屋敷内立地の傾向（便所）

このことより、一般的に、菅並集落では、主屋の下手側（「南西」「南」「南東」）に土蔵・納屋・便所などの付属屋を配置する傾向があるといえる。高時川の右岸側・左岸側でみると、どちらも主屋からみて高時川側（右岸の場合は東、左岸の場合は西）には付属屋を建てない

ようにしていると推測された。このことをもとに、菅並集落の屋敷配置を図化すると、図3-5-1のようになる。やはり、屋敷における建物配置についても、高時川を軸として対称であることが推測される。

なお、『家屋調査台帳』の屋敷配置図については、建物間の距離についての正確さは分からないものの、現在の菅並集落の地図に、『家屋調査台帳』の屋敷配置図を組み合わせると昭和26年（1951）当時の菅並集落を復原したのが、図3-5-2となる。これを、現在の菅並集落（図3-1-1）と比較すると、以下の2点を指摘することができる。

- ① 高時川右岸の集落南側あたりでは、特に主屋の減少が進んでいるものの、集落全体で見るときには、建物配置（特に主屋）はおおむね維持されているといえる。
- ② 納屋・便所といった付属屋については、建物配置に変化がみられる（特に外便所の消失）。

これまで見てきたように、時代の流れとともに、菅並集落の景観に多少の変化はあったものの、伝統的な景観がよく保持されてきたといえることができる。

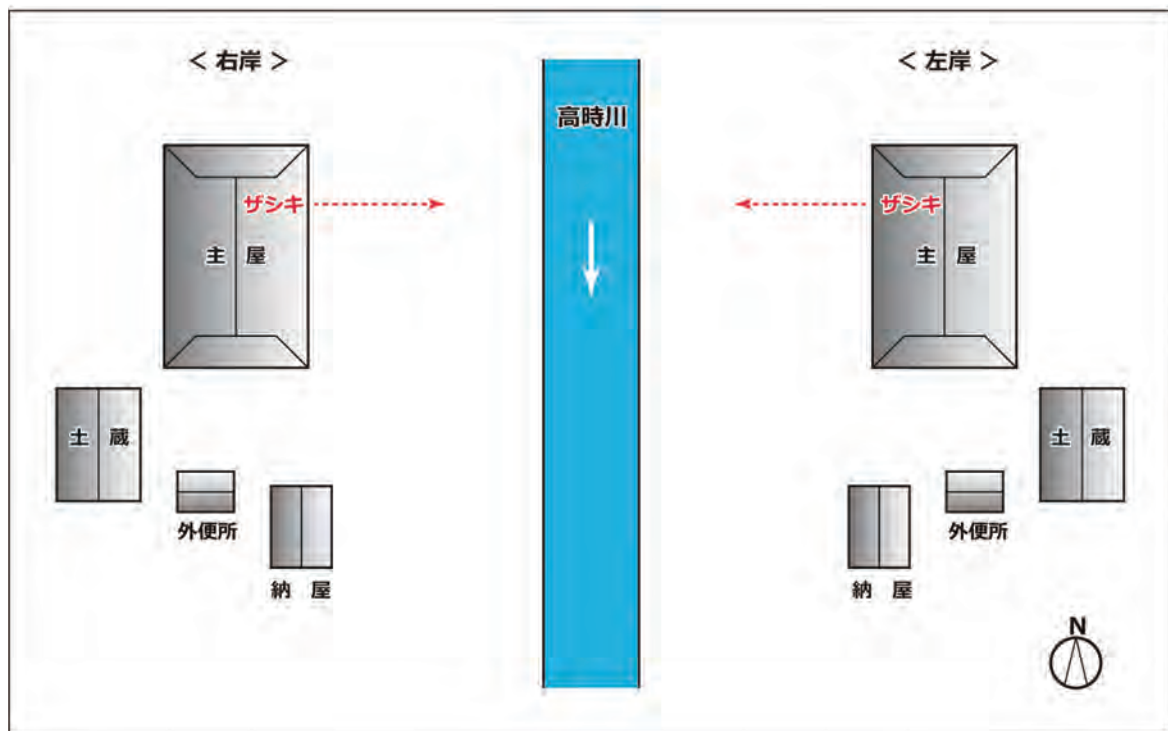


図3-5-1 菅並集落の屋敷配置モデル図

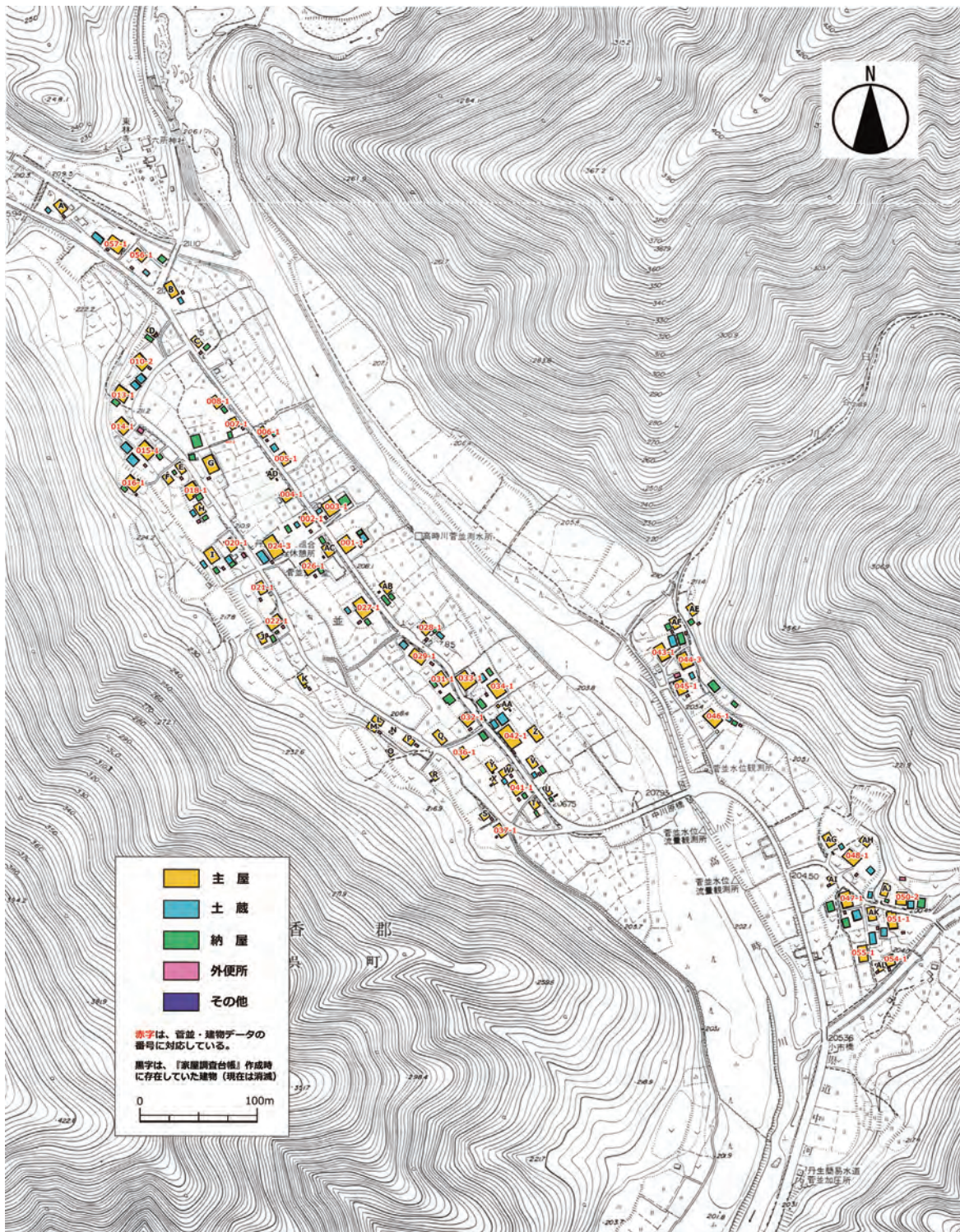


図 3-5-2 『家屋調査台帳』による菅並集落の建物分布図

## 第6節 民俗儀礼にみられる空間要素

### 1. 菅並集落の村落空間

菅並集落は山間に所在する河川沿いの小盆地に立地する村落である。このような山間盆地村落では、土地利用は川を中心にその両側に耕地が広がり、川に沿った低地の外周部、山の麓に民家が集合する集落が立地することとなる。民俗学者の福田アジオは、滋賀県の村落をもとに発想された、ムラ（集落空間）—ノラ（耕地空間）—ハラ・ヤマ（山野空間）が同心円的に立地する三重同心円モデルを提唱し、これは多くの事例に適合されるモデルとして採用されている〔福田アジオ 1980〕。ただ山間盆地集落においては、福田の語を用いるとむしろノラ—ムラ—ハラ・ヤマという同心円構造をとることが多い。菅並集落もその典型的な例とすることができるだろう。また河川が中央に流れることから、当然のことながらこの構造は中心と周縁というだけではなく、水の流れに従った上下の関係をもつことになる。伝統的建造物群の理解では、当然のことながらムラの部分が重視されることとなるが、ムラやその構成要素であるイエも、その成立や持続の過程を考える時には、耕地や山林と不可分の関係にあることはいうまでもない。そのような視点から本節では、集落空間・耕地空間・山野空間の構成を、高度成長期以前の時代に焦点をあてて叙述し、末尾で相互の関係についてもふれることとしたい。

以下の叙述では、令和2年から4年（2020～22）に聞き取り調査およびフィールドワークによって得たデータ、および昭和52年から53年（1977～78）に滋賀県教育委員会が実施した民俗調査のデータ（以下『昭和データ』と略記）を主たる資料とする。またその他の報告書類も適宜参照したい。『昭和データ』の成果は『滋賀県民俗地図』〔滋賀県教育委員会 1979〕に整理されているが、個別の集落別の詳細については刊行されていない。菅並集落について調査日は不詳であるが、調査者は白崎金三氏である。昭和期以降の民俗の変化が著しく現在では聞き取りできない内容も多く含まれていることから、以下『昭和データ』を援用しながら菅並集落の民俗環境について説明していきたい。『昭和データ』からの引用については「」を付すこととする。

### 2. 集落空間

#### 1) 家

集落空間の主たる構成要素はいうまでもなく家である。家空間の現状については、第3章第3節および第4節で詳説されることから、ここでは『昭和データ』からわかる昭和後期の状況を中心に説明しておきたい。

#### （間取り）

菅並集落の民家の間取りは大半がいわゆる余呉型民家のものであり、土間と3部屋によって構成される。



土間はニワと呼ばれ、広い面積に野菜や農具などがおかれ、かつてはツシにあがるはしごがかけられていた。ニワの一部はカッテバとなり、これについて『昭和データ』では「炊事をしたり風呂をわかしたりする。ニワの半分をこれにあてる」「カマド、流し、井戸、風呂場、シバ小屋がある」と記されている。また竈はフドと呼ばれ「四隅に花崗岩の石をたて、そのまわりを赤土と石灰でつきかためる。前に石組でたき口を作り、上に金輪を置く」「大小二個を連結し鍋の大きさに応じて使用。最近ほとんど煉瓦につくり変えられた」とある。

ニワからあがったところにある居間は、『昭和データ』ではドマと記され、「居間兼作業場で一方にいろいろがあり客との応対はここです」とその用途が書かれている。また「昔はこゝをニウジといった」「大正の頃までは土の上にモミぬかを敷き、その上にムシロが敷かれてあつたが現在は板の間としゴザを敷く」と記されている。また当時の状況については「ダイドコ(ニウジ)の部分のモミヌカは取り除かれ全部アゲマ(板張)となり座敷と同じ高さになっているが、旧家では10cmほど段をつけてある。平素はゴザを敷くか晴れの日には畳を入れる」と述べられる。半土間から板の間、名称もニウジからドマ、ダイドコと変化したことがわかる。当時は広間型の間取りが多かったようであるが、現在では居間の部分にも区画を入れて四間取りのものが大半になっている。

現在では囲炉裏を持つ家は少ないが『昭和データ』には、囲炉裏の座名として、主人はカミザ、主婦はオナゴザ、客はヨコザに座り、下座はイロリ座とよばれ子どもなどが座ったことが記されている。オナゴザは「ナベ座ともいって戸棚や炊事場に近い方」であった。囲炉裏の上にはアマがつるされていたが、これは「杉などの角材(3寸角)を幾重にも編んだ縄で三か所につるし其の上に丸竹を渡し冬季ものを乾かすのに使用」するものであった。自在鉤は使用せず囲炉裏には五徳が置かれていた。この五徳そのものを三方荒神と呼んでいたことも『昭和データ』に記されている。

ザシキは「特別の客がある時や祭りなどの年中行事の他晴れの時使用」される部屋で「仏間、床の間を設置し、ニウジより一段高くし畳が敷いてある」と『昭和データ』に記されるが、この点は現在でも大きな変化はない。

ネマについては「主として夫婦・子供の寝室や更衣室として使用」「ザシキ同様、畳敷、押入がある」とある。

#### (付属建物・施設)

母屋(主屋)にともなう建物や施設について『昭和データ』は次のように記す。便所は「小便所は母屋の入口につくるが大便所は別棟とする」。小屋は「(納屋)掘立小屋式のものが多く薪炭、農具、時には漬物などがおかれている」。土蔵は「資産家の家のみで全戸にはない。家具や不用の品がいれてある」。隠居は「数軒の家がある」。この記載のうち、便所については水洗化によって大きく変化しているが、小屋、土蔵などは現在でも昭和後期の状況は多く変化していない。また隠居については、それと密接に関係するインキョ慣行について聞き取り調査で以下のようなデータを得ている。

分家はシンヤ、インキョという。一緒の意味である。引退して住む場所もインキョである。うちは離して建てる。土地によってかわる。インキョとはご飯も別。年に何回か一緒に食べる程度。貰い風呂もした。嫁をもらったらしばらくの間貰い風呂をすることもある。次男は親の家に住む。出ていく人も多い。長男は炭焼きなどで（仕事が）えらい、次男はもうけた（得をした）といわれた。次男がインキョをでていくと父母がのこる。インキョのほうが子供が多くて人数が多いときもある。オモヤと世帯はわけてしまうこともある。

これは長男が結婚すると親夫婦は他の兄弟を連れて隠居屋に移るダイエインキョなどと呼ばれる別棟、別屋敷インキョの形である。その結果として、シンヤとインキョは同意となる。「菅並・建物データ」（令和2年（2020）8月）では隠居屋は31棟みられるが、昭和4年（1929）ごろの状況を示す『家屋台帳』（菅並自治会文書）では「隠居」の記載は1例しかなくきわめて少ない。これはインキョが別世帯として登録されていたためか、「納屋」などが隠居屋として機能していたためであろう。

また飲料水については「流れ川の水を使用し飲料水としたため、川に汚水や汚物を流すことを固く禁じされていた。川に遠いところでは井戸水を使用。最近では簡易水道を使用」と『昭和データ』に記載される。流れ川を利用する場合、1段低くして水を取りやすくすることが普通でこれをカワト（洗い場）と呼んでいる。カワトは現在でもまだ数か所みることができると。水路に降りる階段式のもの、水路を引き込んで池状にしたものがある。

#### （家に伴う信仰・儀礼）

家にもなう宗教施設・装置としては、座敷に設置される仏壇・神棚の他、カッテバに愛宕の札を貼ることもある。神棚には伊勢神宮や多賀大社の札を祀り、他に神棚を作ってエビス・ダイコクを祀る家もある。

また家によっては野外にダンジュクと呼ばれる神を祀っている。これは大將軍からきた言葉と思われる。大將軍は一般的にはムラの境界祀られるが、若狭地方や滋賀県湖北地方では家の神として祀られることが多い。現在ダンジュクを祀るのは3軒であるが、『昭和データ』には次のように記される。「大將軍（ダンジュク）のある家が7戸ある。11月23日をダンジュクの命日として酒、餅、赤飯などを供える。ダンジュクは五輪塔の家もあるが自然石が普通である。」



写真 3-6-1 ダンジュク

## 2) 集落 (屋敷地)

次に菅並集落の集落空間についてみていくこととしたい。集落は基本的には家の集合体であるが、その他にも道路や水路、宗教施設などさまざまな要素によって構成される。この項では歴史的な変化を視野に入れて集落空間の構成を述べていくこととしたい。

現在の菅並集落は30戸弱であるが、明治15年(1882)の「滋賀県物産誌」によれば79軒、290人であり、随分と減少していることがわかる。

図3-6-1は明治初期の地籍図をもとに当時の住居を復元したものである。当然、現在よりも戸数は多いが、字上野から字東繩手にかけての集落と、字西繩手周辺の集落の間には家がなく、右岸の家は大きく2つに分かれている。左岸の家も字白谷口周辺の家と、字小市の家に大きく分かれ、全体としては4つに分かれていたことがわかる。現在の集落は字東繩手の道にそって多くの家が建っているが、当時は字西繩手の道沿い、すなわち山沿いの家が多かったことも読み取れる(図3-6-1)。

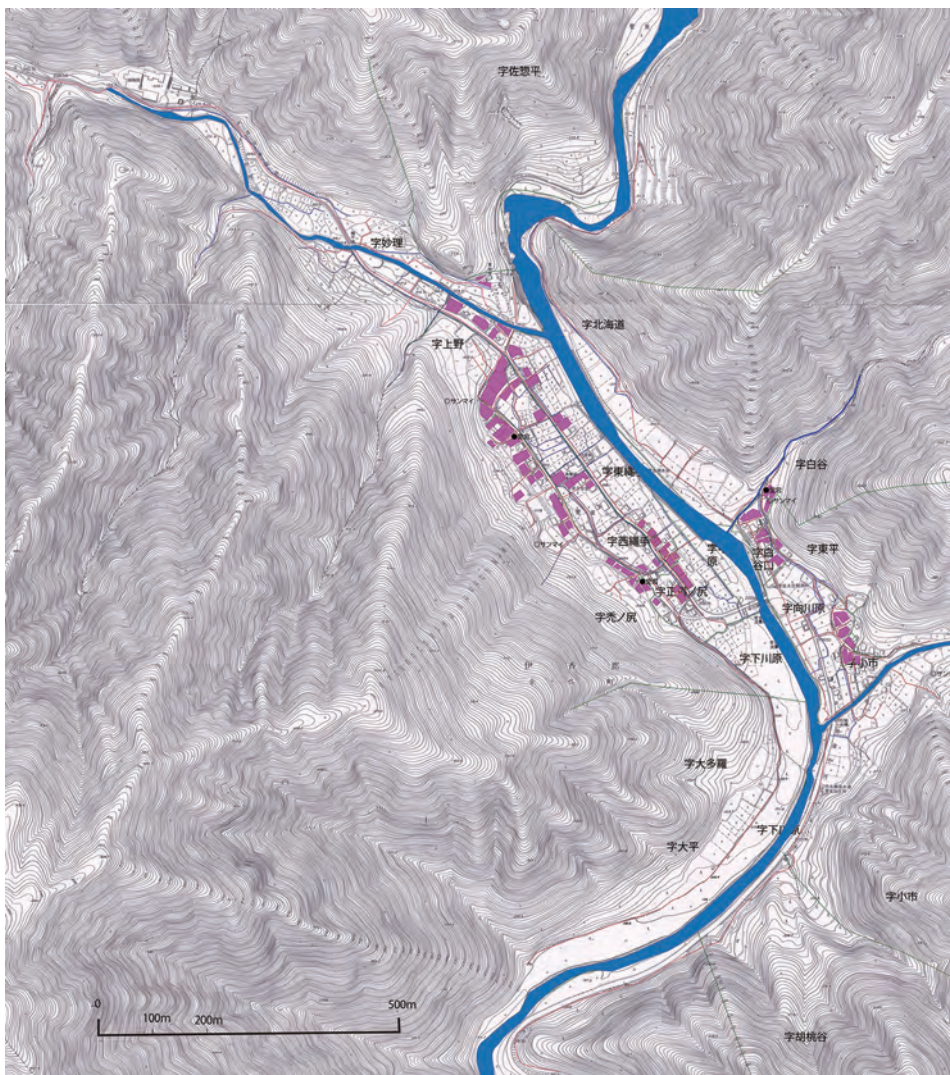


図3-6-1 明治地籍図の住宅復元(赤が住宅)

(宗教施設)

図3-6-2は菅並集落の宗教施設などの分布である。現在は集落の北方に六所神社、洞壽院が所在し、集落の全戸がその氏子、檀家であり、六所神社の西側には東林寺（観音堂）があり、これも集落全体の祭祀の対象となっている。しかしながら滋賀県公文書館が所蔵する明治期から昭和期の史料をみると、これらの他に表のような宗教施設があったことがわかる。

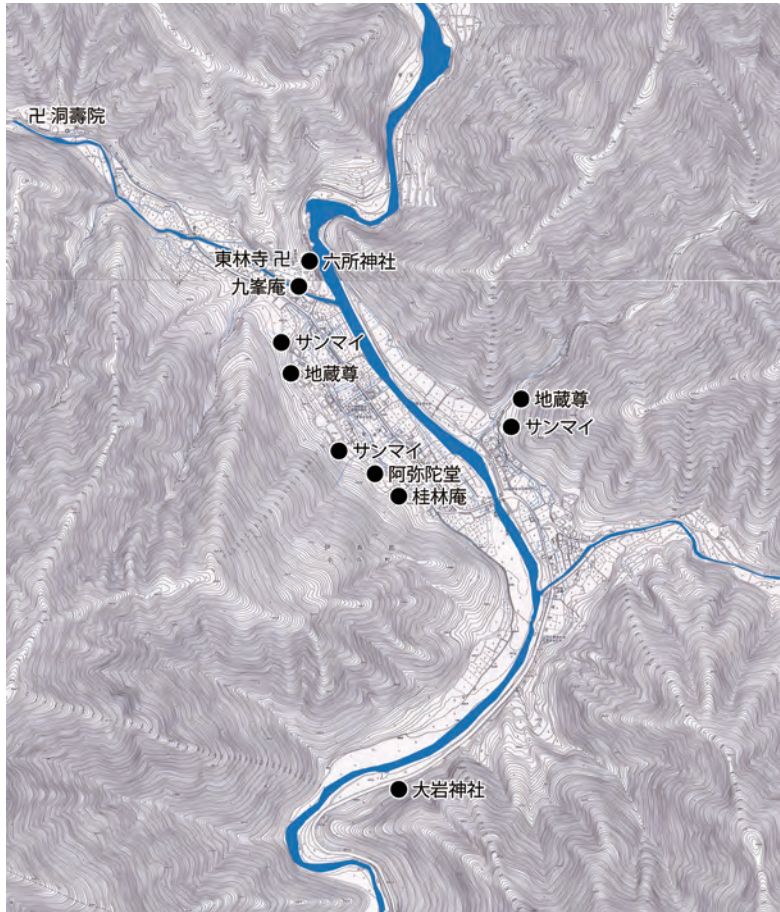


図3-6-2 宗教施設図

社寺名	位置	廃止の時期・事情	典拠史料
桂林庵	字兀ノ尻 812 番地	明治 10 年 4 月 1 日に認可	「廃庵之儀ニ付御願書」
九峯庵	字妙理 460 番地	明治 10 年 4 月 1 日に認可	「廃庵之儀ニ付御願書」
地藏尊	字白谷 288 番地		
地藏尊	字上野 606 番地		
阿弥陀堂	字兀ノ尻 841 番地		
大岩神社	字蜷ヶ嶽	明治 41 年 9 月 25 日に認可、 六所神社に合祀	「無格社廃社済届」

表3-6-1 菅並集落の廃止となった社寺

桂林庵は高時川右岸の字兀ノ尻にあったが、「廃庵之儀ニ付御願書」（滋賀県公文書館所蔵）によると、梁間4間、桁行2間の本堂を持っていたが、檀家もないために廃堂とし、仏像什器などは洞壽院に納めることを願っている。また九峯庵は高時川右岸の字妙理460番地にあり、梁間4間半、桁行6間半の本堂があったが、やはり無檀家であったため廃堂を願っている。また大岩神社は菅並集落の領域南端に近い場所に所在したが、「丹生村大字菅並字蜷ヶ嶽無格社大岩神社廃の件」（滋賀県公文書館所蔵）によると、所在し腐朽した社に「只一箇ノ石ヲ納メアルモノヲ以テ存置ノ必要ヲ認メズ」といった状況でありで廃社を願って、六所神社に合祀されている。「神社明細帳」によると本殿は「桁行壹尺、梁行貳尺」という小祠であった。

また2つあった地蔵堂は字白谷288番地上の606番地に所在したが、その場所は現在ともに愛宕の札を納める施設があり、宗教空間としての名残をとどめている。また字兀ノ尻841番地にあった阿弥陀堂の故地にも愛宕の札場が設けられている。これらの堂は昭和17年（1942）に廃され、仏像などは観音堂に安置されている。ただ、これらの廃堂の敷地は現在も保たれ、愛宕の札場となるなど、ある種の宗教空間としての性格は現在に引き継がれている。

#### （水の利用）

集落の構成を考えるとときに重要なのは、集落内を流れる水路である。菅並集落では右岸、左岸とも集落内に水路が引かれ、かつては多くの屋敷地に洗い場が設けられていた。洗い場はカワトやイドと呼ばれる。右岸の水路は妙理川から取水して、集落の北端で分水し、



写真 3-6-2 愛宕の札場（菅並のケヤキ）



写真 3-6-3 阿弥陀堂の故地



写真 3-6-4 愛宕の札場



写真 3-6-5 集落内の洗い場（No.002）

字西縄手、字東縄手の道にそって流れる。また山から流れる小谷川の水を利用する屋敷地もある。左岸については白谷川から取水して山沿いに水路が流れている。かつては小市川から取水する水路も使われていた。いずれも高時川からは取水せず、妙理川・白谷川といった支流の水を利用しているのが特色である。水路そのものはコンクリート舗装されているので、洗い場も旧来の姿をとどめるものは少ないが、段差を設けて水路に降りられるようにしたものや、屋敷地の内部に水を引き込んでイケを設けたものなどがみられる。



写真 3-6-6 集落内の洗い場 (No.003)

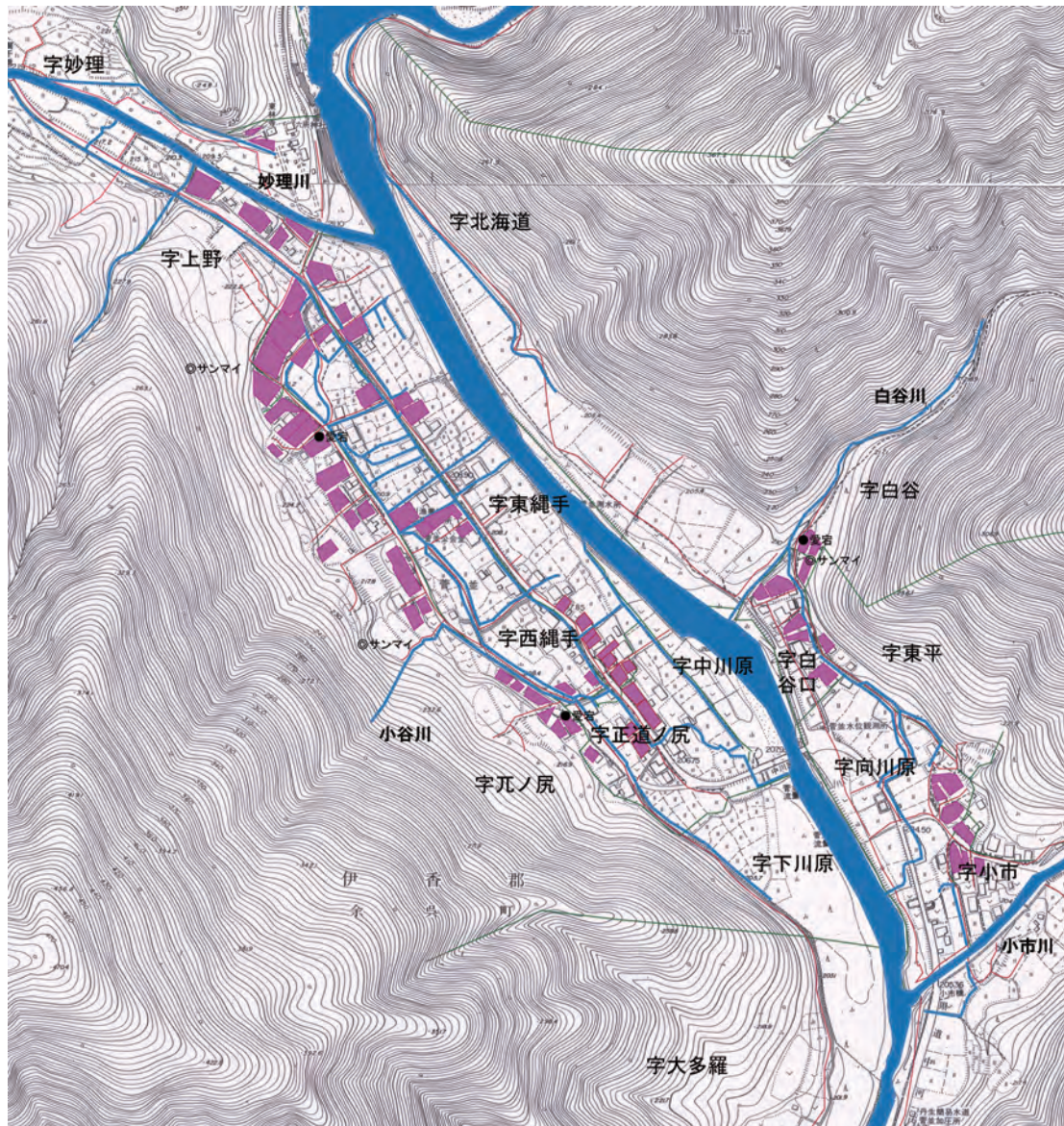


図 3-6-3 菅並集落内の水路図 (青線が集落内の水路)

### 3) 集落全体の行事

#### (現在の宗教施設)

現在、集落全体で祭祀している宗教施設は、先述のとおり六所神社・東林寺（観音堂）、洞壽院などがあげられる(図3-6-2)。また、かつては七々頭ヶ岳にあった観音堂を摺墨集落・上丹生集落とともに祀っていた。集落全体として行っている行事を以下、簡単に紹介することとする。

#### (みくじ取り)

2月の第1週の土曜日に、各組でそれぞれ全戸が集まり、みくじ取りを行って新頭人を決定していた。大頭人・観世音・七々頭観世音の新頭人をこの時決定する。各組の地蔵・阿弥陀の頭人はこの後にそれぞれで決定する。

社守がお祓いをして清めた後、みくじ取りと呼ばれる竹筒に入れたクジを各人が引いていた。現在は各組では集まらず、宮司・氏子の4人・区長が5～6人集まり、半紙に丸を描いたものを容器に入れて引くという形式に変わっている。クジを引いた後、神社の係が新頭人の家にくじを見せて知らせ、家人が了承すると新頭人が決まる。みくじ取りが終わると御膳を出して直会を行う。

#### (元旦祭)

1月1日に年明けの行事として六所神社で行われる。まず、大晦日に本殿に餅、御洗米、オブクサン、御酒、山の物、野の物、海の物を供え、灯火を立てる。昔は三方が幾つにもなるほど供えたが、現在は生活改善として1つの三方に収まる程度に減らしている。頭人らは役の者と酒を呑み交しながら賑やかに供物を捧げる。供え物は集落中の地蔵や愛宕などの各小祠、観音堂の他、ナメズリ岩や山の神、社務所の中の神棚などにも供える。観音堂などでは住民が切って来て用意した花を立てる他、オブクサン（供物）など堂の中のそれぞれの仏像前に同様の供物を供える。祭典が終ると皆で乾杯し、自治会長があいさつをする。直会のような食事はしない。このあと各戸に御札を配る。

#### (年頭祭)

1月3日の午後から洞壽院で行われる。寺の住職の他、僧が6～7人、寺の役員が集まる。般若心経とともに転読、説教も行われる。読経が終わると一般の参列者は帰路につく。洞壽院の年頭祭の際に御札をもらってくる。十六善神の御札といい、玄関に魔除けとして貼ることが多い。集会所などにも貼っておく。

#### (大頭人の頭渡し)

1月11日に行われる頭渡しの行事である。旧大頭人は当日までに直会の賄いを用意しておく。当日は旧大頭人の家へ社守が拝みに行き、清めてから、村中から手伝いを呼んで五升

餅を搗く。この後、社務所に集まり、10時頃から頭渡しが行われる。供物は鏡餅、お洗米、御神酒、山の物、野の物、海の物などで、基本的に元日の供物と同様であるが、小さな盆に羊羹なども供えた。また参列者は各自で小餅を搗き、持って来る。供物を配した後、社務所の祭壇に飾っておいた大頭人のオカワサン（鏡餅をつくるときの円形の型）を旧頭人（アゲトウニンという）から新頭人へと渡す儀式をする。

この時には、高砂や千秋楽の謡いがある。儀式が終わると宮司が祭事の流れを知った村人に頭人に盃を廻すといった一連の指示を出す。昔は1軒につき何軒も親類を呼び集めて行事を行い、こうした参列者があると全員に御神酒の盃を廻した。儀式のあと膳が出され直会が行われる。

直会が終わると新頭人、宮司、参列者一同の順で帰宅する。新頭人は帰宅の際、オカワサンをオカガミサン（鏡餅）、御供物などの授かりもんとともに晒で包み、その上から風呂敷で包み、さらに藁で編んだビクという背負子でおぶって持って帰る。特にオカガミサンとオカワサンは落とさないように気を付けて持って帰る。旧頭人は残って掃除し、最後の仕事を終える。またオカガミサンは鏡割りをしたあと、全戸に配布する。

昔は、女性たちは賄いの準備など裏方の仕事にまわり、祭事には出席できなかったが、現在は女性も参加できるよう改革を進めている。また現在は三々九度も1周したら終えるなど簡略化し、1時間ほどで儀式を終え11時頃から直会となる。

なお、オカガミサンの配布は大頭人・観世音の祭の際に全戸に配られる。七々頭観世音の時は行わない。地藏のオコナイの際は各組で個別に小さな丸の餅を作っておき、1軒あたり何個ずつと分配する。オカガミサンはない。

#### （観世音のオコナイ）

1月17日に六所神社横の観音堂で行われる。菅並集落は雪深いため、この祭を最後に2月まで行事は一旦なくなる。

#### （ヤマコ（山の講）祭）

昔は2月中にヤマコ祭（山の神の講）を行っていたが現在は中止している。特に決まった日取りは無く、社守の都合に合わせて日時は変動していた。ヤマコ祭には山芋の汁を出していた。

#### （観世音の供養祭）

3月23日、彼岸の中日に行われる。

#### （湯の花行事）

社守、自治会長、氏子主任が参り、1年間の野の仕事の安全と豊作を祈願する。日時は特に決まっておらず、3～4月にかけて、社守の都合の良い日に合わせる。湯の花行事ではヒト



ギモチ（米粉を丸めたもの）を作り、これを蒸し、醤油をかけて食べる。湯の花行事の時だけに食べる餅である。

（4月の大掃除）

4月5日前後に神社、墓、寺の3か所を総出で掃除する。こうした大掃除は8月の盆前の掃除、11月の新嘗祭前の掃除、12月の観音堂の大掃除等でも行われる。

（例大祭）

4月11日に行われる。祭の前には老人クラブが準備として大掃除を行っている。秋祭りは特にない。

（虫送り）

6月下旬に虫送りをした。六所神社で火をもらって松明に火をつけた。各家から松明をだす。100本近くになる。松明は萱や稲の穂、杉の葉などをいれて竹で外を囲む。旧道を進み中川原橋をわたり、トンネル前の道に行く。ゴウザカイの片橋まで行く。ここに地蔵があって天照皇太神の札を納めていた。虫送りは昭和50年（1975）より前になくなった。

（ソウニツク）

6月中にソウニツクを行う。総出作業のことである。

（サイタツ祭）

昔は田植が遅かったため、5月から6月中の不定の日にサイタツ祭を行っていた片橋・小市・白谷・寺の上・下川原・アラダの田のトメ（端）に棒をたてて天照皇太神の札を納めた。結界の札をたてる耕地空間の境界が強く意識された行事といえる。

（七々頭観世音の供養祭）

6月1日に七々頭観世音の供養祭が行われていた。菅並集落と上丹生集落の者が山に登り、道普請をしながら山頂の西林寺を開いたあと、山頂部北方にある瑠璃池の掃除を行う。昔は1日に固定して行われていたが、現在は6月1日前後の日曜日に変更されている。30年程前は菅並集落・摺墨集落・上丹生集落の小学生が全員一緒に登ったもので、学校行事となっていた。

（施餓鬼法要）

8月15日に、洞壽院にて施餓鬼法要が営まれる。施餓鬼法要へ参ったあと、自宅に帰って仏壇に供えたものを川へ流していた。現在は流す行事はなくなり、収集の際に出している。

#### (野神祭り)

8月16日は野神のオコナイが行われる。昔は当番があったが、今は自治会の氏子係がしている。これは役員が兼務している。



写真 3-6-7 野神祭り

野神の塚は、平成17年(2005)の豪雪で潰れて積みなおした。平成19年(2007)に鳥居を建て替えるときにもさわった。それまでは塚と木の鳥居があった。櫨の木があって

そこに大きな蛇がいた。4mくらいあった。社守がいたときは石を積んでいた。

また野神祭りに昔は太鼓踊りをした。太鼓踊りは昭和40年(1965)までした。太鼓は集会所にある。平成8年(1996)に集会所を建て替えるときに処分する話もあったが残した。昔は舞殿の横で太鼓踊りをした。昔は野神祭りに大頭人も参った。今は簡素化で参らない。

#### (開山忌)

9月14日、15日に洞壽院で開山忌がある。例年一般の参拝客も集め行っているが令和2年(2020)は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、役員のみで行った。

#### (観音堂の大掃除)

12月11日に観音堂の大掃除が行われる。これは日程が不動で、確実に行われる。

#### (月例祭)

毎月11日は、役員の方が全員神社に参列し、例祭を行っている。

神社の掃除は、北組・中組・東組が輪番で毎月1回神社の清掃を行っている。各組の組長が清掃の日を決める。月初めなどではなく、都合の良い日取りでそれぞれ行う。

#### (集落全体の行事の特色)

以上が、現在の時点で行われている、あるいは聞き取りが可能な行事である。行事の大半の場が、洞壽院、六所神社、東林寺(観音堂)といった集落北西部の宗教施設に集中し、野神や山の講といった民俗行事もその周辺で行われている。集落空間の境界を示す行事はそれほど顕著なものではなく、かつて行われていた村境まで松明をもって災厄を追い出す虫送りや、田畑のトメに結界の札を建てるサイタツ祭などは、むしろ耕地空間の境界が強く意識された行事といえる。

## 4) 村組単位の行事

(現在の組単位の行事)

菅並集落は現在、3つの村組がある。北組は12軒、中組は9軒、東組は7軒で構成されている。北組、中組は高時川右岸にあり、北組が上流側である。東組は左岸にある。組単位で愛宕の札を祀るが、この場所は先述の通り、かつて地藏堂や阿弥堂があった場所である。現在は、東組、北組の地藏と、中組の阿弥陀如来像は観音堂（東林寺）に祀られている。これらは昭和11年（1936）3月に移されたものであるが、現在でもそれぞれの仏のオコナイ行事は組ごとに行われ、頭人も別々に選ばれている。

(かつての村組単位の行事)

当然のことながら昭和11年（1936）以前には、地藏や阿弥陀のオコナイ行事は組ごとにそれぞれの堂で行われていた。また菅並集落の墓地は、現在は1か所だけであるが、かつては4か所に分かれており、それぞれ近隣の家が利用していた。さらに、明治10年（1877）に廃寺になる前は、桂林寺（字兀ノ尻812番地）、九峯寺（字妙理460番地）といった寺院が存在した。これらの宗教施設の改廃状況を見ると、近世までは村組あるいは、東組を字白谷・字小市にわけた4つの小集落で、それぞれ独自の宗教生活が営まれていた状況が想定できる。近代以降、宗教施設の合祀などを経て六所神社や洞壽院の比重が高まっていくが、これは集落の社会的結合の場が、村組や小集落から菅並集落全体へと変化していく過程で生じた現象と思われる。

## 3. 耕地空間・山野空間

## 1) 生業の歴史的変化

伝統的建造物群を主題化する本報告書の中心的対象はもちろん集落空間にあるので、耕地空間、山野空間については簡潔に説明をしておきたい。

現在、高度経済成長期以前の菅並集落の生業を住民に聞くと、かつては炭焼きなど山仕事が生業の中心であったという話を伺うことが多い。これは多くの山村で聞く話と同様であるが、炭焼きは販売によって現金収入を得る生業であり、商品・貨幣経済の進展と無関係ではない。残念ながら、菅並集落では近世の生業を知りうる在地の史料は皆無であることから、幕府などが作成した広域を対象とした史料からうかがうしかない。

史料名	年代	石高
正保郷帳	正保年間（1644～48）	172.210石
元禄郷帳	元禄14年（1701）	179.696石
天保郷帳	天保5年（1834）	182.563石
旧高取調帳	明治元年（1868）頃	152.363石

表3-6-2 郷帳類一覧

これらの郷帳類によれば正保年間（1644～48）にすでに菅並村の石高は172石であり、これは近世を通じてそれほど増えておらず、むしろ明治初年には減少の兆しもみられる。もちろん、この石高は水田だけではなく、焼畑を含む畑地や屋敷地を含んだものである。明治14年（1881）の「滋賀県物産誌」には、菅並村の耕地空間・山野空間について次のように期されている。

- 田地 二五町二反九畝三歩 地価金一 一、〇八二円九二銭、播ス所ノモノハ米穀ニシテ河内早稲ハ一〇分ノ九ニ居レリ
- 畑地 九町九反七畝二九歩 地価金一、七〇八円五六銭 播ス所ノモノ多クハ桑ナレトモ其間ニ寂麦菜蔬ノ類フ播セリ、而シテ其桑ノ播種年月詳ナラス、年々産スル所ノ生葉収獲高几一二、〇〇〇貫日、之レヲ各自ノ需用ニ充テ、残額アレハ他ニ売レリ、其景況近世ニ比スレハ今ヤ大ニ繁茂シテ隆盛ナリ、而シテ茶園ノ如キハ僅カ畦畔ニ播種スルモ各自ノ需用ニ供スルニ足ラス
- 宅地 一二町一反九畝七歩 地価金八九〇円六六銭
- 山地 一三九町七反一畝二七歩 地価金二七九円四七銭 一〇分ノ九ハ柴山ニシテ其一フ立木山トス、其樹ハ雜木多クシテ材木トナスヘキモノ有ト雖モ僅少ナリ、而シテ其景況今ヤ大ニ衰微ス
- 林地 一畝一四歩 地価金三銭 杉樹ニシテ伐木ト為スニ足ルモノナシ、其景況古今同シ

この記載から耕地の多くは水田であり、その面積は25町に及んでいたこと、畑の多くは桑畑であり養蚕が盛んであったこと、山地の多くは雑木からなる柴山であり材木の伐採はわずかであったことがうかがえる。また同書には農業上産物として次の表が載っている。

物名	播種地反別	肥料	産額	近世比較増減	費消	残（不）	売（買）
粳	町反畝 23.7.5	干草	石斗 286.	石斗 41.	石斗 422.	石斗 (166.)	(坂口村)
糯	1.5	同	15.	2.	21.8	(6.8)	(中ノ郷村)
大麦	2.	同	8.		8.0		
稗	4.1.6	同	17.	2.	17.		
大豆	3.1.	同	12.8	1.8	15.6	(2.8)	(上丹生村)
蕎麦	5.5	同	2.2	-1	5.		
麻		同	貫 29	貫 -1	貫 29		
桑		同	12000		12000		

表 3-6-3 農業用産物第一

物名	製造家数	産額	総価格	近世比較増減	売先
繭	22 軒	96 貫	192 円	-16 貫	
生糸	22 軒	13	507.	10	下丹生村
楮皮		100	17.	10	濃州広瀬村
炭	50	68400	1368	28400	木之本村
* 諸		230	34.50 銭		

表 3-6-4 農業用産物第三

これをみると、水田の大半では梗が植えられ、その取高は 286 石になるので、近世と比べれば相当収量が増えている。またその他に糯米、大麦、稗、大豆、蕎麦などが植えられているが、収量はいずれも少ない。目を引くのは桑であるが、そのすべてが村内で消費されており、養蚕が盛んだったことがうかがえる。表 3-6-4 では繭や生糸の生産を行っていた家はいずれも 22 軒で、合計で 700 円ほどの販売額になっていた。その倍程度の販売額を示すのが炭であり、50 軒が炭の生産にあっていた。当時の菅並集落の戸数は 79 軒であるからその 3 分の 2 程度が農業の傍ら炭焼きに従事していたこととなる。炭の生産量は近世の 2.4 倍となっており、明治以後炭の生産が大きく増えたことがわかる。

以上のことから、近世末から明治初期にかけての菅並集落の生業は水田での稲作と、養蚕による繭や生糸の生産および炭焼きが中心であったことがわかる。炭焼きは近代以降大きく生産額が増えているが、それ以前は稲作と養蚕が生業の中心であったことが推測できる。

## 2) 耕地空間の構成

先にも述べたように菅並集落は山間の村落ではあるが、かつては水田における稲作が生業において大きな意味合いをもっていた。水田を空間として秩序づけるのは水路であるが、菅並集落の場合、水路は農業用水路として独立して存在するのではなく、集落内水路としての性格を併せ持っていることが特色である。

右岸の水路は、高時川との合流地点よりやや上流で、妙理川から取水したものが最上流の水源となっており、集落に入ると 2 筋に分かれ、字西縄手、字東縄手の道に沿った家々の集落内水路として利用される一方で、水田にも利用される。字東縄手を流れる水路は集落の南端で高時川に落ちるが、字西縄手の水路は山から流れ下る谷川の水を合わせて山沿いにさらに南へと延び集落より南側の水田を潤している。

これに対して左岸では、白谷川、小市川に堰を設けて水路を引いているが、白谷川よりも上流側の水田は高時川をさかのぼったところに堰を築いて水路を引いている。

また、洞壽院などがある妙理川左岸の水田は、洞壽院から妙理川を 1 km 程度さかのぼった地点に堰を設け、山沿いに水路を引き灌漑をしていた。これらの水田の多くは現在では耕作放棄地となっており、水路の様相もわかりにくくなっている。

以上より、かつて 25 町余にも及んだ菅並集落の水田の大半は、高時川ではなくその支流

ともいうべき妙理川・白谷川・小市川からひかれた水路によって灌漑されており、これらの水路は集落内水路として洗濯や炊事などに大きな機能を果たしていたことがわかる。

先に述べたように明治15年(1882)の『滋賀県物産誌』では菅並集落の戸数は79戸、当時の田の面積は25町2反9畝3歩であった。単純に割り算をすれば1戸あたり3反あまりをもっていたことになる。また、昭和36年(1961)の『伊香の里』第2号〔伊香高校歴史クラブ1961〕によれば、当時は「田の耕地面積は1戸当り平均二反で収穫は五俵である。六俵もとれば最高である」といった状態で明治初期からずいぶん減少している。また同書には「田が非常に少ない原因の一つとして明治二十七(二十八カ)年に大洪水にみまわれて田は半減してしまったという」とも記載されている。これは聞き取りによる記載であるが、明治28年(1895)には湖北地方は大洪水に遭遇しているので信頼のできる内容であろう。この水害によって菅並集落の水田は大きく減少したことが推測できる。

### 3) 林野空間における生業

現在の聞き取り調査では、かつての菅並集落生業は炭焼きが中心であったことをたびたび聞くことができる。炭焼きは昭和30年代までは盛んであったようであるが、当時の様子が『伊香の里』第2号〔伊香高校歴史クラブ1961〕には次のように記されている。

この村の財政をささえているものは製炭業である。これに従事している家は全体の4/7の四十軒である。年間出炭量は約一万六千俵で1戸当たりの年間平均は四百俵であるが、多いところでは八百~九百も出しているがごくまれである。

それに使用される木としては、ホソ、ナラ、イツチキ、などは上木(じょうき)で主に出荷用として焼き、くり、くるみ、ほうなどは一般によくない炭なので前者の粉炭などと共に自家用として使っている。

それを焼くためのかまは大がまで七十俵、普通は五十俵平均である。それで、大体月二回から二ヶ月で三回の出炭を行なっている。出荷の方法は共同出荷ではなくて個人で都合のいい時に出荷している。

このように昭和期には炭焼きは菅並集落の主要な産業となっていた。『伊香の里』にはその他の山の仕事として、藤づるの採取が行われていたことが記されている。これはトウシ(選別具)の網として利用するものであった。

また聞き取り調査では、かつて菅並集落の山では焼畑が行われていたことを聞くことができた。ある話者の話では「かつて焼畑は多かった。ムラの近くにもあった。ワイタニ、上野上などでもあった。話者の母もしていた。赤かぶが中心で昭和43年(1968)ごろには年末に焼畑に取りに行っていた。出荷せず自家用だった。牛蒡もした」ということであった。

『昭和データ』には焼き畑を山バタか、あるいはヤキバタと呼んだことが記され、次のような説明がある。「山の下草を刈った後草が枯れると焼払い、焼残りの木を除いたあとへ種

をまく。第一年目、上の方にはソバ、下の方には山カブラ（内部まで真赤になる在来の特殊品種）。第二年目、小麦をまく。第三年目、山桑を植える。当時は養蚕が盛んであった。」この記述は焼畑が桑栽培などに変化していく過程を示しており、昭和50年代には焼畑はほとんど姿を消したと思われる。

以上のように、高度成長期以前の菅並集落では、焼畑、炭焼きなど多様な生産が行われており、焼畑などは集落から1時間ほど歩いたところでもしていたという。現在よりはるかに広域の空間で住民の生活が営まれていたことがうかがえる。

#### 4・村落空間を象徴するもの

##### 1) 社寺の伝承

菅並集落の社寺にはいくつかの起源伝承が伝わり、それは社寺明細帳（滋賀県公文書館所蔵）などにも記されている。いずれもこの地の自然環境や災害に関わるものであるためここで紹介しておきたい。

明治期に作成された「六所神社明細帳」には、六所神社の次のような由緒が載せられている。

当社ノ左に通路并二高時川アリ、社ノ直下ノ深潭二大蛇住リ、通行ノ人民ヲ害シ之ヲ愁事限ナシ、或時熊野山ヨリ山伏六人当地江来留シ、其歎ヲ救ハン為大蛇ヲ殺シ、之レニ依人民通行ノ愁イ無、村民其恩ヲ報セン為氏神ト崇奉、且深潭ノ傍ニ大石有リ、大蛇其石ヲ舐リ磨キ鏡面ノ如石光シ、彼石ヲ社ノ境内江取揚ケ、其状子ヲ准エ大鏡餅ヲ造リ、六ヶ郷江格番ヲ以、毎年一月十二日ト定テ、雪風雨ノ歎ヲ厭ハス右祭番ノ村江当村ヨリ鏡餅ヲ運遷シ、其祭事昔ヨリ今ニ至テ之ヲ行フ

これは高時川の深い淵に大蛇が住み、人々を苦しめていたが、熊野より6人の山伏がきて大蛇を殺したので、それを氏神として祀ったという内容である。また大蛇がなめたために鏡のように光る岩を模して、奥の6か村（小原村・田戸村・奥川並村・鷺見村・尾羽梨村・針川村）が大鏡餅をつくるようになったことも記されている。大蛇の伝承や6か村からの鏡餅の献上については現在でも聞き取りすることができる。6か村はいずれも高時川の菅並集落よりもさらに上流の村々であることから、この大蛇は荒れ狂う高時川を象徴したものと考えられるだろう。高時川はたびたび氾濫をくりかえし、菅並集落だけではなく各村に大きな被害を与えてきた。令和4年（2022）8月の水害はその最も新しい例である。

また六所神社よりも妙理川をさかのぼった場所にある洞壽院についても「洞壽院明細帳」には次のような由緒が載せられている。

大川ニ深澤有リ是ニ六頭大蛇住害人、山間ニ猛獸アリ、朝夕害人、近隣ノ村民大ニ愁之、師於是茆ヲ結居住ス、常々轉大法輪、故ニ平日六首ノ蛇并ニ猛獸共馴伏シ聴法、則度シ

訖テ六蛇権現ト称号ス、従是安穩村々子孫繫茂シ枝蔓相分テ奥六ヶ村ヲ開ク、蓋シ白山権現現来シ師ヲ引テ其道經典ヲ示ス、首ヲ回テ見之神已ニ化ス谷有り、妙理ト名ク山アリ、塩谷ト名ク閑静無盡ノ境ナリ（以下、略）

ここでも大川（高時川）に大蛇が山には猛獣が住み、人々を苦しめたことが記されている。洞壽院を開いた如仲天閻禪師は信濃の生まれだが、菅並村に来る以前にも越前国坂井郡廉ノ尾村や近江国塩津村で人々を苦しめる蛇を教化したとされている。菅並村に庵を結んでからも6匹の蛇や猛獣を教化し、その後妙理山のふもとの塩谷という閑静な谷に洞壽院を創立したことが述べられている。この伝承からは荒れ狂う高時川に比べて、穏やかな妙理の谷という人々のイメージをうかがうことができる。洞壽院の由緒からは、妙理川をはじめとする支流から水の恵みを得てきた菅並集落の人々の思いを感じることができるだろう。

## 2) 水源地としての洞壽院

先にも述べたように菅並集落の人々は高時川の水を利用することはほとんどなく、その支流から農業用水や生活用水の多くを得てきた。特に、集落内で多くの家が集まる北組・中組では妙理川から得られる水が大きな意味を持ってきた。洞壽院はこの妙理川が山から盆地に入る場所に立地し水源地に立地する寺院としての性格が強い。それは洞壽院の境内を流れる水路の配置からうかがうことができる。



図 3-6-4 洞壽院周辺の水路

図 3-6-4 は、洞壽院境内を流れる水路を示したものである。この水路は洞壽院からさらに 500 m 程度上流で妙理川から引かれ、山沿いを這うように洞壽院の境内に達し、その本堂前を流れて、山から流れてきた水と合流して下流に流れ、妙理川左岸の水田を潤していた。寺院の建物の間を縫うように水路が流れる景観は、水源地に立地する洞壽院の象徴性を示すものといえるだろう。

最初に述べたように、山間盆地に立地する村落においては、ムラ（集落空間）—ノラ（耕地空間）—ハラ・ヤマ（山野空間）という同心円的な空間構成だけではなく、川を基準とした上流、下流という構成が強く示されることになる。洞壽院は集落空間、耕地空間の最上流部、また山野空間の入口に立地していることから、菅並集落の村落空間全体を象徴する機能を有していたといえるだろう。





写真 3-6-8 取水場所



写真 3-6-9 山沿いを流れる水路



写真 3-6-10 本堂横を流れる水路